
押し入れの異世界

コスモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押し入れの異世界

【NZコード】

N3792Y

【作者名】

コスモス

【あらすじ】

大掃除中に自らの黒歴史を封印した押し入れを開けてしまった主人公。

それは、開けてはならないパンドラの箱だったのか？

無職のおっさん予備軍であるところの主人公が神様からもうつたお仕事とは何なのか？

まじめでエッチな主人公が、異世界チートで活躍するおはなし。

1 プロローグを含むようす。

プロローグ

大晦日・・・のイブイブ。
せめて散らかり放題の部屋を大掃除しようと思いつた。いや、思
い立つてしまつた。

実家の2階が私の警備担当区域。そう、私が世に名高い「**自宅警備員**」だ。

33歳にもなつて・・・・。

「**自宅警備員**」それは、高校や大学を卒業後、女子が実際には家の手伝いなんか全くしていないにも関わらず、免罪符のように名乗る立派な職業であるところの「家事手伝い」の男子バージョン。
まあ、私の場合は、10年程は就職してはいたんだけどね。
何はともあれ、だれが考えたのか知らないけど、乾いた拍手を送るうと思ひ。

さて、小学生時代から使つている机の上に、パソコンとCDラジカセ（懐かしいなあ）各種のテキスト。その横のパソコンラックの上にプリンター、真ん中に液晶テレビ、下にDVDレコーダー。

その他には、ベッドに洋服ダンスに本棚。そうそう、エアコンを忘れてはいけない。私はエアコンが無いと、特に夏は生きていけないので。

でも、今年の夏、冷房を掛けると、ときどき盛大に『シュー』『オオオオ・・・ピルピルピル』なんて異音を響かせて、結構な量の水が滴り落ちてくるようになったので、今年から室内にはバケツがデフォルト。

悩みは、この異常音の発生のタイミングが、全く予想が付かないこ

とで・・・

深夜に唐突にやられてみな？死ぬほどビビルよ？

寝入りばなだつたときなんか、ビクツ！ときて間違いなく3秒程心停止したね。

あの感じを、ホラー映画とかで再現できたら間違いなく大ヒットだと思つ。

それはさておき、掃除だ。

窓を開け（何日ぶりだ？）、一通り叩きを掛けてから掃除機をぶんまわし、最後に濡れ雑巾で拭きあげると、『いらないなあ・・・もう・・・』と思われた本や雑誌や年代落ちの参考書といった資源ごみを紐で縛つた。

関係ないけど。こういう時、いつも思うのだが、SMの縛る方の人つてホントに上手だよね？私は微Sなので、縛られたいとも、縛りたいとも思わないが、あくまで、技術として尊敬してます。

最後に、大掃除の一大イベント『昔のマンガを読みふける』もちゃんとやりました。

そして、ふと、きれいな部屋を見渡して、就職した時に封印した押し入れに目が行く。

押し入れといつても、襖ではなく、扉形式の押し入れで1メートル四方のスペースがあり、上下に仕切られている。

中学の頃、上段を空けて座布団とアイロン台と電気スタンドを持ち込んで、内側から扉を閉めて受験勉強をしたのは良い思い出だ。なんか、めちゃくちゃ落ち着くんだ。

しかし、その後は、その隠れ家的な思い出のスペースも、いやだからこそか？高校、大学という7年間の暗黒歴史の産物が詰め込まれた結果、就職時に封印せざるえないこととなつたわけだ。
えつと・・・要するに。『ミニ収集のおじさんだつたり、おにいさん

だつたりにさえ、見られるのが恥ずかしい物「とか」も、大量にあつたわけだな。

でも、もうそろそろ、警備担当者としては『片付けたい！』と、思つてしまつた。

ちなみに、封印の方法として、取手を取り外しておいたので、本当に10年近く一度も開けてない。

中身についても『忘れててしまいたい』という天使と『もう一回くらい見てもいいんじゃない？』という悪魔の戦い？が続いていた結果、具体的に何を入れたかは覚えていない。

一大決心の末、という程ではないけれど、ちょっとした工具を持ち出して・・・ゴソゴソとやること1時間。

開きません。うんともすんとも。どんなに工具を引っかけて引つぱても。

そろそろ、疲れました。自宅警備員に体力を求めてはいけない。とこうことで、押してみた。

「バコン！ズズズズズズズズ・・・」という微妙に重々しい音とともに、あつさり開いたわけだが、えっと・・・私の記憶が確かでなくとも、このタイプの押し入れは外開きのハズ、内開きにしたら、せつかくの収納スペースが殆ど失われる。

壊れたか？？？

それでも、ようやく開いたのだからと、妙な義務感に後押しされ、結構、力任せに押しました。

で・・・

「いじはどうだ！？」
「つかの押し入れですけど」

問われたので即答したよ？

10年程とはいえ、社会の荒波に揉まれた私は、いくつかの貴重な教訓を得ていたわけで、その中に『殺氣立つ「美女」』には、決して逆らってはいけない』というものがありましたからね。

「・・・何をいってる？さっさとまで『深奥の迷宮』最下層域にいたはず！」

「・・・誠に恐縮ですが、本当「は」存じ上げません。こひばどいでしよう？」

「ふざけるなッ！他の仲間はどうだ！？」

冷や汗が伝う、様な気がした。

咄嗟に、『うちの押し入れ』などと答えてしまったが、見渡す限りにおいて、周りはいわゆる石室。

対応ヲ間違エタデショーカ？

慌てて振り向けば・・・おお！石材に訳のわからないレリーフがあり、そこにポツカリと私の部屋が普通に見える。良かつた。

とても奇妙なことに、押し入れの木製の扉の内側が、見るからに堅そうな石材の扉になっていた。『よくもまあ、蝶番が重量に耐えられるなあ』と、妙に感心していると。

「無視しないでもらおう！」

「あ、いえ。無視しているわけではなくてですね。私にも状況が分からぬもので」

誰にでも経験のあることだとは思うが、一方が異常に興奮すると、他方は逆に冷静になつていいくもので、私の場合は以前の仕事の経験で、特にその傾向が顕著なのだ。

でも、5メートル程先で、西洋の長剣？を構えて肩を上下させ、こちらを睨みつける30前後の美女の目が、明らかに『殺る気、満々』となれば、ちよっとだけ、言つてはならないセリフが脳裏をよぎりましたよ？

つまり、『話せばわかる！』と。

これって、死亡フラグでつか？
脳裏をよぎつただけだからセーフ？
でも、黒猫はよぎつただけでもアウトだったか？

1 プロローグを含むようすです。（後書き）

初心者が適当に、好きなように書いてます。
不愉快に思った方、ごめんなさい。

2 「話せば分かる」は死亡フラグではなかつたよひです。

いろいろあつた訳だが、私が武器を所持していないことを示して、どうにか剣を下してくれた美人さん。安心した途端に倒れるように座り込んでしまつた。

なんでも、丸一日この石室に閉じ込められて、何も食べていなかつたそうで。

慌てて、一旦、自室に戻り、警備区域外の冷蔵庫からスポーツ飲料と、菓子パン2個を持って石室に戻つた。

貪るように菓子パンに齧りつき、ドリンクを飲み。一息付けたのは3分後?ええ、3分で2リットルのドリンクと菓子パン(ソーセージ入りとクリームパン)を平らげましたよ。

私の深夜警備のための夜食が・・・もつそろそろ警備員云々のネタはいいか?

「たすかつた、礼をいう。私の名はスン。冒険者をしている」「御丁寧に。私は俊といいます。村上俊。自宅警び・・・ゲフンゲフン。失礼。自宅で仕事をしております。まあ、自営業ですね。よろしくおねがいいたします。」

ぱっと見て美人さんだが、この方、よく見ると「すん」と美人さんだつた。

残念なことに多少薄汚れているし、金色の髪もボサボサになつてしまつているが、透きとおるような白い肌に宝石のようなブルーの瞳、無粋なことにフルアーマー?の西洋甲冑に身を包んでいるため、スタイルは分からん。(でも東洋人のような・・・ハーフか?)でも、身長が私より高く175センチ位で、全体的に細身。フム、期待できそうだ。

という分けで、当面の行動として、スンさんにお風呂をお勧めした。異世界人？にお風呂を勧めるのっておかしいか？どんな美人さんでも、うんこするし、汗臭くなる。アイドルは「うんこしない」なんて幻想は、随分前に、すんごい右手を持つ男子高校生に、ぶち壊される以前に自壊した。

スンさんは、私の部屋に来てからあちこち引っかき回し、窓から見える町並みに驚き、通りを走る車に剣を向け「ここにも魔獣が！」とか、つまりはビビりまくっていたが、危険は無いと認識したのか、漸く、お風呂場に連れ込むことに成功した。

甲冑は私の部屋で脱いでもらい、ファーリーズをシュッシュュしておいた。

彼女のオッパイ？頭から被るタイプのシャツ？の下に、サラシの様なものを巻いているらしくて、サイズは未だに不明だ。
誠に遺憾だ。

自宅の一階にある風呂場に連れ込み、シャワーとシャンプーとボディーソープの使い方を教え、脱いだ服は全て（ここ最重要。テストに出ます）籠にいれるように指示し、出てきた時は、取り敢えず、私が昔使っていた夏用パジャマ（ここも重要）に着替えるように伝えた。

この時点では、蛇口からお湯ができることや浴室のライト、浴室の手前にある洗面所の鏡を見て大騒ぎしていた彼女には、私の黒い策謀を看破することなどできず、言われるままに頷いた。

そして30分後・・・お待たせした。

万民に鬼畜外道と罵られようと発表する。彼女のバストは目測でEカップ以上だ。

歳は30歳前後だと思うが、全く垂れる気配さえなく、ブラジャー

なんかしてないのに私の夏用パジャマの胸部を押し上げ、大きく開いた胸元は、深い谷間を形成している。

所謂、ぱつんぱつんだ！ヒー——ハア——！！！

しかも、胸の盛り上がりのために、上着とズボンとの間に隙間が出来、パカパカしていやがる。

その後、部屋に戻ってグラスにお茶（緑茶）を注いで一息入れるとともに、お互いのこと、特に、聞かれるままに、こちらの世界のことを話した。

まあ、「このグラスが」だの「鏡が」だの、正直、どうでもいいことばかり聞かれた。

ちなみに、一階に戻る階段は、もちろん彼女の後ろだったよ？鍛えられたお尻（恐らくノーパン）と腰の曲線が壮観で、いろいろ大変だったことは報告しておこう。

スンさんの話によると、仲間とパーティーを組んで『深奥の迷宮』に挑み、魔獣を討伐しながら最下層域にまで進んだところまでは良いが、最後の最後、『神魔獣』が居る筈の部屋はもぬけのからで、祭壇の上にあつた水晶のような物を手に取った瞬間に、あの石室に彼女だけが飛ばされ？閉じ込められたのだとか。

それから、丸一日を掛けて、脱出のために石室内部を探つたが、床の転移魔法陣以外は発見できず、体力的にも限界で途方にくれていたとのこと。

ちなみに、神魔獣戦に備え身軽になるために、いくつかの装備と今まで得たお宝の数々、水や食料は部屋の外に置いてきていたそうだ。

「災難でしたね？」

「まったくだ・・・」

話しに一応の区切りができたところで、私は一階に降りることにしました。

たが、彼女は『仲間が救出にくるかもしれないから』と、開けたままの押し入れの扉から見える石室を見張つていていた。彼女のいう魔獸とやらがどんなものか分からぬが、石室に湧いて出た拳句、こちら側に出でこられては迷惑なので、彼女に『よろしく』と伝えて階段を降りた。

さあ、これから、楽しい『お洗濯の時間』が、はじま～るよ～！

堪能した。

あ、匂いを嗅いだりとかではないよ？そこまで変態ではない。匂いがしなかつたとは言わないが！

最初の疑問の解明。彼女のブラジャーは敢えて云うなら、女性用のボディースーツの上半身部分のような形だった。

実にけしからんことに、カップのような形成はされておらず、厚めの生地で、胸前で数か所を紐で縛るという締め付けタイプ。大事なことなのでもう一度。実にけしからん。

まあ、女性が甲冑の下に着るならこう作りになるだろ？なあ、と少し感心はしたが。

予想どおり、パンツは無し。

次々と全自动洗濯機に放り込み、洗剤と柔軟剤と漂白剤をたっぷり打ち込んで「スイッチオン！」。（ここも自動なんだけれどね）

我が家洗濯機は乾燥機付きなので、この量なら45分ほどで出来上がりだが、洗濯機の前で1時間近くも立つ立つていては、洗濯機警備員になつてしまふので、そそくさと一階に戻る。

部屋の扉を開けると、そこには・・・はい、シンさんはお休み中でした。

いやしかし。鞘に納められた長剣を豊満な胸に抱きかかえ、胸元まで捲れ上がったパジャマが絶対領域を形成している。ここにもあつたんだね、絶対領域。

もちろん、下からだけでなく、パジャマの上からは抱きかかえられたために、更に盛り上がったEカップ（推定）が、今にも夏用パジャマの胸元から零れ落ちそうだ。

さらに、横向きで寝ついているため、ウエストとヒップの標高差がああ、曲線があああ！

申し訳ない、つい、取り乱してしまった。

でも、ホントに美人さんだなあ。

それが、私のベッドに横たわり、あられもない姿でお休み中なのだ。これを「据膳」とは言わないが、寝顔を拝見するくらいは許されると思う。

で・・・洗いたての金色の髪は、まだ湿っているが波打つようにベッドに広がり、マスカラなんぞ必要としない長い睫毛が小さく震えている。

小さな桜色の唇は、つやつやだ。

そんなに私を信用しないでほしいのだが・・・

3 考えたら負けのようす。

スンさんを捕獲・・・ではなく保護したのは昼過ぎだつたが、その後のムフフなイベントを消化している間に、彼女が眠りこけてしまつたので、その寝顔を堪能している間に結構な時間が過ぎた。まあ、そればかりではなかつたけど。

まず、まさかとは思つたが、押し入れの扉を開いた状態で固定した。大掃除中、いろいろ考へてゐるうちに、何故か亀甲縛りになつてしまつた本や雑誌達を使って、何かの拍子に閉じてしまふのを防いだわけだ。

本さんと雑誌さんがドSであることを祈る。

スンさんによれば魔獣が出てくる恐れはあるのだが、それよりも次元の壁が閉じてしまつて、彼女が帰れなくなる方が問題だ。

見たところ文明レベルは明らかにこちらが上だが、それでも、こちらの科学技術を使用しても次元とか空間の壁は越えられない。

あ、現状、既にファンタジーを肯定しているが、一方で、科学技術信奉者でもあるから、はつきり言つておくが、将来的にも次元と空間の壁は越えられないそうだよ？

いつぞや、ワープ航法について、その可能性を検討した論文が発表されたのだけど、それによると、ワープ以前に、人為的方法で次元や空間を超えるには、計算上ビックバンクラスのエネルギーが必要だそうで、論理矛盾になるのだとか。

かつて、中一病を患つた私としては、けつこうなショックだつたが、あにはからんや、少なくともSFの世界では、代わりにワームホール理論が脚光を浴び、未だに沢山の作品が作られ、むしろ、以前より、設定に無理が無くなつた、といった効果があるのだとか。

まあ、そんなもんだ。

兎に角、現状で、私の部屋の押し入れとスンさんの世界が繋がっているとするなら、科学的にはワームホールによる一時的な現象と考えられるものの、ワームホールの発生や消滅が一時的とはいえ、その一時は宇宙規模の一時であり・・・つまり、一度、繋がった以上、数百年?いやいや、数千から数万どころか、数億年規模で繋がったまんまの可能性もあるわけだが、だからと云つて油断は禁物。

まあ、このあたり『そんじやあさあ！自宅の押し入れと異世界の迷宮がワームホールで繋がる確率は科学的にどのくらいなんよ？』なんて質問するのも、それの答えを考えるのも無駄だと思つ。現実に繋がっているわけだし、そこの所は、やつぱり『考えたら負けかなあ』なんて思うわけで。

その他には、石室に入つてスンさん同様にあちこち調べてみた。

一辺30~40メートルの多分正方形の石室。

インカ・アステカもびっくりの見事な石組みで、まさに剃刀一枚入りそうにない。

装飾としては、私の押し入れの扉を石室側から装飾しているレリーフ、特に意味のある図形が描かれているわけでもなく、ありふれた唐草模様だった。

模様 자체に意味があるとは思えない。唐草模様自体は、こちらの世界でも、古代遺跡にはありふれたもので、デザイン的に多少の違いはあっても世界中にあるそうだから。

「それにしても、石質はなんだろう?大理石?でも真っ黒だから黒曜石?」

なんせ、表面はピカピカに磨かれて、すべすべ。

気持ちがいいのでペタペタと触っている内に右手の人差指でカリカリつとしてみた。んで、猛烈に後悔した。

ボロボロとあっさり削れてしまった。咄嗟に、明日の朝刊が脳裏に浮かぶ。

『日本人観光客が世界遺産を破壊』

血の気が引く。が、後の祭りだ。

誠に遺憾ではあるが、見なかつたことにしよう。追及されたら「最初からそうだつた」と言い張ろつと決意する……いや、やつぱり、素直に謝ろう。

どうせ、この手のことには責任の取りようがないし、深く反省していますから勘弁してください。

「めんなさい。」「めんなさい。」「めんなさい。」もうしません！

気を取り直して、調査再開。

といつても、さて床の魔法陣。オーソドックスに二重円の中に、三角形を二つ上下逆に組み合わせた図形。その周囲にあるのは模様か文字か？

この手の物は考へても無駄なので、取り敢えず写メに何枚か撮つてお終い。

最大の疑問は、天井の・・・明りか？？？

全体的にぼんやりと光つて石室全体を照らしているが、錯覚で無ければ、壁と同じ材質の石材そのものが光つているような・・・もう少し近くで調べたいところだが、天井までの高さが数メートルあつて良く見えない。

後で、脚立でも持ってきて調べよう。

そういうじている内に、お外は真っ暗になっていた。

12月は流石に日が落ちるのが早い。

慌てて明りを付けたが、相変わらず私のベッドではスンさんは口っぽくお休み中で、でも、エアコンのお陰で寒くはなさそうだ。

だが、私はお腹が空きましたよ？

かつて一人暮らしを10年ばかりしていたお陰で、簡単な料理くらいはできる。

でも、スンさんをこのままにして下に降りるのは、魔獸とやらのこともありますって危険だし、そろそろ起きて欲しいと思う。

こういう場合、声を掛けながらほっぺとか、オッパイとか、オッパイとか、オッパイとかをツンツンして起こしたいところだが、触つた瞬間にバツサリとやられる恐れがあるので、やりません。

結局、少し離れた所から声をかけるという、慚愧に堪えない方法を選択した。

「スンさん、起きてください。スンさん！」

「ううううん・・・・・お願い・・・あと・・・あと、」「・・・・・」

・

「・・・・・」

「・・・あと・・・・5年、寝かせて・・・」

私の得た数少ない教訓に『美人の理不尽には逆らってはいけない』というものがある。

予想の斜め下をいくお返事を頂戴した私は、彼女の暫定放置を決定して夕食を作りに1階に降りることにした。

まあ、生死の掛った緊張状態から取り敢えず解放されたことで、疲れが出たのだわ。

ご飯を炊いて、豆腐の味噌汁を作り、豚肉に生姜焼きの素を振りかけてフライパンで焼く。焼きすぎると、辛くなるので注意。

最近は何でもかんでも激辛にする傾向があつて、『俺はトウガラシの50倍が好物だぜ！』なんて、聞いてもいらないのに自慢げに発表する輩がいるが、なんなんだろうね、あれは？味覚音痴を世間様にカミングアウトして、まずい料理しか作れない女性にアピールしているのか？

まあ、いいや。

付け合わせはキャベツの千切りで良いだろ？。男の料理なんてこんなもんだ。

ちなみに、ちゃんと一人分作りましたよ？

3 考えたら負けのようですね。（後書き）

ん？ サブタイトルはぜひ直すのだね？ ・・・

4 食事のときは楽しい会話をすればいいだけ。

食事の準備が整い、そろそろ正面にスンさんを起しやうかと考え始めた頃、トン・トン・トン、と階段を降りてくる足音が聞こえた。

むむ、生姜焼きの匂いで田を覚ますとは、やりますねスンさん。できれば寝ぼけていた時のように、女の子言葉でお話してください。

男っぽい話し方も萌えますが、そのギャップが・・・

「『飯できますよ、スンさん』

と、声を掛けながら田を向けると、スンさんが剣を右手に台所の口に立つて、頭を盛大に掻いていた。

せっかくシャワーを浴びて汚れを落としたのに、乾ききる前に眠つたせいで、予想通り、長い金髪が暴発している。ベッドに横になつたままなら乱れた髪が色っぽく感じるのだが、立つているとそうでもないから不思議だ。

もつとも、地が美人さんなだけに、『五年の恋も冷める』といつよりは『ギャップ萌え』しそうだ。

「おお・・・すまない・・・」

男前だなあこの人。スンさんはそう応えると、私の向かいの椅子に腰かけ、剣をダイニングテーブルに立てかけた。

箸のかわりにナイフとホークも用意しておいたのだが、スンさんは私の真似をして箸を手に取ると、見よう見まねで食事を始めた。なかなか器用だなあと思いつつも、うまい、うまい、と連発する彼女が微笑ましく思えたが、そろそろ聞かなければならぬことがあ

る。

「といひで、あなた、どちら様?」

「・・・ほお・・・びこで分かつた?擬態は完べきのはずじゃがな
「あらま?当たりでしたか・・・」

このスンさんは偽物だ。

だが、バストサイズとかウエストのくびれとがが微妙に違う、私のエロメガネを見ぐびるな!というわけでは、全然ない。断じて違う!単なる勘だ。

これも勘だけど、多分、体そのものはスンさんのもので『中の人』だけが入れ替わっているようなそんな感じだろうか?

「わははは・・・正解じゃ。まずは、自己紹介からじゃな?わしは・
・神様じゃ」

背景に後光もなければ、玄界灘の荒波もなく、一人きりのちょっと寂しげな夕食の食卓で、急に爺様くさい口調になつたスンさんは、あつさりとそう云つた。

ちょっと、奥さん、聞きました?神様ですって!!!

予想とはちょっと違つていたけど、まあマシな方向だつたから良しとしよう。

魔獸とやらが乗り移つていたりしたら対処のしようがない。

「で、御用件は、やつぱり、うちの押し入れのことでしょう?」

「あんまり、驚かんな?・・・が、話しが早くて助かる。」

「と、おっしゃこますと?」

ファンタジーの世界には、ストーリーとして勇者召喚とか異世界転生とか、いろいろあるが、総じて召喚主や神様に、結構な確率でタ

メロだつたり、タメ口になつたりする。

がしかし、私は現状を無視すれば「社会人」なので、相手が何者であろうと相応の態度、言葉使いで対応すべきなのだ。

PTA・・・ではなくTPOに合わせるのは社会人の常識という話しだ?

「つむ。実はな、そなたに『深奥の迷宮』の最下層域を支配する『守護者』になつてももらいたいのじや」

「・・・・・・・ああ～なるほど・・・・・」

私としては『なるほど。じゃねえ!』と自分自身に突っ込みたい気持ちもあつたが、微妙に納得できてしまったのだから仕方がない。スンさんはこう話していた『「深奥の迷宮」の最下層域に、最後の神魔獣が居なかつた』と。

では、前任者はどこに?

「前任の『守護者』の方は、どうなさつたのですか?」

「あやつは、契約終了と同時に神に昇格して、どこぞで世界を構築しておるじゃろ」

「神魔獣が神様になるのですか?」

「まあ、すべての神魔獣がそうなる、と云う分けではないがの。そもそもじや。神魔獣とは・・・・・」

面倒なので要約すると、神々が作つた世界であつても、人を始めとした生き物が存在する限り次第に闇は生じる。

かつては神々自らが生じた闇をその神力によつて滅していくが、本来、人は神の頂きに迫る『可能性』を宿しているはずなのに、闇を神々が滅していく世界では、まったく進化が見られず、むしろ衰退することが多かった。

一方で、神々が地上への干渉を控え、闇を滅することを止めた世界では、比較的短期間に進化や発展が見られた。

その結果、神々の多くが地上を離れ、人々を見守ることにして、干渉を極力避けることにしたのだが、そうすると今度は、闇の力が人々を飲み込む事態が生した。

そこで、闇をただ駆逐するのではなく、管理することにした。神々は、闇の象徴とも言える魔獸を基本的に迷宮に縛るとともに、迷宮から大量の魔獸が溢れるのを防ぐために『守護者』を置くことにした。

「つまり、神魔獸といつのは、本来魔獸ではなく、神々の・・・使徒。ですか？」

「そう云う事じゃな。なにぶん、役目がら迷宮の最下層域に奉じられておるために、人からは魔獸の神たる存在と誤認されておるがな。魔獸に神は存在せんよ」

「ですが、迷宮を踏破する・・・冒險者ですか？には、神魔獸も討伐されているのでは？」

スンさん達のパーティーが冒險者としてどの程度のレベルにあるのかは分からぬが、既にいくつかの迷宮を『踏破』してきているらしい。

つまり、神魔獸＝守護者を倒している。

まだ、引き受けると決まった分けではないが、守護者を受けた途端に、冒險者たちの討伐対象になるのは正直、御免だ。
それに、まだ、納得できない部分もある。なぜ、私？

「まあ、ある程度のレベルに達しておる連中が相手の場合は、死んだように見せてはあるがの。本当に死んでしまっては、迷宮そのものが機能を失うでな。誤認されておるならいつそのこと、そのまま

にしておいた方が此方としては都合がよいと、姿形も魔獣のようを見せておるのよ。もちろん、そなたが引き受けてくれた場合はじや、十分な能力を授けるで、守護者としての役目は果たせるはずじゃし、後は、まあ、世界をブラブラしながら、適当に冒険者の相手をしておればよい。ああ、ところで、この話し、断つても構わんが、そうすると、そなた。もうすぐ死ぬぞ？」

なんだと？

4 食事のこれが樂しき餘韻をもつべし。 (後嵯峨)

設定があ・・・・めんぢくやうこじや。

5 食後は運動するようですね。

あれから暫く自称神様とのお話しは続き、私の疑問もいくつか解消され、条件付きで、神魔獣・・・いやいや、守護者を暫定的に引き受けることになった。

どうも、私、3日後には死ぬみたいですし、どおせ、ですか。はははあ・・・お正月に死ぬんですか?・・・私、今から、グレテモイイデスカ?

まあ、死んだ瞬間に真っ白な世界に連れ込まれて、とか、いきなり転生させられて、とかよりは事前説明があつた分、良心的?な感じがするが、拒否権のない交渉は不毛以外のなにものでもないわけで。お話しの終わつた後、神様はきつちりと夕食を召し上がって帰つて行かれました。

まあ、そのまま一階に上がつていき、元通りにベットに横になつただけだが。

おおつ!オッパイのはみ出し加減まで、元通り再現しましたよ?グッジョブ!神様!

仕事としては、神様の加護で、こちらの世界での生活は保障されるが、守護者としての業務もこなしながら、異世界を自由に探訪して良いそうだ。

というより、何となく異世界探訪の方がメイン業務のような気がする。

しかも、守護者と神魔獣の関係や神様の存在について守秘義務を守る限り、こちら側の知識や事物の持ち込みも自由だ。

その代わり、神様の加護による生活保証といつても、何もしなくてよい分けではなく、異世界で何らかの収入を得ると、こちら側で同

価値の収入が発生する仕組みになつていいのだとか。

あれエ？・・・それって結局、こちら側の世界では、ですよ？・・・
・世間様的には相変わらず、私つて自宅警備員なんじや？・・・
いいいいやあああああ！

ま、それはそれとして、神様が本当は私に何をさせたいのか良く分らないが、兎に角、二つの世界の行き来には、我が家への押し入れが使用される。

残念ながら、神様といえども、異世界間の「どでもドア」は世界にかかる負担が大きいそうで、押し入れと「神魔獣の間」がデフォルトで繋がったまま、それではとてもなく不便なので、神魔獣の間にある転移魔法陣で、地上との行き来をすることになる。

ちなみに、私が授かつた能力は、前任者が持つていたものと同等の力だそうだ。

もちょっと詳しく、と粘つてみたが、全部分かつてしまつては面白くなかったと返された。

まあ、神魔獣の能力に関する情報なら、スンさんに聞けばある程度分かるはずだし、目を覚ましたら聞いてみようと思つ。

しかしだ。

この人、ホントよく寝るなあ、まさか本当にあと5年も寝るつもりじゃないだろうな？なんてことを考えていたら起きました。

幸い、目が覚めた途端に斬りかかられるといった、心配された事態にはならなかつた。

「・・・うん？うん・・・おはようシユン
「まだ、こんばんわ、ですよ、スンさん？」

それでも8時間以上は眠つていたはずなので、休養十分なのか、ベ

ツドに横たわつたまま、大きく伸びをする。

スンさん、かわいいです、かわいいですけど、やめてください！その幸せそうで満ち足りた、無防備な素敵な笑顔は！美人さんのそういう姿は私には猛毒です。主に精神面で！

さつきの会話だって、恋人どうしならどれだけ甘い会話か！？でも、せつかくなので・・・『ほてま やろ〜〜〜！』（心の叫び）

「お腹、空いてませんか？少しだけご飯が残つてますか？」

「いや、不思議だな？あまり空腹を感じない。さつき貰つた食料は特別なものなのか？」

「いいえ。『ごく普通のパンと飲み物ですよ』

神様が、その体を使って飯食つたとは云えない。

どうでもいい会話で自身の黒い想念を誤魔化しつつ、精神の立て直しを図る。

今更だが、云つておこう。

私は、かなりHだ。それもかなり守備範囲の広い。

ただし、どんな場合でも、相手の明示の或いは黙示の了解がある場合に限る。

「そうか？」

「そうですよ」

せっかく立て直しつつあるのに、スンさんはまた笑顔を見せる。自分でも分かる。耳が赤くなっているのが。

スンさんはそのことを知つてか知らずにか、クスクスと笑う。ああ、駄目だ・・・・・見つめないで・・・

結論から申しましょう。いろいろお話しした末に・・・

スンさんとエッチしました。

抱きしめたスンの体は思った通り、素晴らしい弾力と柔軟性を持つていた。

・・・・・都合により削除されました・・・・・

その後、外が明るくなるまで、何度もスンと交わった。
正確には、明るくなつてスンが息も絶え絶えに「お腹が空いた」と
抗議するまでだ。

なんか、いろいろ「めんなさい・・・すじぐく、良かつた。

5 食後は運動するようですか。（後書き）

ちょっとえつちいですか？

エッチ過ぎたみたいですね。一部削除（11／21）

6 お迎えが来るようです。

それから一日間、食事をする時とスンが気絶した時を除いて、ありとあらゆる男の口マンを叶えて貰つた。スンには、何が口マンなのか分からなかつたみたいだが。

お陰をまで、インターバルでの会話を通じて、いろいろな事が分かつた。と云つても、世界の成り立ちやら、基本ルールだとかは、神様から直接ご教授頂いていたので、主に、スンやその仲間達の情報の方だつた。

「じゃあ、スンさんは剣士で前衛なんですね？」

「・・・ショウ。少し気になるのだが、どうして私を「さん」付けで呼ぶのだ？」「スン」と呼び捨ててくれて構わないのだが？」

少し拗ねたように問いかけるところの、このスンだが、エッチな気分の時は女の子言葉なんだが、何故か、それ以外では凜々しい男言葉で話す。まあ、そのギャップに萌えるうえに「して！？」のサンになつていてるから非常に分かり易くて、大変よろしい。

「スンさんがそう言つてくれるなら、呼び捨てにしますよ？・・・スン・・・」

「ショウ・・・私はいい歳だからな。迷惑かも知れんが・・・だが、私はショウを縛つたりしないぞ？」

「そんなことはないよ。スンは本当に綺麗だ。スンみたいに綺麗な人と・・・なんて、夢みたいだよ。」

そつぱつて、スンの頬を撫でると、うれしそうに微笑んだ。ちなみに、上の会話は全て、一人とも全裸でなされている。

実際、スンは美しい。そして、とても可愛らしくもある。

で、このとき気が付いたのだが、本人曰く、28歳だそうだが、年の割に肌ツヤが異常に良くなはないだろうか？まるで10代の娘のようだ。

女性は性的に満たされると、肌ツヤが良くなるとは云われているが、スンのそれはちょっと異常では？と思われた。

私の守備範囲は異常に広いので、30代だろうと、40代だろうと、その時々の美しさを愛でるから年齢は全く気にしないのだが、今スンを見て、30歳前後と判断する男は、恐らくいないだろう。なんなんだ？まあ、悪いことではないからいいけど。

そんなこんなで、二日間を過ぎし、神様の教えてくれた時間が迫つてきた。

ええまあ、・・・なんだ・・・あれだな・・・。

神様がおっしゃるには、あと数時間後にはスンの仲間の魔術師がお隣に転移してくるので、その人にくつ付いて、一度、迷宮を出るよう云われている。なんでも、私がこちらの世界から消えている間に、「私が事故死する因果律に手を加える」のだそうな。

幸い、スンを迎えてくる魔術師に頼めば、転移魔法陣に手を加えて迷宮の外から直接お隣の部屋に戻つてこられるそのなので、最低三日間ばかり遊んで来いと。

遊んで来いと云われても、先立つ物が無い分けて・・・と思ついたら、ピンときた。

スンからの情報で分かつたことだが、あちらには碌な鏡が無いらしい。というより、そもそもガラス自体が非常に貴重で、基本的に王侯貴族の持ち物。

鏡に至つては、ガラスを完全に透明にする技術や板状にする技術が未発達で、どうしても気泡が混じるし透明にならないので、ガラス

鏡の発想がない。

一般的には、そのまま水鏡か銅鏡が使用されているそ�で、貴族やお金持ちになると、映像を直接映し出す魔術具を使用するらしい。どおりで、洗面台にある縦横1メートルちよいの鏡に、スンの食い付きが良かつたわけだ。

しばらく、固まっていたからなあ・・・

ちなみに、こちらの世界で、昔、使用されていた銅鏡も、腕のいい職人さんが磨くとかなり美しい映像を結ぶのだが、大きなものを作ると、どんなに手を尽くしても素材の重量や温度変化などで歪むため、一定の大きさ以上のものは作られなかつたらしい。

まあ、銅鏡自体が財力や権威の象徴だった太古の時代を除けばだが。なにほともあれ、当座の収入源として鏡を持つていこうと思つ。近くのコンビニに行けば、一つ300円～500円位で売つてゐるだろうし、大小取り混せて、リュックに入れておこうと思う。

「何を考えているの? シュン」

はい、きましたよ、女の子言葉。

さつきまで窓の外を「観察」していたはずのスンが、窓辺に立つてこちらを見ている。

金色の髪が陽光を浴びてキラキラと輝いている。

もう夏用パジャマの上着がデフォルトになりつつあるのに、その姿に異常な劣情を催すのは・・・しかし当然だと思つ。スンは、それ以外何も身に着けておらず、しかも、ボタンさえ閉めていないのだから。

「いやちにおいて、スン

云い忘れていたが、スンと交わるようになつてから、自分自身も不思議に思うことがある。

私は体力には自信がない。子供のころから短距離は得意な方だったが長距離になると全く駄目だったのに、今は、全然、疲れない。

心地よい疲労感はあるが、すぐに回復する。

エッチは別腹とか？んなこたああない。

それなのに、なぜか、スンが気絶するまでやつてしまつ。（かわいいから！）

もしかして守護者を受けた影響なんだろうか？

そんなふうに、私はいろいろ考えを巡らしていたが、いつもどおり、次第にスンの体に溺れていき、スンは私の下で、もう何度目かの甘い嬌声を上げている。

結局、私の思考の終着点は「ま、いいかッ！」だったのだが・・・。思考が外に漏れていたらしい。

「良くありません！」

「キヤツ！」

「おつづ？」

まだ、時間はあると思っていたのに、やり過ぎました。

スントイチャトイチャしている間にも時間は等速で流れていき、アインシュタインさんの相対性理論は適用されず、いや適用されたのか？兎に角、気が付けば予定の時間。

本当ならそれとなくスンに服を着せて、お茶でも飲みながら「その時」を待つ予定だったのだが、いつの間にか、押し入れの扉の向こう側に、可愛らしいお嬢さんが真っ赤な顔で立っていて、スンを押し倒している私を睨みつけている。

彼女の足元にある、亀甲縛りされた本さんと雑誌さんがシユールだ。
唯一の救いは、私とスンの腰から下が毛布で隠されていたことだけ
だろう。

しかし、まあ、あれだねえ。

異世界の女性てえのは、ナニかい？

初めて会う異世界の男に対しては、おつかない顔で殺氣を放つもん
なのかい？

いえ、違うと思ひます。
すみません。

6 む距べが来るひづり。 (後書き)

「ううん。 ハッチな思考が止まりない。

7 よつやく旅立つようです。

大晦日の夜ともなれば、ある人は2年参りに神社へと向かい、ある人と小動物は炬燵で丸くなつて紅白でも見ながら「平和に」過ごすところ。

私はというと、殺氣の漏れる我が家から、一路、コンビニを目指して、盗んだバイクで走り出したところだ。いや盗んではいけどね、原付だし。

ああ、逃げたさ！

私より若干大きな体でありながら、必死に「行かないで」と目で訴えるスンを残して。

あそこで、私が着ていたシャツの袖口をチョコンと掴まれたら、逃走を断念せざるを得なかつたことだろう。スンにそいつたスキルが無かつたことが幸いした。

ええ、私は卑怯者です、ヘタレですとも！

一応、状況説明はしたのだが、アリスさんとじゅうじこ少女の怒りは収まらず、仲間達がこの三日間、どれほど心配したかとか、姿を消したスンの居場所を探るために、アリス自身がどれほど気力と魔力を振り絞つたかとか、漸く見つけたスンの気配を頼りに転移するにしても、初めての場所への転移がどれほどの恐怖だったかとか、それなのに・・・と、目に涙を溜めながらトクトクと一小時間、お説教をされました。正座でね。

まあ、私も悪かつたとは思つていいんだ。

アリスさんが怒りに震えながら異世界の扉を超えようと、トテトテと踏み出したとき、彼女の下に、頼んでもいらないのに神様が舞い降りてきた。主に笑いの神様が。

で、亀甲縛りの本さんの方に躊躇って、「ペキヨ」って感じでこけてしまったのだ。

幸い怪我は無かつたが、私とスンは我慢できなかつた。

「「フジー。」」

フローリングの上にカーペットを敷いていても、正座する人間にとつては「焼け石に水」であることを、身を持って体験できたことを喜ぶべきだろうか？

かくして、スンは単独でアリスさんを宥めることに全力を尽くし、私は理由を付けて「コンビニにお泊まりセットと鏡を買いに走り、大晦日の夜は夜更け過ぎに雪へと変わるどころか雨さえ降らず、沁みるような寒さだけが私の体を締め付けるのであつた、まる。

ということがあつて、私が30分程でコンビニから戻る頃には、アリスさんはどうにか落ち着き、それどころか、我が家の中をダンジョンよろしく探索し、各種の「財宝」をせつせつと、どこから出したのか袋に詰めていた。

「シユンさん、これも良いですか？」

「ああ、いいですよ。そんな物で直しければ」

アリスさんが示していたのは、プリンター用紙の分厚い束（未開封）だつた。その他にも鉛筆と消しゴムとか。愛用の0・28ミリの赤のボールペンや半透明の物差しを、机の中から発見した時はえらい騒ぎになつた。

魔術師だからそういうたものに田がいくのだろうか？ ものすゞくつれしそうで、駄目とは云えない。まあ、買い置きもあるし。それにしてもちつちやいなあ、と、私は嬉々として袋詰める少女を見守つた。

アリスさんは茶髪のセミロングに黒い瞳、身長は140センチ前後と小柄で、お人形さんのように可愛らしい少女だ。推定14歳とみた。

私は、口り「も」好きだが、この場合はあくまで「愛でる」対象としてであって、青少年保護育成条例に違反するようなマネはしない。まあ、条例は基本的に属地主義をとっているから、異世界でナニをしようと……て、無駄知識が……。

スンの方は、しきりにグラスや鏡を持ち帰りたがったが、取り外しが異常に面倒だし、割れる可能性が高いため諦めたようだ。可哀想なので、買ってきたばかりの黒のコンパクトを進呈したら凜々しいお顔が赤くなつた。いまさらですか？

その他には1リットルのペットボトル（中身入り）を2本と、子供の頃に何かの懸賞であたつて、箪笥の中に仕舞い込まれていた安物の天体望遠鏡。

そして最後に、恥ずかしそうに「パジャマが欲しい」といった彼女に激しく萌えた。

ちなみに、我が家にある電子機器全般については、向こうでは何の役にも立たないガラクタだからと説明したら一人ともすんなり納得してくれた。必要なら何時でも取りに来れば良いしね。

ちなみに、これらのお宝は、私の異世界探訪の一歩として、三日間の護衛兼ガイドの報酬と、私が異世界人であることや我が家の中入れの秘密についての口止め料だ。

スンにプレゼントしたコンパクトとパジャマは別として。

随分安いな、とは思つたが、スンによると、私の用意したコンビニ鏡一枚で十分な報酬に成り得るそうだ。アリスさんも同意見だったでそうなのだろうと思つ。

アリスさんによると、恐らく、一枚あたり金貨10枚は下らないとか。

貨幣価値が良く分からなかつたが、いろいろ聞いて、貨幣価値をこちら側のレートに換算すると約一千万円？・・・・後、6枚あるんですが。

私が向こうに行きたい理由は、単に旅がしたいというより「冒険者になりたい」と力説したら、溜息交じりに納得してくれた。三日間だけだしね。

アリスさんによると、あちらでも、お貴族さんのボンボンとか、いくらでも贅沢に平穏に暮せるのに、わざわざ冒険者を志す若い子は多いのだとか。私は若くはないですよ？

この時、スンが微妙な顔をしていたのには気が付かなかつた。

さて、私の持ち物だが・・・

以前、出張したときにボストンで購入したリュックサックに詰め込んだのは、コンビニで購入したお泊まりセットとコンビニ鏡。その他には、非常持ち出し袋の中にあつた食料と、手動と太陽光で充電できるLEDライトに使い捨てカイロ、下着数枚に、台所にあつた袋麺は紙袋に入れて大量に持つていくことにした。

武器？なにそれ、おいしいの？・・・スンが予備の剣を貸してくれるそうだ。

「じゃ、そろそろ行くわよ？」

アリスさんは意気揚々とお宝？の詰まつた袋を担ぐと、足取り軽く、でも慎重に、押し入れの扉を固定する亀甲縛り（しつこいけど、ここ重要）された本さんと雑誌さんを跨いで、転移魔法陣の前に進んだ。

その際、全身を覆つ黒いローブがちょっと引っかかつた。裾をズリ

ズリ引き摺るから。

つうむ。もし、仮に、本さんがどうだつたな、」の三回間で亀
甲縛りされるは、耽美な魔女っ子に蹴られるは、跨がれるは・・・
・・やめよ。

「ん？みんな一度に転移できるんですか？」

「当り前じゃない！私を誰だと思ってるのよ？『イスフアーナの天才』とは私のことよ？！」

「うむ。アリスは大陸きつての優秀な魔術師だからな」

スンがそう云うのなら大丈夫だろう。「しらんがなー！」というアリスさんへの突っ込みはしないでおいた。必殺のボケ潰し・・・なのだが、分かつてもらえない。

そして、アリスさんがどこからか取り出した杖を頭上にかざして、何やら呪文を唱えると、魔法陣が・・・て、テンプレなので以下省略。

「シギやああああああああああああああ！」

はいはい!

7 いつもやく旅立つまいです。（後書き）

しんじいぞ ストックがキレてきたぞ
今頃気が付いたサブタイトルの間違い（11月15日）
ん？ルビが付いてる？なんで？どうして？

8 イベントが発生したようです。

蜥蜴だな。

全体の形は、そのまんま蜥蜴なんだが、黒をベースの銀の縞模様がヌラリと光り、ショックキングピンクの尻尾がクネクネしている。なぜピンク？ これで体長7～8メートルでなければ、私的には「可愛い奴」で済むのだが、オッカナイ顔で威嚇されちゃあ台無し？

「おお！ スン、アリス！ 無事だったか？ すまんがちょっと手伝え！」

転移の余韻も收まらないうちに遠くから声を掛けられた二人は、「シウンは此処にいる！」と言い残し、アリスさんは担いでいた袋を投げ出して杖を振り上げ、スンは腰に差した剣を引き抜き、蜥蜴に向かつて走り出した。

私はというと、投げ出された袋を回収して、広大といつてよい部屋の隅に逃げ出した。
プロフェッショナルの仕事に素人が口出ししても、良い事など一つもない。

「なんでこんな所にシルバーリザードが？！ あいつは20階層の魔獸じゃない！」

「さあなあ・・・まあ、出てきてしまったもんは、しょうがあんめえ」

最初に声を掛けた髪面の男は、壯年の大男で全身甲冑に身を包み、巨大な盾で尻尾の一撃を撥ね退け、それと同時に右手に持った斧を叩きつけている。が、ギン！ という鈍い音がするだけで攻撃の効果は薄いようだ。

相当固い鱗に覆われているのか、直ぐにスンも駆け寄り、頭部に近い部分に剣を叩きつけて牽制するが、明らかに剣筋が流れている。

他にもスンの仲間が槍や弓といった得物でヒットアンドウェイを繰り返している。

効果が薄いとはいえ、大した連携だが、魔獣の方も尻尾と巨大な顎で攻撃を蹴散らし、隙あらば一気に齧り付くべく機会を狙っている。

しかし、もつとも驚くべきことは、スンの動き。

あれが内力系魔術「身体強化」だろうか？目で追えない程ではないが、人間の出せる速度を遥かに超えて移動を繰り返している。

「みんなあーお待たせ！離れて！！！」

一人だけ距離をとつてアリスさんが、ひと際大きな声で叫ぶと、それまで、蜥蜴を囮んでいたスンと3人の男たちが、あつという間にアリスさんの周りに集まり、防護壁を築く。
なるほど、牽制だけでなく、足止めの効果もあつたわけか。

「我が前に現れ出でよ、其は殲滅の炎、嘆きの風と共に、ファイヤーストーム！」

詠唱のたびにアリスさんの構える杖の正面に、直径1メートル程の魔法陣が浮かび上がり、最後のキーワードと共に、そこから巨大な炎が渦を巻いて吹き出される。

炎の渦は蜥蜴を押し包むように広がり、一気に燃やしぁくした。すげえええ！！！

「GUGYALALALALALA・・・・・」

蜥蜴は最後の力を振り絞って、2・3歩、こちらに向かってきたが、すぐに力尽きて地に這つた。

「ふいに・・・あつぶねえあぶねえ。やつぱシルバーリザード相手に魔術師無しはキツイわな！がははははあ！」

「そうですか？その割には楽しそうでしたが？」

「そうそう！『アリストスンの帰還とどっちが早いか？』なんて、云つてなかつたっスか？」

最初が大男、次が弓使い、最後が槍使いの少年だつた。年齢も概ねその順のようだが、真ん中の弓使いが一番のイケメン。しかも、イメージどおりの丁寧語。

イケメン死すべし！

それは兎も角、なんだが、私、忘れられていません？仲間の再会と今戦闘のことで盛り上がつてますが？「やっぱ嬢ちゃんの魔法はすげえな！」とか「スンさんのアクセルも大したものですね。」とか・

・
フンフン、ぐしゅんぐしゅん・・・

私は大人だ。小さなことに田ぐじらを立てたり・・・しないもん。ホントだお？

田ぐじらは立てないが幼児退行はする・・・といふか、した。

その後、私のことを思い出してくれたスンによつてメンバーに紹介され、改めて三日間の護衛とガイドを依頼した。

リーダーの大男ダークさんには「スンが世話になつた」と握手しながら礼を云われ、依頼を快く引き受けてくれた。私の手が壊れるのでヤメテ！

槍使いのチャックさんは明らかに私より年下（17歳くらい？）にも関わらず「ようよう！あんたシユンだつけか？スンの姐さんと三日も何してた？姐さん何かテッカテカだけど？」といやいやされたが適当に誤魔化した。

私とスンの関係は『大人の関係』だつたと理解している。所謂、『吊り橋効果』の結果に過ぎないので、アリスさんにも口止めしてある。

弓使いのグスタフさんは爽やか且つスマートに「ようしひ、依頼人殿」とだけ云つた。

その後、手分けしてシルバーリザードの爪20本を回収して『神魔獣の間』を後にした。

なんでも、神魔獣の間からは転移魔法が使えないらしい。アリスさんが設置した魔法陣はその部屋にあつた魔法陣をアレンジしたもので、例の部屋との行き来専用にしか使えない。

理屈は良く分からなかつたが、神様の事前説明どおりということか。

神魔獣の間の前室には、パーティーの荷物が置かれていた。どこの迷宮も、およそ10階層ことに大魔獣の部屋があり、その前室は安全地帯と考えられている。通称、『決断の部屋』

その他にも、幾つかの安全地帯が存在するが、それはランダムに存在しているため、余程、踏破率の高い迷宮で無い限り、その位置はそれぞれのパーティーメンバーの秘密とされる。

パーティーメンバー以外は全て競争相手、性質の悪い冒険者の場合は敵にさえ成り得るのだから、当然と云えるか。

「んじやあ、一服するべ。腹も減つたしな」

ダークさんの指示で、一休みすることになつた。

荷物に異常がないか調べ、チャックさんが火を起こす。神魔獣の間に侵入する前にも此処で野営もしたのか、石を集めて作られた釜戸がある。

枯れ木など無いからどうするのかと思つたら、荷物の中から蠅の塊

のようなものを出して少しづつ削りながら釜にくべていく。
結構な火力だった。

「でもダーク。食料は殆どありませんよ。白湯で我慢です」
「えええ？マジッすか！」
「あ、あの・・・」これよかつたら、詰まらないものですが、どうぞ
！」

私は、持つて来ていた袋麺（日本の誇るチ ンラーメン）を差し出した。

初対面の人との円滑なコミュニケーションを図るには、贈り物が効果的。
賄賂？何それ、おいしいの？・・・」の場合は美味しいです！

だって、私は『大人な社会人』だから。

8 イベントが発生したよひや。 (後書き)

だんだん、つじつまがあ・・・でも突っ走ります。

9 第一階層はピクーック気分のようです。

私たちは現在、『深奥の迷宮』50階層のうちの第1階層に来ている。一番上だ。

見渡す限りの草原が広がり、起伏に跳んだ地形に所々ブッシュが広がっている。何処からか風さえ吹いているのに、明らかに屋内の雰囲気がある。空が無い。かなりの高さに天井があつて、例の部屋の天井と同じく、薄く光っている。

私たちは、その奇妙な草原の中を、そこだけは踏み固められたと思しき道を歩く。

最下層域で食べたラーメンについては、鍋が無かつたのでそれぞれのメンバーの鉄製カップにアリスさんが水を作り、それを釜戸で温め、沸騰したところでラーメンを半分ずつ投入。ざつと3分待つてから「飲む」ことにしたのだが・・・

みんなが「これいけますね」とか「おいしい」とかそれぞれ発言するなか、一杯目を飲みほしたダークさんが、無言で残りの欠片を見つめるので、慌てて「もう一つどうですか」と、大人の対応をした私。

結果、私が持っていた某デパートの紙袋は、現在、ダークさんのふつとい腕の中に大事そうに抱えられている。二つとも。

大盾と斧は一緒にたにされて背中に担がれている。それでいいのか？ダークさん！？

一服しながらアリスさんが披露目した我が家の「お宝」の数々より、そつちですか？

帰還用の転移魔法陣に現れた私たちを、若い冒険者グループが遠くから眺めていたが、特に近寄ってくることはなかった。

ただ、「おいあれ！鉄壁のダークじゃないか？」とか「風の旅団！来てたのか！」みたいな声は聞こえていたが、みんな気にした風もなく、スタスターと出口と思しき方向に歩いていく。有名人なんですねダークさん。

そして、あちら此方で、複数の冒険者が得物を追っている様子が目に留まる。珍しそうに眺めていると、小遣い稼ぎと経験のために、小物の魔獣を狩っているのだと、後ろを歩くグスタフさんが教えてくれた。

「チャック、右前方20。ブレードラビット3だよ」

唐突にアリスさんが呼び掛ける。「あいよ」と、緊張した風もなくチャックさんが小走りに前に出る。

そして道の脇にあつたブッシュが揺れたと思った時には、何かがチャックさんに飛び掛かつたが、シュンシュンシュンと槍が鳴つて、ぽとりと地面にウサギが転がった。

「すごいですね、チャックさんーあの一瞬で、眉間に一撃なんて！」

チャックさんの早技に称賛の言葉を贈ると「へえ～良く見えたな」と逆に感心された。

いや、確かに早くて正確で見事な攻撃だったが「見えない」という程ではなかったので、「そうですか？あはは」と曖昧に答えた。ビバ！日本人！

ブレードラビットは油断さえしなければ、一般人でも狩ることができる最下級の魔獣の一種で、前足の中指の爪が異常に発達して刃になっている。このブレードが良く切れるため、剃刀の代わりに理容や美容に需要があるのでそうだ。

ただし、非常に纖細で、狩りのときに下手に攻撃を受けると傷付いてしまい、売り物にならなくなる。そのため、先制攻撃で、一撃で仕留める技量が必要になる。

「まあ、ブレーダーリビットを上手に狩れるよになつたら、次の階にいつてもいいかなつてところだな・・・うまく狩れなくても、肉は売れるしな。第1階層なんて、俺達にとっちゃや、ピクニッシュみたいなもんさ」

「へええ」と感心する私。「うむー、チャックさんは褒めたら伸びる子と見ました。今後も、どんどん褒めよう。

それにして気になるのがスンだ。転移前に私をみんなに紹介した時以来、まったく私と会話をしてくれない。短い夢だつたかあ・・・まあ、しょうがない。諦めは良い方だ！

私の姿勢は中の中、巣廻して中の上。背も低い。明らかにモテるタイプではないから、スンとの寝物語を真に受けたほど自惚れたりもしないし、一度そういう関係になつたからといって、しつこく迫るもの性に合わない。スンもそうだね。

「どうだい、ちよつとやつてみないか? なに、俺がサポートしてやるよ」

「へ?」

「へ? ジャネエよ・・・ いくら俺達が護衛に付くからって、やっぱ、

一応護身くらいはできて貰わなきや。あぶなつかしそぎるぜ?」

「そうですね。ショウさんの力量を見るためにも、いいかもしだせんね? どうです?」

「どうだわれましても・・・ そんな期待に満ちた目で見ないでえ! 私はそういったプレッシャーに弱いんです。困った顔でダークさんを見ると、我関せずの表情で紙袋を覗き込んでいる。駄目だ、この

人。

ラーメン見てトコッパしてやがるな？「おのおお、スット」「ゾシ
コイツ！

「やつてみれば良いじゃないか？“ショウさん”。武器はわたしの
ショートソードを貸すつ」

あれれえ・・・“スンさん”君まで？もしかして、イジメテスカ？
ナゼ？ ドウシテ？
なし崩しに弱い私。ああ、良くも悪くも日本人。
しかし、できなくても頑張つてみるのも日本人。
良いでしょ。剣道初段の腕前。お見せしよつじやありませんか！
スンからショートソードを受け取つて前衛に立つと「俺はあくまで
サポートつて」と左側にチャックさんと並んでくれた。

ちなみに、生き物を殺すことに対する精神的負担は、私にはあま
りない。

どんな方法であれ、生きるために必要なら、私はそれを肯定する。
私の父はかつて漁師だったからか、少しばかり知恵が付いた頃には
自分が生きるために、多くの生き物を殺していくのだといつことじ
気が付いていた。

そのおかげで、自分が生きていること、生活ができるこむこと。

「正面20。ブレードリビット」

アリスさんの声で私の足が止まる。2匹のブレードリビットはブッ
シコを飛び出し、一囃散に此方に走り寄ると、助走を付けてジャン
プした。

私から見て、左手の一匹が先に、続いて右。2匹の間隔は1メート
ル弱。

私は、腰に構えたショートソードを、右足を斜め前に一歩踏み出し
ながら抜き打ち、そのまま左のブレードラビットの右をすり抜けな
がら正面から水平に首を狙う。

しかし、ブレードが邪魔になることに気が付いて、咄嗟に剣筋を跳
ね上げ、すれ違いざまに上から首に落とし、そのまま振り向きざま
に、今度は下から右側のブレードラビットの首を刎ね上げた。

「はいッ？」

「・・・！」

「あれえ？」

最初がチャックさんで、次がスン。最後は私。
道端に転がる2匹の魔獣と、首を傾げる私に、みんなが驚きの視線
を送つてくる。

ハツと気が付いて、ショートソードの血を振り飛ばして、カツコよ
く鞘に納めようと落としたのは御愛嬌。

ピクニックは危険がいっぱい、ところを話す。

9 第一隨筆はノクニシク氣分のよつです。（後書き）

ほかの人ってどうやって書いてるんだろう。

私は書きたいという気力だけ。

なんか、読んでくれてる人もいるみたいなので、せめてちゃんと物語的に盛り上げて終わらせたい。

10 気が付けば最強のようだ。

「やるじやあねえか・・・がはははあ！」

と笑うのは髪面のダークさん。

ラーメン見ながらトリップしていた分けではなかつたらしい。

私の剣技にあきれたように見つめる他のメンバー。

「兄ちゃんよ？ あんた素人じゃなかつたのかよ？ おれの出る幕ない
じゃん」

「そうね？ ちょっとはやるみたいね。アクセルも、まあまあ見事だ
ったわ」

「本当に、お見事です。しかし・・・

「・・・」

いえ、いえ、私は素人ですよ？ 高校の部活で剣道はしてましたけど。
その程度じゃ、実戦には物の役に立たないくらい分かりますよ？ て
いうか、例外はあつても実戦に役に立たないことが分かつたから、
一時期、本気で辞めようと思つたくらいですから。

それと、アリスさん？ アクセルってなんですか？
ん？ まさか、私が守護者だからですか？ 神様！ あなたナニしてくれ
ちゃつてるんですか？

ふるふるふるふる・・・ふるふるふる・・・

ジャパニーズスキル「曖昧笑顔」で誤魔化していたら、Gパンの左
前に入れてあつた携帯がふるふると振動した。通話はムリだろうと
思っていたが、なんとなく癖で持つて来ていた携帯電話。時計や写
メなんか其れなりには使えるし。

しかし、友達の少ない私のこと。携帯がふるつても、電話だと思うことはない。メールも登録したビデオ屋さんや本屋さんの「お知らせ」程度。思い当たるのは何かで自分で設定したアラームか？

ふるふるふる・・・

三度。ふるふるした時、私は異常に気が付いて慌てて携帯を取り出して開いてみると、[画面表示]は「555 - ×××× · · ·」の電話番号が・・・・・みんなに「ちょっとすみません」と断つてから携帯を耳に当てる。視線が痛い。

身に付いた礼儀はおそろしい。

「うむ・・・神じや」

予想通りだった。予想通りすぎて全く驚けない。555から始まる電話番号はハリウッド映画で使用される架空の電話番号だ。芸の細かい神様だ。

だが、今はそれは置いといて。私の守護者としての能力について聞かなければならない。

この微妙なタイミングでの電話も意図があるに違いない。しかし、質問を投げかける前に神様は応えてくれた。

「お主の体は守護者を引き受けてくれた時に、神竜にしておいた。まあ、人の身に少々強引に押し込んだでな。入りきらなんだ部分は魔力にしておいたがの」

「・・・あのぉ～もひもひイ？」（b y ふじやまかんび様）

「まあ、それでも十分とは云えんでな。1年ほどかけて少しづつ変化していくで」

「・・・結局。わたしって、人間じゃない・・・?・・・とか?」

「今は、まだ、人じやよ」

“今は”って……“まだ”って……なに？？？私の前任者つて神竜だったの？

幸い、鱗とかは生えてこないらしいが、いつの間にか私は、人間では無くなりつつあるらしい。ふと気になつて聞いてみた。

「あの。もしかして、神竜の能力の中に、若返りつてありません？」
「・・・そうじやの、まだ、効力は弱いじやろうが、そなた自身も含めて、そなたの血肉は他種族にとつては再生（若返り）と身体強化の靈薬になるの。まあ、そもそも、この世界にそなたを傷つけることのできる者など、殆どおらんがの。ふわははは」

ちょっと話しこんでしまつたが、纏めると、私は人の姿をした神竜で、いざれ完全な不老不死に至るらしいが、人の身に入りきらなかつた神力は、魔力に変えて与えられているのだそうだ。

そして、私の精を受けた者に神竜の加護を与える、若返りと身体強化の恩恵を与える。スンの若返りが微妙なのは・・・ちゃんと「コンちゃんと使つてたから！（男の責任だぞ？）

なお、若返りは詰まる所、究極の再生能力だが、赤ちゃんにまで遡ることは無く、もつとも身体能力が高まる年齢までのことだつた。

「・・・普通、こう云つ場合、少しずつ訓練とか試練とかを乗り越えて強くなるものだと思つていたのですが？」

「人はそうじやな。じやが、考へても見よ。そなたの世界にある虎は、ライオンは訓練したから強いのか？今のそなたも同じじや。神竜として“存在する”ただそれだけで、この世に存在するありとあらゆる存在の中で最強なのじや。ま、（仮）じやがな」

なんだか深いのか深くないのか分からぬ御高説を賜つて電話は切

れた。

必要があれば携帯で連絡できるらしいから良いけど。

このことはスンに話すべきだろ？このまま、黙っていても、肌を重ねることがなければ彼女の若返り効果は、お肌スベスベの強力版程度で収まる。

“僕、神竜になっちゃいました。で、エッチすれば若返るよ！
テヘッ”

キ、キモツ！…黙つていよう！

「話しあは終わったのか？では、さっさと行くぞ！」

声を掛けたのはスンだつた。彼女には携帯電話の機能について話してあつたから、誰かと連絡を取つていたことが分かつていて、相手が神様だとは思つていないのである。

改めてスンを見ると、やっぱり、綺麗だ。若返りの効果だけでなく、いや、そう知らされた後だからだろうか？前にも増して綺麗に見える。

スンの10代の頃とか、見てみたい気もするが…

スンがみんなに説明しておいてくれたおかげで、携帯電話は私の世界の魔道具であると理解されていた。それでもチャックさんとアリスさんは興味津津だつたが、こちらの世界には、魔術師限定ではあるが念話の魔法もあるので、機能としては珍しいものではない。まあ、これはアリスさんがちょっと負けず嫌いを發揮したといふことで。

それにして、スンの態度が冷たい。

恋になつてくれなくてもかまわないから、もう少し普通の関係でありたいものだ。

三日間とはいえ、ツライ。美人さんの精神攻撃はきついですよ？

そう思いつつも、私の前を歩くスンの後ろ姿に、我が家での痴態が重なる。

歩くたびにお尻が・・・上だけパジャマで隠されていたお尻が・・・あ、ところで、スンの鎧はフルアーマーとは云わないらしい。胸部から腹部にかけてはショルダーカバー付きの金属装甲が覆っているが、腰から下は、何というか・・・昔流行った巻きスカート?に金属のプレートを張り付けている感じ?

その下にズボンを履いているが腿には装甲は無く、膝までの金属製のブーツ。肘から手首までは外側が金属プレート、内側は皮のようだ。どれも内張りに皮が使用されていて、カチャカチャと不用意な音を立てない。

「おう!見えてきたぜ!あれが深奥の迷宮の出入り口だ!」

10 気が付けば最強のなりや。 (後書き)

ね
む
い
・
・

11 馬車の旅はシリウスよつや。

迷宮の長じトンネルを抜けるとそこは雪国だつた。……いや、冗談抜きで。

聞いてないですよ。私、Gパンに厚手のシャツと、大学生の時に購入して以来、手放せなくなつた黒のロングコートしか着てませんよ。積雪は10センチ程だけど、雪ですよ？家の方では数年に一度積もるかどうか。

「おや、おはようさん。今回の迷宮はどうじゅったね？」

出入口は、ほんとにトンネル状になつていて、100メートル程歩いて漸く外に出たが、そこには、軽装の鎧を着たお爺さんが槍を持つて立つていた。

こんなお年寄りで大丈夫なんだろうか？

お爺さんはギルドに雇われた見張り番だそうで、他に一人いて交代で此処にいるらしい。

「今日はちょっとしたトラブルがあつてなあ。食料が尽きたといろで帰つて來たよ」

「そういやあ、あんた方が潜つたのは5日も前だつたかな。風の旅団も深奥の神魔獣には嫌われたか！？ふおふおふお・・・」

えつと・・・此処にいます・・・神魔獣。・・・なんか、ごめんなさい。

「まあ、もうこいつにしておいてやるぜ。十分稼がせて貰つたしな。それより爺さん。俺達の馬車はどんな按配だい？ブル達は元気か？」

「あああ、もちろんじゃー大事に納屋で休んでいろ。少し寂しがつて泣いておつたが」

迷宮の入り口には大抵の場合、ギルドの派遣した番人がいるそうだ。あくまで見張りであつて、数年から数十年に一度、魔獣が溢れる現象、『狂騒』を監視するためで、冒険者たちにサービスを提供するために居る訳ではない。

しかし、“個人的に”便宜を図り、その範囲で小銭を稼ぐことは禁止されていないので、ダークさん達「風の旅団」は馬と馬車を預けていたらしい。

見張りのお爺さんに見送られ、雪に足を取られながら近くの納屋に向かうと、チャックさんとグスタフさんが、さつさと巨大な馬車を引き出し、一頭の馬を馬車に繋いだ。馬は普通のサラブレッドに見えたが、ブルと呼ばれる馬種らしい。明らかにサラブレッドなのに馬体が通常の1・5倍あり、道産子のように巨大だった。まあ、この位でないと、あの馬車は引けないだろうけど。

「ショウさん、乗つてください。これで取り敢えず森を抜けます。半日ほどでしょうか？そこからは転移魔法が使えますから、馬車ごとクブスリーの町に飛びます。今日はそこで一泊します。クブスリーの町も結構大きな町ですし、楽しめますよ」

私の旅には目的がない。強いて言つなら見て回るだけ。よつて、極力、護衛である彼らの都合に合わせることができるが、一応、賑やかな所に行きたいと希望はいつてある。

取り敢えずの目的地はやっぱり王都だが、彼らが迷宮で得た財宝はクブスリーの町のギルドでも換金できるので、王都に向かう必要はないのだ。

「じゃあ、クブスリーから王都に転移ですか？」

女性陣に続き馬車に乗り込みながらグスタフさんに尋ねると。

「いや、王都に転移魔法で近づくことは禁止されていますから。ひとつしても王都に行きたければクブスリーから馬車ですね。まあ、ショウさんは雇い主ですから何処へなりと」案内しますが、たしか三日以内に此処にもどるのでは? クブスリーから王都までは馬車でも一日はかかりますよ」

ダメじやん。

まあ、王都まで運んでもらつて、後は一人でブラブラしても良いが、戻つてもアリスさんに転移魔法で『神魔獣の間』まで送つてもうわないと、我が家に帰れない。それまでに転移魔法をマスターする自信はないし、それに余りタイトなスケジュールはどうも好きになれない。世の中、何が起きるか分からぬものなのだ。シミジミ。それに、考えてみれば、スンを除いてみんなは五日間も迷宮に潜つていた分けだし、彼らにも少しばんびりして貰いたいと思う。

チャックさんが御者台に上り、他のメンバーが馬車に収まるといつそく動き出した。

思つたほど揺れないし、何より温かい。流石に匂いがキツイが、みんな気にしていないようだし、これが普通なのだろうと、空氣を読んでおとなしく座席に座る。

座席の位置は、電車と同じで進行方向に向かつて縦に並んでいる。入口は後部に一か所。

そこから見ると、左奥にスン、向かいが私、スンの隣がアリスさんでその向かいがダークさん、ダークさんの隣がグスタフさんとなつている。

「私たちを「風の旅団」と知つて襲うよつた山賊はこの辺りには居ないと思いますが、念のためです」

なるほど、そう云われてみれば、私が一番安全な位置にいて、何かあればみんなが直ぐに飛び出せる位置取りとなつていて。大きな荷物は天井や床下に収納されているらしく、車内は思ったほど狭くない。ダークさんの大盾は流石に天井に乗せられたが、各自の武器はみな手の届く範囲に置いてある。

しかし、私の正面がスンですか？その気も無いのに、にらめっこ状態。

二秒で私の負け！笑つたわけではないのに負けです。視線が痛すぎるので、あらぬ方向を見てしまつ。うつ、気まずい。

こんな私でも、女性とお付き合いした経験はある。それも、自分で信じられないことだが、結構な美人さん達だつた。スンには比べようもないが。腕を組んで町を歩く時、周りの視線が気になつて仕方がなかつたのを覚えている。

別れた理由は、大概「私の気持ちを分かつてくれない」というもので、全てのケースで一方的に好かれて、一方的に別れを切り出された。

というわけで、今でも彼女達の気持ちはわからん。が、別れはツライ。だから、恋人になつても余り深く（精神的に）関わらなくなつた。悪循環か？

そんなことを考えながら馬車の旅は続く。小ぶりな窓も風が吹き込むのを避けるため、今は閉められている。降り積もつた雪のお陰で、ゴトゴトとした振動は少ないが、それでも馬車の速度は随分抑えられているらしい。

グスタフさんが、これから行く町のことや王都のことギルドのシス

テムについて色々話してくれたが、彼らも疲れているだらうから、質問は控えた。

私は「気配りのできる大人」だから。

ギシツという軋みがあつて馬車が停止した。いつの間にか、私は睡魔に誘われてうつらうつらしていたらしい。寒い御者台でチャックさんが頑張っているのに最低だなあ。

周囲にはアリスさん以外は誰もいなくて、私には毛布が掛けられていた。

「休憩よ。トイレは済ませておいて」

アリスさんがそっけなくいった。

「それから、毛布をかけてくれたスンにお礼を云つておきなさいね。私はその必要があると思つのよー?」

車内なのに、妙に冷たい風が吹いた・・・よつた気がする。

12 仲直りするよつだ。

馬車道の脇に少し広くなつた場所があり、その隅に粗末な小屋が建てられている。昔は誰かが住んでいたのだろうか？

どんよりとした雲が、今にも雪を降らせそうだ。まだ、森の中だが、木々も枯れ草も雪で覆われているお陰で、意外と視界は悪くない。

チヤックさんは小屋に飛び込み用を足し、グスタフさんとダークさんはブルの所で何やら話し込んでくる。私はスンを探して森に入つた。

スンは小屋の裏側の森に入つたといひで剣を振つていた。白い息と剣が空気を裂く音だけが森に響く。

「スンさん、さつきは毛布をありがと。お陰で風邪を引かずに済みました」

私が声を掛けると、スンは剣を振るのを止めて振り向いた。寒さの中で剣を振つたせいか頬が赤くなつてゐるが、白と黒のコントラストの中で見るスンは本当に女神様のように美しかつた。まあ、女神様つて見たこと無いけどね。今度、神様に聞いてみよう。

「どうして……」

「ん？」

「・・・どうして……。やつぱり、私のことなど唯の遊びだったのだな？」

「はい？」

私としては毛布のお礼方々、差し障りのない会話をして、それから“何か”でスンを怒らせてしまつたことを謝るうつと思つていた。（

ちなみに、此処で理由を聞いてはいけない！）

私の数少ない恋愛経験からの教訓『彼女が不機嫌なときは、取り敢えず誠心誠意謝つとけ！』を実施する予定だったのだが・・・スンは・・・そうだった・・・彼女は、「すんごい美人さん」なのに「男前さん」なんだつた。

つまり、単刀直入？質実剛健？真実一路？

今まででは、周りに人が居たから黙つていたらしい。

「確かに、会つたばかりのシユンと・・・その・・・“した”ことは、ハシタナイことだつたかもしぬないが、私は！私は・・・誰とでも・・・その・・・“する”ようなフシダラな女ではない！シユンにそんな風に思われていたなんて思つと・・・」

綺麗な顔が悔しそうに歪む。朱の指す顔は、寒さばかりが原因ではなかつたみたいだ。

うむ、なかなか熱い告白？です。いついつつ時、普通の男はどんな反応をするのだろう？

私の場合は、「萌え尽きたぜ！」の一言だつた。

なに？この可愛い生き物は？

だが、ここで真っ白な灰になるわけにはいかない。断じて！

で、私は、雪の下に隠れていた石を急いで引っ張り出し、それをスンの足元に“よいしょ”と置いた。スンは私が何を始めたのか分からずぽかんと眺めていた。

石は、30センチ程でひっくり返すと実際に都合よく平らで、私が乗るのに十分だつた。

これで、田線が背の高いスンよりわずかに上になると、私は逃げられないよつにスンの首筋から両の頬にかけて手でガツチリと固定して、少々強引に、ディープなキスをした。

「スンのことを、そんな風に思つたことは無い」

少し長いキスだったせいか、一人の吐く息は真っ白で、柄にもなくカツコつけた私の心臓が猛烈な抗議をしているのが分かる。しかしだ、男には、自分の外見とか度外視しても、カツコつけなきやいけないときがあるものなのさ！誰に云つてんだ？

「スンのことを、そんな風に思つたことは無い」

「・・・ホントに？・・・じゃあ、どうして・・・」

結論からいふと、全ては私の思い込みと説明不足。ほんと、ごめんなさい！

私はスンとのことを吊橋効果の結果と思い込み、スンが此方の世界に戻つて、これで関係はリセットされると思っていた。そのことで、戻ってきたスンが此方の世界で気まずい思い（だつて彼氏とかいるかも？）をしないよう、仲間達にも内緒にした。

言訳だが、アリスさんが乱入したために、此処の所が説明不足だったのだ。

しかし、スンからすれば、体を許した男が異世界に来た途端に、自分に丁寧語で話し、“さん”付けで呼び、明らかに距離を取り始めたわけで、自分は都合のいい女でもう捨てられたのだと思い込むのに十分だったため、迷宮を出て以来、ずっと悩んでいたのだ。

ああもひ、何というか。結局、もてない男が美人過ぎる彼女を持つてしまい、それが信じられなくて余計なことをあれこれ勝手に考えた結果、ただ純粋に愛してくれた恋人を、むやみに傷つけた。そういうことらしい。

だれだ！そのドアホオは？？？俺か？死ねばいいのに！

誤解が解けたところで、えっと・・・誠に遺憾ながら、エッチはできませんでした。

流石に、こんな寒いところでスンを裸にはできないし、この胸部装甲がじゃまなこと！

といつわけで、今回は何度もキスをしながら、お尻を触りまくりました。

幸い、腹部からお尻の装甲は皮メインで巻きスカート系。つまり、簡単に手は入る。

うづうづむ、ズボンの上からだけね。

でも、何度も堪能した引きしまった腰とお尻の弾力と曲線の、なんと心地よい事よ。

スンはちよつと困った顔をしながら、それでも応じてくれたが、その笑顔の破壊力は凄まじいものがあった、とだけ云つておこう。

はあ・・・私はつづづく“一の線”は向かないらしい。

しばらくして、私とスンは、手をつないで馬車に戻った。

アリスさんは不機嫌そうに、チャックさんは目が点に、グスタフさんは笑顔で、ダークさんは左の眉をピクリとさせた。
めつやツ恥ずかしい！

さて、全てのわだかまりが解けて、改めて馬車を走らせる。今度はグスタフさんが御者台に上がった。

アリスさんの話では、こちらの世界に戻つてきてから、スンの様子がおかしいことは直ぐにみんなにバレタらしい。チャックさんを除いて。

私が原因であることは確実だが、男女の関係に疎いおっさんとガキはほつといて、アリスさんとグスタフさんが何気に気を回してくれたらしい。

感謝に堪えない。

じつして、私は・・・私たちの旅は、気まずさから解放された・・・
筈だったのだが・・・いや、確かに・・・だが、この気まずさは・・・
・なんだ？

「シユン、寒くないか？もう少し」と・・・

「シユン、このパトの実は、凍らせると美味しんだ」

「シユン、町についたら・・・」

馬車の中で、ベタベタはしていないが、恋人繫ぎした手はそのままに、
甲斐甲斐しく私の世話をするスンを、こめかみに青筋立てた美少女、
生温かい視線のおっさん、キヨトンとしてどうして良いのか分から
ずオロオロするガキ、が見守る。

『氣まずい・・・

13 目的地に着いたようです。

それから暫くして森を抜けた所で、アリスさんが転送魔法を使って馬車ごとクブスリーの町の近くに転移した。

森を抜けた所で、驚いたのは、雪が無い事。迷宮の周辺は魔素の影響で天候さえ不順になり、極端な場合は真夏でも雪が降ることがあるそうだ。

今は冬だけど、何となく・・・すみません。

少しは走つて小高い丘を越えると、遠くにクブスリーの町が見えていた。盆地のような地形に固まるように、大きな建物が幾つも見える。なかなか立派な町のようだ。

近づいてみると、馬車道は大きな防壁に向かって続いていた。ポツカリと開いた部分が門に成っているらしく、数人の兵隊らしき人が立っていた。

グスタフさんが彼らとの短い遣り取りをして、直ぐに中に入れてもらうことことができた。

「あの。税金とか・・・?」

気に成つていたことを口にする。ほんの少しの旅だったが、私はみんなを、数少ない友達だと思っている。だからこそ、お金のことはしつかりしておきたい。

お金は怖いよ?私は友人同士の金の貸し借りは絶対にしない、どうしても貸すときは返つてこないものと考えている。

「ああ、此処では必要ないのだ。国内だからといつものもあるし、私たちが冒険者ということもあるが、クブスリーは自力生産力のない中継拠点だからといつのが一番の理由らしい。人の出入りに制限を

すれば、あつとこゝ間に廃れてしまつからな

あれから機嫌のなおつたスンが、澄ました顔で説明してくれるが、スンの左手と私の右手は未だにガツチリ恋人繫ぎ。離してくれません。ちよつとでも離そうとするが、途端に悲しそうな顔をするから、どうしようもありません。

表情と言動が合っていませんよ？

鬱陶しいか？せんせん！むしろその顔が見たくてときどきやつてますけど、なにか？

思い出して頃きたい。私は微妙だ。

「ここのままギルドに向かいますよ。今回ちよつと荷物が多いですからね」

「やうだな。がはははは！」

「シラウさんのも此処で換金したり、無一文つて落ち着かないでしょ？」

と広い分だけで、幾つもの町並みを超えて、やつてきました冒険者ギルド。

レンガ造りの立派な建物だつた。町で一番立派なんぢやないだらうか？と思つていたら、なんでも、此処に町があるのはギルドが此処にあるからで、町の名の由来も、ここ初代ギルドマスターの名前をそのまま付けたとのこと。

200年前、人が集まり、町ができると、領主がのこいやつてきて他より高い課税をしようとしたところ、「んじや移転する」の一言で撤回させたという剛の者だつたとか。

扉を開けると予想通りの作りであることが分かつた。広いロビーに幾つかの椅子。カウンターに座る綺麗なお嬢さん達と、そうでないお嬢さん達。（差別はいけない）

窓口の幾つかでは換金や依頼の授受といった交渉が行われているようだつた。

ダークさんを先頭にズンズン進むと、ロビーにいた冒険者たちが噂話をしながら此方を見る。視線は一つ。ダークさんの坦いだけでかい袋と、私の手を引つ張るスンだ。

私は恥ずかしさで悶死しそうだ。

ちなみに、私達三人以外は馬車で待機中。

「あら、おかえりなさい。ダークさん。今日は換金ですよね?」

「おう!よろしくたのまあ!・・・あ、それと、こいつの登録も。換金の方は時間が掛るだろうから、明日の晩にでも引き取りに来るから、それまでに頼む」

「愚まりました」

キュピーン!

その昔、どこかの賢者が云つたそつだ『リアルねこ耳を知らずして、ねこ耳を語るなけれ』と・・・けだし、名言である。

そして今ここに、リアルねこ耳が・・・いいいいいかん!厨二病が再発しそうだ。

私は分別を弁えた大人だから、彼女の耳をガン見することはなかつたが、ふとした時にピクリと方向を変えるモフモフの耳は確認した。尻尾は未確認だが・・・

間違いぬあい!

「では、そちらの方?登録の手続きをしますから、此方の用紙に必要事項を記入してください」

「は、はい。・・・あ、でも字が・・・」

「心配ない。私が書いひ」

「ありがとう。スン」

スンが用紙を受け取り、適当に記入していく。

何が書かれているのか分からぬが、途中でスンに尋ねられたのは年齢だけで「33歳」と普通に答えたたら、スンとねこ耳受付嬢に引かれた。

スンは自分と同じか若しくは下だと思っていたらしい。

「あ、はい、シュン・ムラカミ様ですね。それでは最後に、このカードに血を垂らしてください。それで登録は終了です」

スンが前に見せてくれた銀色のカードと同じものを渡された。違ひは、何も記入されていないまつさうであること。

ねこ耳のお嬢さんに云われた通り、指先をちょっとだけ斬つて血を垂らす。（よかったです。まだ血は出る見たい）血液は、銀色のカードに吸い込まれるように消えていき、代わりに幾つかの文字が浮かび上がった。

このカードは云つてみれば究極の身分証明書になる。良く分からぬが、DNA情報でも読み取つているのか？本人以外では情報の表示も不可。当然、偽造もできないそうだ。

さらに、受けた依頼の数、その達成率、その難易度などから、その冒険者のランクを自動記録するらしい。あっちの世界より進んでない？

残念なことに、私には文字も数字も分からぬ。

「スン。なんて書いてあるの？」

「えっと・・・名前、生年月日、種族、性別、ランク（F）、職種

（無し）、経験年数（0）、
討伐記録、賞罰こんなところか・・・ん？」

幸い、種族とかに神竜とか、職業に守護者とか自宅警備員とは表示されなかつたみたいだ。ちなみに職業とは、剣士とか魔術師とかのことらしい。なんでも、経験を重ねるうちに、最も適正のある職業が表示されるようになるのだとか。

いずれにしても、いきなり変に高レベルとか表示され、悪田立ちするのには、御容赦願いたいところだ。

ほつと一安心、基本は人畜無害な旅行者でお願いします。普通が一番。

流石は神様、良くな分かっていらっしゃる。

「ショウ。体内魔素レベルが『』なんだが、これはどう意味なんだろうな?」

13 目的地に着いたようです。（後書き）

いやあ・・・私が書きたいのはエッヂと無双なんだが・・・
なかなか、無双まで行かなくて・・・
全体を短くして、強引に無双に持つていこうかと・・・でもなあ・・・

14 小金持になつたよひなす。

残念ながら至近距離でリアルな「耳を愛するより、スンを連れてカウンターを離れることを優先せざるを得ない状況になつてしまつた。幸いなことに、こちらの世界には『』の記号が無く、カードのHラーではないかと云われたが・・・無いなら表示すんなよ! なに? この無駄な高性能?

ことの真偽はさておき、ねこ耳受付嬢に失礼にならない程度にお礼をいつてから、素早くカウンターを離れた私たち。怪訝な顔をするスンに「後で」と云い含めて口を封じた。
どう説明するかなんて決めてませんがね!

次に向かつたのはお宝の買い取りカウンター。

前例のない物なのでいくらになるか? まずは、私の持ち込んだコン

ビニ鏡(小)。

ロマンスグレーの髪に手入れされた口髭の「鑑定士」のおじさんが唸り始めた。

鏡の表面を覗き込み、裏返し、青いプラスチックを突つつき、改めて、手袋を取り出してもう一度。表面についた指紋を綺麗に布でふき取ると、腕を組んで真っ赤な顔で、また、唸りだした。

「これを・・・どちらで?」

「深奥の迷宮の最下層域で」

嘘は云つていない。私は正直に答えた。深奥の迷宮の最下層域のそ

らに先の、『私んち』から持ってきたものだから・・・

「あそこで、このような物が・・・うううう

結局、金貨4枚と銀貨100枚を受け取った。おじさん曰く、間違いないなく金貨10枚前後の価値があるが、正直なところ正確な金額が分からぬ、よつて妥協案としてギルド主催のオークションに出品して、その一割をギルドの手数料とし、残額を私に支払う、ということになった。

金貨4枚銀貨100枚は、鑑定歴30年の誇りに賭けて“先払い”だそつだが、それでも、ざつと500万円相当の収入になるから、私に異論はなかつた。

ちなみに、支払いは何処のギルドでもカウンターでギルドカードを提示すれば、引き出しができるようにしておけ、とのことだったが、小さな革袋に金貨と銀貨を詰めて渡され、私はホクホク顔でギルドを後にした。

残念なのは「鑑定士」だけに“例の名台詞が！”とちょっと期待したんだけどなあ・・・

何か似ていたし？無理か？

ギルドの外に出ると、もう町に夕闇が迫っていた。
何処から、酔っ払いが騒ぐ声が聞こえて来るなか、ダークさんが馬車の前で待つていた。

少し待たせたようなので、断りを入れてから馬車に乗り込むと、アリスさんが興味津々でギルドでの成果を聞いたがつた。

「じゃあ、今日はシュンの奢りで大宴会ね！？」

奢りますよお、今日のおじさんは、ちょっと違うよお！

と、思つたが今日は疲れているので、明日にしてほしいと断つた。
馬車の窓から流れる町並みは、あちらの世界に比べるべくもなく薄暗いが、それぞれの窓の明かりは何故か、とても暖かそうに感じた。

馬車は通りを少し進んで右手に曲がると、暫く進んで留まった。

「着いたな。『春の風花亭』『』が今日の宿だ。食いもんと、酒がうまい」

ダークさんがそいつて紹介したのは、ギルドと同じレンガ造りの3階建ての建物。

建物自体は、ギルドより小さいが、小奇麗な白い柱が印象的だ。

玄関前のランプには既に明りが灯っていて、恐らく、向こうの世界でもこんなホテルがあればきっと人気がてるだろ?と思わせるものがあった。

ちょっと重めのドアを押し開けると、そこはホールになつていて、幾つものテーブルと椅子があり、既に何組もの人々が料理を囲んで歓談していた。中にはスンのような女性冒険者もいるようだが、男性客に大酒を飲んで騒いでいる者はいないようだった。

「『』は町一番の宿で、女性冒険者御用達の宿である

スンの説明によれば、やはり女性が安心して泊まれる宿は少なく、こう云つた宿は貴重なのだそうだ。かといって、女性冒険者にスンやアリスさんのような高ランク冒険者は少ないので、値段も控えめで赤字すれすれ。

それでも経営が成り立つのは、実は女性冒険者保護のためにギルドが経営に参加しているからだとか。

よつて“紳士”と認められないような客は、ただちに放り出されて、以後出入り禁止を食らつるので、みんなハメを外すようなマネはしないのだ。

入口を入つて直ぐの所に受付があり、カードを提示して部屋を割り

振る。

ダークさん以下3人は一人部屋に簡易ベッドを持ち込んで1部屋に、スンとアリスさんが一人で1部屋、私は三階の角部屋を一人で使うことになった。

なんせ、“お金持ち”なもので！

グスタフさんとチャックさんは馬車を預けるため、一旦、宿を出たが、私たちは荷物を抱えてそれぞれの部屋に向かう。この後、すぐに、食事だ。

といひでダークさん、あなたの荷物はその紙袋ですか？

確かに食事はうまかった。食材が何なのか分からぬのが不安だが。食事にラーメンが出てくるかもと心配していたが、流石にそれはなく、普通の食事をみんなと一緒に食べた。酒も出たが、酒量は兎も角、悪い飲み方をする者ではなく、迷宮探査の成功？と新しい出会いに6人で乾杯した。

ちなみに、チャックさん一酒は二十歳を過ぎてから！

食事が終わり、今後の予定について話し合つたが、時間的に、やはり王都はムリ、ということで、クブスリーの町でのんびり過ごすことにした。

さつそく、その場で、全員分の一日分の宿代を支払つて、ささやかな宴は終了となつた。

もちろん、ダークさんとグスタフさんはもう少し飲んでからといふことだったが、こちらの世界では夜の楽しみといったら、飲むか、打つか、買うか、しかない。

チャックさんがどうするのか、については聞かないでおいたと思つ。

さて、私は当然、だからも誘われなかつたので、一人で部屋に戻つた。

私の部屋は、一番良い部屋の一つらしい。濃いグレーのカーペットがシックだが、流石に明かりは洒落たランプが三つだけで薄暗い。しかし、部屋の中にあるソファーセットにはお酒が用意されていて、チーズのような飲みまであった。

ベッドはキングサイズのふかふかで満足できるものだつたし、続きの間か？と思つたら、全く期待していなかつたお風呂まであった。これが贅沢というものか？

まあ、魔道具式らしいので、使い方がわからんが。

荷物を整理して・・・といつてもリュックだけなので、空のクローゼットに放り込むだけで片づいてしまった。

やることも無くなつて、手持無沙汰にお酒を少し飲んでいたら、ノックの音。

「シユン。起きてる？入つてもいい？」

15 太陽が黄色いようです。

私の携帯電話の時計は、現在1月1日午後9時15分。実は、お正月の夜なのだが、いろいろあって忘れていた。まあ、此方とあちらの時間軸が異なるだらうことは覚悟していたので、私的にはお正月でも、此方はありふれた日常の一日に過ぎない。しかあ～し！私は拘りたい。断固として！此方の世界ではお正月らしいことが、何一つ出来ないことは分かつてたが、唯一つ、たつた一つだけ、出来ることがある。

はい、そこあなた（だれ？）正解ですよ～！

そう！それは、我が国古来より連綿と続き、決して一人ではできない神聖かつ欠くべからざるところの“姫始め”という伝統儀式だまあ！

はあはあ・・・

そのために夕食の宴会を早めに済ませるよう根回（日本人ですから？）し、食後の別れ際に、スンに視線でサインを送り、荷物を片付け、ベッドにも入らずに彼女を待ち侘びていたわけぽ・・・じゃなくて“よ”お客様。（だからだれ？）

と云う分けで、スンが部屋にやつて来た時、私は直ぐにスンをベッドに押し倒した。

その時、彼女が私のプレゼントした夏用パジャマを着ていたこととか、枕を抱えていた姿に異常に萌えたとか、ノックの後の声が既に女の子言葉だったとか、私の頭はいろいろすごい事になってしまっていた。

所謂、野獣状態。

とってもお高い部屋で、ちょっと余裕を持つて彼女を迎えて入れ、お酒を少し飲んで、摘みを口にし、楽しい会話で盛り上げて・・・知るかああ！

スンは可愛い、すんごい美人で、すごく健気で、なにより、私なんかを好きだと云ってくれる最高の彼女なんだ。

一気に押し倒す以外に何をするつて？バ～カ！バ～カ！

・・・・・・・・都合により一部削除・・・・・・・・

それでも恥々しげに朝はやつてくる。

私は神竜の体を持つために、体力が異常に増強されているらしい。その私にスンを付き合わせるのは無謀かもしれない。ついさっきまで嬌声を上げていたスンは、キングサイズのベッドの上で、うつ伏せの状態のまま力尽きたように眠っている。

風邪を引かないよう、美しい裸体をシーツで包みながら、男の悲しい性だろうか、スンが満足してくれたか？喜んでくれているか？とても気になった。

これが、賢者モードといつやつか？

それから、昨晩、自分がやらかした何から何までもが、恥ずかしくなってきた。

夜が早い分、異世界の朝は早い。まだ薄暗いのに、窓の隙間から見える町の通りには既に人の姿があった。

私は、外が明るくなり始めるとスンが部屋に戻りづらくなることを思い出して、断腸の思いでスンを起こすことにした。また、「あと、5年」とか云いださなければ良いが・・・

「スン、起きて。朝だよ。早く自分の部屋に戻らないと、まずいんじゃない？」

「ん、ん～ん・・・・おはようシユン」

薄く眼を開けて氣だるげにスンが朝の挨拶をする。
駄目だから・・・そういうの。可愛すぎる。しかし、ぐっと我慢する。

そして、スンがシーツを巻き付けたままベッドに起き上がり、目を擦りながら此方を向く。

空気を入れ替えようと少しだけ開けておいた部屋の窓から、ちょうど朝日が差し込んでスンの顔を照らす・・・て、えッ？

しまつたああああ！

私は慌ててスンをベッドから抱き上げると、小さな悲鳴を上げるスンを無視して、ベッドの脇に立たせる。そして、巻き付けていたシーツも剥ぎとると、スンが明るくなつた部屋で恥ずかしげるのも無視して“氣を付け”の姿勢を取らせた。顔が真っ赤。

それから、近くによつたり、離れてみたり、後ろから、前から、何度も確認した。

スンはその間、恥ずかしそうにしていたが、だが、私の様子がおかしいことに気が付いて、怪訝な表情を見せた。

若返つている！

もう、“お肌スベスベの強力版”では済まされない。

もともとスンは若々しくて、綺麗だし、可愛いが、それでも年齢に見合つた美しさであり、成長が止まつたような美しさではなかつた。そういう人は最初から『永遠の美少女』とか表現するべきだろう。

そして、その場合、その人が実際に歳をとると、大概、何処かに不自然な違和感を生むものなのだ。

だが、今のスンはどう見ても、青春真っ盛りの10代に“しか”見えない。

やつてしまつた・・・

すっかり、自分の能力を忘れていた。でも、今回も、コンちゃんは
使用したのに。

ああああ！・・・この場合、避妊だけじゃ駄目なんじゃ？
もしか・・・しなくとも・・・“あれ”が原因だな。

15 太陽が黄色いようです。（後書き）

エッチが止まらない
エッチ過ぎたみたいです（11／21）

16 屁理屈全開のようす。

朝日が完全に顔を出すころ、私はスンに直ぐ部屋に戻つて着替えてから、もう一度私の部屋にくるように云つた。

スンには、私のリュックサックから鏡（大）を取り出して、自分の状況を理解してもらつた。まあ、暫くは、鏡を見つめ頬に手を当ててニコニコしていたが・・・女の子だねえ・・・

暫くして、遅いなあと思った頃、ノックの音がしてスンが戻つて来た。

ただし、アリスさんを連れて。

こつそり部屋に戻つたが、その時は既にアリスさんが起きていて、予想通り、一発で若返りに気が付かれ、強引に同行を求められたそうだ。

「何をしたのよ？ シュンさん」

「いえ・・・あの・・・ナニをしただけです・・・けど」

私の言葉にビシッという擬音つきで、アリスさんの表情がきつくなる。実際のところ、少し激しかったかもしねないが、ナニをしただけで・・・はい！ すみません。

私達は正座させられ・・・床はカーペットを敷いただけで・・・あれ？ デジャブ？

だが、本当のことは云えない。神様との約束があるから。だから、スンが部屋に戻っている間に、考えを整理して辻褄の合づ言訳を考えた。

実は私、こういうの得意なんです。昔そういう仕事してたから。簡単に云えば、起きてしまつた現実に整合性の付く原因と理由を後

付けし、今後について納得のいく方向性を示す。決して真実ではないが、かといって嘘でもない。

そして、嘘と証明することは誰にもできない。で、後は、ひたすら謝り倒す。

大人つてきたないよねえ・・・

と云うわけで、私の屁理屈は次のようになつた。

まったく理由は分からぬ。しかし、推測に過ぎないが、私が異世界人であることに大きな原因があるのではないか？私のいた世界と此方の世界の人間は、全く同じに見えるが、そもそも、向こう側の世界には、魔法やその素になる魔素は存在しない。

もし、存在すれば、向こう側の科学技術で検出されないはずはない。確かに、歴史的には魔女が居たとされるが、それは当時の宗教的な云いがかりに過ぎないことが確認されている。考えられるのは、私がこの世界に入り込んだ時に、魔素を体内に取り込んでしまったのではないか？ということ。

その結果、もともと空っぽだつた私の体が大量の魔素を吸収、蓄積したうえ“体液の交換”によって、魔素がスンの体に入り込み、更に活性化された結果、若がえりが起きた。

というものだつた。

へえええ・・・そなんだあああ・・・

まあ、どれもこれも推測とこじつけで、要するに、異世界人の不思議パワーということになるのだが、真偽の程は、少なくとも今は確認できないので良しとしよう。

それから、私のギルドカードの体内魔素レベル『』が、彼女達には意味が分からなくても、見たこともない記号であることから、この出鱈目に信憑性を与えた。

「スン。あなたはどうなの？体に異常はない？」

「いや？むしろ以前より体が軽くなつたような気はするが、これといつて異常はないな」

「悪いけど、そこベッドに・・・いえ、ソファーに横になつて頂戴。私は治療術師じゃないけど、少しだけ調べさせてほしいの。見る限り、大丈夫だとは思うけど」

「ああ、構わない。やつてくれ」

言訳を考えるのに必死だった私は、汗と体液とで汚れたベッドを整えることを忘れていたので、仕方なくスンはソファーの長椅子に横になつた。（そこでもしましたが・・・）

ちなみに、今のスンはちゃんと服を着ているが、装甲は付けてない。

アリスは、暫くの間、スンの体に手をかざして目を閉じていたが、やがて眼を開けると呟いた。

「異常なし・・・ね。体内魔素にも生命力にも異常なしよ。むしろが強くなっているみたいね。驚いたわ・・・魔法を使って若返ることはできないことではないけど、その場合、急激な体内魔素の減少で衰弱するか、最悪、死んでしまうことだつてあるのに・・・」

「へえ、魔法で若返ることってできるんですかあ・・・」

「何度も云わせないで！出来ることはできるけど、其れをすれば殆ど死ぬか寝たきりの状態になるのよ」

「でも、スンには問題ない・・・？」

そこが一番重要だ。

まあ、神様によると私の血肉は若返りの靈薬になるらしいから、害があるとは思えないが、恋人の体を心配するのは、ある意味、私にとって、権利であり、義務もある。

まして、スンを今更失うことは私には耐えられないことだ。
もちろん、スンに問題は無い、ということだった。

「じゃ、次。シュンさん、あなたの番よ」

「へ？」

「異世界人にそんな能力があつたとして、急激に吸収された魔素が、あなたの中はどうなつているのか気にならない？そもそも、体外魔素は魔術師がその体内魔素でコントロールすることで、大きな力を得るものなのよ？それを、一時的に体内に吸収するだけならともかく、完全に蓄積して活性化させるなんて、普通ありえないことなの」と云う分けで、アリスさんに体を調べられました。

結論から云えば『解らない』だった。治療術師が使用する診断魔法が、私の体内に吸い込まれて反応しなくなるそうだ。

ううううん、私の体にはレーダー波吸収塗料（魔法版）でも塗つてあるのだろうか？
スンは少しだけ心配そうな顔をしたが、兎に角、私は気にしない。大丈夫なのは知っているから。

「さてと・・・じゃあ、私、他のみんなを呼んでくるわ

まあ、ここにきてメンバーに隠すのは不可能だし、私が異世界人であるという秘密を守るためにも、メンバーには事情を説明しておく必要があるだろ？

そして、宿のロビー辺りで初めて顔を合わせて驚かせるよりは、今のうちに私の部屋で驚いてもらおう、ということになつた。

結果、思つたほどの混乱は起きなかつた。

ダークさんは“どつか変わつたのか？”で終わつたし、グスタフさんは“なるほど”だつたし・・・唯一、変わつた反応を示したのは

チャックさんだろうが、もつとも、“驚く”という反応ではなかつたが・・・チャックさんは、スンを見るなり、ソバカスの散った顔を赤らめて、明らかにモジモジした。

おじさんには分かるぞ、少年！

昨日までの“姉さん”が、どう見ても自分と同い年か、ちょっと下位の美少女に大変身したのだからな。今のスンは君ぐりこの男子が一番意識する年齢の女の子だものな！
だが、云つておく。

あげないよ？

ていうか、ちょっとかい出したら殺すよ？

決して負けられない戦いがここにある――！

16 尻理屈全開のようですね。（後書き）

なんか、読んでくれてる人が急に増えました。
ありがとうございます。

スンと男子諸君との顔合わせが済み、幾つかの打ち合わせを行つた後、メンバー公認（肉体関係含む）の仲となつた私たちは、スンが私の部屋に引っ越すことになった。

何處となくうれしそうに荷物を運ぶスンを見て、何とも云えないうれしさが込み上げたのは、昔、同棲していた彼女が、私の暮していったアパートに初めてやつて来たときと同じ感覚だったかもしれない。あの頃は、若かったなあ・・・

私はソファーに座つてぼんやりスンを眺めていたのだが、そもそも、スンの荷物といつても大したものは無い。大きな荷物の中身は着替えの服と、私には良く分からぬ細々とした品々。女性だからね。一番の大物はやはり、甲冑と長剣だつた。

スンは剣士としてはBランクにあって、女性としてはかなり珍しい部類らしい。

もうすぐAランクに上がるらしいが、殆どの女性冒険者は魔術師か戻候のような体力と云うよりは技術職が多く、殆どが最終的にBランクになるかどうかで引退するらしい。体力的には仕方がないのだとか。

しかし、類まれな才能のあつたスンはもうすぐAランクに昇格する。

「私は剣を握ったのが随分遅くてな。それから、幾人かの良い師匠に出会えたお陰で此処まで強くなることができた。それに、今のメンバーにも感謝している。今のメンバーとはもう3年になるが、冒険者として独り立ちできるまでになつたのは、間違いなくみんなのお陰だと思っている」

人の強さと、ギルドランクの高さとは必ずしも一致しない。

実際、王宮騎士団の団長クラスになれば、ギルドに所属していないなくともAクラスか、或いはそれ以上の実力を持っていると云われる。しかし、その強さは冒険者としてのそれではなく、職業柄、対人戦闘に特化している。

無論、王命による魔獸討伐もあるから、魔獸に対して無力という分けではないが、経験の差はどうしようもない。

結局、それ程の強さがあつても冒険者として大成するかどうかとは別物なのだ。

「私は運が良かつた。なにせ、『鉄壁のダーク』に『鷹の目グスタフ』の二人に出会えたのだからな」

なんでしょうか？その厨二病的なお名前は？
ちょっとだけ、聞いてはいましたが、グスタフさんにも一つ名がつたんですね？

ダークさんはある魔獸討伐において、超重量級の一撃を例の大盾をもつて受け止めて見せたことから付けられ、グスタフさんは広範囲に毒霧を振り撒くことで、だれも近寄れなかつた魔獸を、超遠距離射撃で仕留めたことで名付けられたらしい。

「二人ともどうの昔にAクラス入りしている。多分、Sクラスも夢ではない」

Sクラス。

世に多くの冒険者があれど、Aクラスになれるのは1000人に一人と云われ、そのAクラスの1000人に一人がSクラスに至る。冒険者にとっての遙かな頂き。

そして誰もが一度は挑み、そして諦める至高の存在。

だからこそ、現役のSクラス冒険者は大陸に7人だけ。

「その人たちって、何してCクラスになつたの？」

「何でも、神魔獣を倒したパーティーのリーダーだつたらしい」

「ゲロゲロ」

「？」

スンやみんなは、そんなことしないと思つけど、私が神魔獣（守護者）だつてばれたら超やばくない？

「いや、何でもない。じゃあ、もしかしてみんなが『深奥の迷宮』に潜つたのつて、神魔獣を倒すことが目的だつた・・・とか？」
「まあな・・・しかし、ダークが望んでいる分けではないし、迷宮探索で無理はできない。パーティーとしてはAクラス二人に、実力的にはAクラスのアリストと、Bクラスの私に、Cクラスのチャック。十分勝算が望めるメンバーではあるが・・・後は運だな」

云われてみれば、確かに豪華なメンバーだ。

「もつとも、今まで一度も討伐されたことのない『深奥の守護者』に勝てるかどうかは、流石に分からぬから、今回は、まあ、様子見だな」

・・・いえ、多分、楽勝かと・・・

ていうか、『深奥の守護者』つてなに？また、ややこしい名前付けちゃつて。

それって私の前任者のことだよね？私じゃないよね？
違うと云つて！

「どうしてスンは剣を握るのが遅かったの？」

「・・・私は、・・・私は、ある王家に剣を持って仕える一族の出

だ。本来は直ぐにでも剣術を仕込まれる筈だった。しかし、お爺様が亡くなり、父が家を継ぐようになると、父は家名に胡坐をかけて権勢に走った。私はそのための道具だから剣を学ぶ必要はない。実際、直ぐに婚約者をあてがわれたからな

私は、慌てて、辛いなら話さなくとも良いと云つたが、スンは話したいといった。

「私には父を非難することはできん。その当時16歳だった私は、それが当然だと思っていたし、婚約者の男は家柄も見てくれも良かつたし・・・私は・・・その男に身も心も捧げたのだ」

スンは目を閉じて、折り畳む途中の服を握り締めていた。

「だが、父に政治の才能など無かつたのだ。すぐに罷に嵌められ失脚。家は没落して父は母と共に命を絶つた。私は何も知らず、婚約者に囲まれて過ごしていたが、父が失脚すると直ぐに殺されかけた。と云うより、その男も父を罷に嵌めた一派だった訳だが」

それからなんとか逃げ出した所を、家に仕えていた家臣が国外に逃がしてくれ、各地を放浪しつつ、剣を学んだのだそうだ。ただし、ただの冒険者として、あくまで生き延びる糧として。

私は、付きあつた女性の過去を尋ねたことがない。

過去は変えられないし、過去も含めて今のその人を作っていると思うからだ。今のその人を愛しているのなら、聞く必要のないことだと思う。

だが、勿論、聞いて欲しいと云われて、聞きたくないと耳を塞ぐこともない。

スンにとつては、話すことが必要だったのだろう。

一つのけじめ・・・

「シュン。私は・・・私の初めてをシュンに捧げられなくて、すま
ないと思ひ」

私は黙つて、泣きべそをかいているスンを抱きしめた。

暫くして、私はスンを町に連れ出した。若返りがどうとか、私の素性がどうとか、どうでも良かった。宿のカウンターで一番の服屋を尋ねてから、手を繋いだまま宿を飛び出すと、一旦散に服屋に飛び込み“この子に似合うとびきりの服を”と注文した。

服屋のおかみさんは、ちょっと驚いた顔をしたが、直ぐに可愛い服や靴、小物まで、店じゅうを引っかき回し、更に、私の趣味のデザインを幾つか出してくれた。

私は服のセンスを求めてはいけない。

私に任せるとこうなる。

時間は掛つたが、白いフード付きのハーフコートに、紺のセーター、赤いチェックのミニスカート、白のヒーハイ、茶色の編み上げハーフブーツ。

ん？JK？知らんがな。

スンは足を出すのをとても恥ずかしがっていたが、出来上がった姿を店のおかみさんに見てもらいOKを貰つた。

少し、奇抜ではあるものの「若いんだから冒険しなくちゃ！」と云われたスンは、何か言いたげだったが、ここは“無視”が正解。

銀貨20枚？を支払い、店を出ると、スンは私の陰に隠れるよつて寄り添つた。

その頃になると、もう昼が近く、公園近くまで来た私たちは、田に付いたレストランらしき店に入り、食事を頼んだ。

偶然とび込んだにしては、なかなか良いレストランだったようだ。清潔なテーブルクロスに薄いピンク色の花（恐らく造花）が活けられていて、ウェイターの態度も悪くない。

食事の間中、私はスンの着る服が、あちら側でどんな女の子がきるのか？他のファッショնにはどんなものがあるのか？とか、詳しくもないのに、兎に角、話しつづけた。

「デートで嫌われるパターンだということは、重々承知の上で。不思議と、周りの視線は気にならなかつた。

食事の後は、手を繋いでぶらぶらと町を歩いた。

相変わらずスンは私の陰に隠れようと/orするが、武器屋と鍛冶屋には自ら入ろうとするので困つた。ちなみに、スンの服装で長剣を腰に差すのは余りに味気ないので、私の右腰に提げ、スンが右手で何時でも抜けるようとした。

左腰には私がスンから借りたショートソードが差してある。コートで隠れて殆ど分からないと思つけど。

「足がスースーして落ち着かないのだ」

スンはずつとそんなことを云つて、しきりにスカートの裾を下に引つ張るのだが、ミニスカートよりハーフコートの方が、少しだけ丈が長い。

結果、絶対領域はコートに隠れてしまふのだが・・・私の良心が咎めたが、ここには我慢して貰おう。

それに、スンの表情が随分明るくなつたような気がしたので、私は満足してゐる。

いつの間にか町を一周したらしく、公園に戻つてきていた。

私は、公園のベンチに腰掛け、スンを横に座らせてから、剣を鞘ごと抱きかかえ、スンが抵抗する暇も与えず、「ゴロゴロ」と横になつた。男のロマン初級編であるところの膝枕である。

まあ、膝枕の場合二ハイが邪魔なのだが、足の長いスンなら十分

生足を堪能できる。

「シユ、シユン！」

スンは驚いたように私の頭を抑えるが、この体制になってしまえばどうにもできまい。

スンは周りを見渡して赤面しているが、当然、無視。ということで、後頭部で生足を堪能しながら上を見上げると、セーターの巨大な膨らみの向こうで、スンが困った顔をしている。微妙万歳！

スンが諦めたように、私の頬や耳をいたずらし始めた頃に、唐突に横向きになり、今度は頬で生足を堪能する。

無論、私のお顔はスンのお腹の方を向いている。そのままグイグイとお腹の方に近づいて行くようにしながら頬でスリスリ。

「シユン、あのは、シユン……」

何故か必死に私の頭を遠ざけようと、両手で押さえるスンが、今までなく、困った声で話しかけて来るので、ちょっと見上げてみると、スンが私に屈みこんでくるようにして口元を耳に寄せた。

ムグ！胸で顔が……幸せ。

「シユン、忘れていないか？私は、その……穿いていないのだが……

「あ」

此方の世界には常に下着を付けるという習慣がないそうだ。
無論、下着自体は存在するが、それは所謂、女の子の日に身に着けるものだとか。

考えてみれば、ヨーロッパでも下着文化は中世後半から漸く定着し

始め、日本では、近代でも下着文化は大幅に遅れていたそうだ。
確かに、デパート火災かなにかで、それが原因で多くの女性が亡くな
つてから、爆発的に広がったのではなかつたか？

いずれにしても、私は微妙にかどSの羞恥プレイをスンに強要
していたことになる。

だが・・・やつてしまつたものは仕方がない。
それに、今、とても気持ちがいいし・・・当初の目的、スンを“元
気づける”を忘れた私は更に暴走することにした。
うむ！確信犯である！

「まッいつか！」

と、そのままの姿勢でスンに云つた。

・・・・・自主規制・・・・・

そして、夕食まで部屋に籠つた。

何をしていたかは、想像に任せよ。

それより、スンに下着をプレゼントしなければ・・・今日は特別と
しても、女性は下半身を冷やしてはいけないらしい。
向こうで買ってくるか？30過ぎのおっさんが女性用の下着を？
むりむりむりむりむり・・・絶対むり！

いつそ、スンを向こうに連れて行つて・・・あ、今のスンは・・・
駄目だ・・・
フツ・・・確実に捕まるな。

19 見られていたようです。

私達の宿屋「春の風花亭」では、スンの若返りが評判に・・・は成らなかつた。

冷静に考えてみれば、昨夜のスンと今のスンを同一人物と見るよりは、身内、具体的には良く似た姉妹の方が納得しやすい。まして、私がスンを連れ出した時を除いて、戻つて来た時は完全に少女の装いであつたため、口を開かなければ同一人物と見られる恐れは殆どなかつたのだ。

「打ち合わせと随分違つようですが、それにしても、無茶をしましたね」

笑顔でそう云つたのは夕食の時のグスタッフさんだつた。

グスタッフさんによると、スンの若返りを誤魔化すことはできたし、気付かれる恐れの高い宿のスタッフも姉妹と誤認しているが、昼間の行動は、逆に、街中で非常に目立つていたらしい。覚悟はしていたが・・・

黒髪黒目で黒のロングコートをまとつた風采の上がらない小男が、超絶美少女と手を繋いで町を練り歩いた訳だから・・・て、あれ? なんで知つてるの?

「お忘れですか? 私たちはあなたの護衛なんですよ?」

「そうでした。
と云つことは・・・」

「公衆の面前で随分大胆なことをなさるのですね? あれが異世界流ですか?」

「・・・だ、だから止めてくれと、何度も云つたのだ」

「あらそつ、それにしては随分と楽しそうだったじゃない？服なんか買つてもうつて」

こつ云つ場合、ダークさんは首を傾げ“何の話しだ？”状態で、チヤックさんはモジモジして会話に入つてこられない。

夕食も一人で食べたかったが、宿舎に夕食代が含まれるし、時間帯が同じなので結局みんなと顔を合わせることになる。その結果が現状。

ちなみに、スンは着替えた。流石にノーパンと分かつていてあのミニは無いわああ！

外側は兎も角「お宝」は、私にだけ見せてくればよいのです！

「ま、良いわ。スンを大事にしてくれるなら」

「そこは同意できますね。問題はこれからですが、さて・・・」

「いつそのこと、暫く町を離れるのも手よね？」

「ええ。今日一日だけとはいえ、それでも一人に注目していた連中もいましたからね」

「それは私も気が付いていた。嫌な視線だったが、近づいてこなかつたからな」

「覗きではないみたいでしたが・・・寧ろ、その方が安心なんですがね」

私は全く気が付かなかつたが、そうだったらしい。

グスタフさんによれば、此方の世界では美しい娘の誘拐は珍しくなく、行先はお決まりの奴隸商人。

クブスリーの町では奴隸を“禁止”はしていないが、奴隸の“持ち込み”を禁止しているため、今日、町で私が目にすることは無かつた。

そもそも、王国が禁止していない中で、遠まわしな方法とはいえ奴

隸の禁止を実施しているこの町のギルドは大したものなのだ。

奴隸が発見された場合は、罰としてギルドが“没収”するらしいが、あくまで“奴隸だから”ではなく“奴隸を持ち込んだから”である所がミソで、奴隸本人は罰せられない。

また、禁止はしていないから、飼い主無しの拾得物扱いで、ギルドの保護下で、一定期間、労働に従事して解呪の費用を捻出すれば解放される。

奴隸商に対しても、確たる証拠がなければ「それは俺のじゃない」と云われたら罰金もとれないが、奴隸だけは取り上げることができるし、その証言を契約書（誓約書）とすることで、解呪の儀式がスマーズに行える。茶番だな。

兎も角、奴隸商を“奴隸商であるから”罰すれば、王国の法と齟齬を生じ、敵も作る。とくに奴隸商は嫌われ者でありながら、金だけは持つていて裏にも顔が利く。

つまりは、そういうことのようだ。

「昨日までのスンと今のスンが、別人だと認識されているのは良い事なのですが、その所為で、余計な者に目を付けられたようです。風の旅団所属のBクラスのスンなら、あんな口口ツキは近寄ってこないのですが・・・」

「蹴散らすまで。」この体はシュンだけのものだ。シュン以外には誰にも触れさせん！」

「はいはい、御馳走様」

豊満な胸を突き出し、凛々しく、男らしく宣言したスンだったが、アリスさんの言葉で思いつきり惚気たことに気が付いて真っ赤になつた。

が、スンさん。それは私が云うべき内容のセリフでは？

どちらにしても、これからはスンの身の回りに気を付けなければならぬ。

弱い異世界人の私がどうするのか？

あらあら・・・

私は確かに強くないし、寧ろ、弱い人間だろう。喧嘩も殆どしたことがない。

だけど、相手が倒すべき敵であるなら、そう認識したなら、私はどんな卑怯な手を使おうと、相手を潰すだろう。いや、寧ろ進んで使うだろう。

ほら、よく云うでしょ？おとなしい人ほど、キレると怖いって。

私は今までそこまでキレた事が無いのだが、多分、キレたら何でもやるだろ？

その場合、例えば、私自身は、土下座して小便を漏らし、涙を流しながら許しを請い、殺す価値もないと思わせるほど情けない姿を見せておいて、後ろから確実に猛毒を塗った武器で刺すとか？

・・・とにかく、思いつきり、”冷静にキレる”だろうな。それは断言できる。

正々堂々？何その可愛い生き物？

私の思考がちょっとだけ暗黒面に落ちていた。

だが、構わない。スンに危害を加える輩は、みんな、始末してしまえばいい。

取り敢えず、一人。スンを殺そとした前の婚約者。

10年以上前のことだし、こちらから出向くつもりはないが、今後、余計な手出しをしてきたら容赦はしない。

・・・ピストルって何処で売ってるんだろ？

「どうしたの？シュン。そんな怖い顔で・・・笑つて？」

「は？・・・いえ、何でもありませんよ？」

私は怖い顔でクスクスと笑つていたらしい。
チャックさんが引いている。

まあ、なんだ。この世界にはあちら程の厳格な法はない。というか、
私に云わせれば無法状態なのだが、今はそれがありがたい。
そうか・・・私は、倫理ではなく、法に縛られていたと、そういう
ことなのか。

私のせいでの妙な雰囲気になってしまった。

食後のコーヒー（らしきもの）をウエイトレスが運んできたところで、
”それ”を受け取りながら、おもむろにダークさんが云つた。

「いつ云つ時は、これが一番だ！」

陶器製のカップにはチキンラーメンが入っていた。

20 「非常事態は突然に」のようす。

今日は、私が異世界にやつてきて二日目、の朝。初日1月1日は、殆ど旅路。但し、スンとの「れいはすかし」「姫始め」をやり。

二日目1月2日は、スンを連れて町を散策しながら“羞恥プレイ”をやつた。

うむ！基本、エッチな事しかしてない！が、敢えて云おう！「満足である！」と。

今日も肌寒いが、風はなく、天気は良い。

宿の前にパーティーの馬車が停めてあり、チャックさんがこの町で買い込んだ食料などの荷物を積み込んでいく。

朝の挨拶をしてから私も自分の荷物を馬車に積み込み、他のメンバーを待つことにした。

グスタフさんは、武器屋に頼んでいた矢の受け取りに、ダークさんは昨日、魔獣から得た財宝の換金報酬を受け取った後、個人依頼を受けたことを報告し忘れたため、改めて、届け出に赴いている。女性陣については、いわずもがな。

スンは昨夜から私が帰ることに愚図つていてる。

しかし、私は部屋を殆どそのままにして出てきている。正月三が日だから、私が居なかつたとしても、ご近所は誰も気にはしないが、流石に一度帰つた方が良いだろ。

直ぐに来るから、といつても納得せず、むこうに恋人でもいるのではないか？と勘織つたスンは「前にも云つたけど、私はシウンを縛つたりしないよ？私は妾でいいの。その代わり……お願い……と、その夜は、基本受身のスンが・・・ゲフングエフン。

だめだめ・・・朝から工口に走るところだつた。

思い出せ！私は「大人」だ。やりたい盛りの学生ではない・・・で、今更か？

兎に角、何とかスンを宥め、今朝の出発となつた分けだが、何時でも向こうと行き来できるようにと、アリスさんから転移魔法とその練習方法だけでも教えて貰うことを約束させられた。

アリスさんによれば、転移魔法にも幾つかあり、魔法陣を使用して術者一人だけの転移は初級レベルで誰でもできるとのこと。難しいのは荷物や人数が増えた場合で、これは中級とは言えないと、かなりの魔力を消費するので使える者が限られる。

後は、距離。遠くへ転移しようとすればするほど、魔力を消費する。もつとも難しいのは魔法陣なしで転移することで、これは中級魔法に属し、単独の転移でもかなりの魔力を消費するため、敢えて使用者はいないと。

方法そのものは簡単で、魔法陣を思い浮かべて、そのイメージに体内魔力を流す。次に目的地をイメージして呪文を唱えるだけ。

この時、魔法陣の内部にあるものは目的に転移するのだが、魔法陣自体の大きさは大して問題にならないらしい。

まあ、私の場合は、魔力そのものが感知できていないので、要練習といったところ。

ちなみに、呪文は「彼の地に運べ。雷鳴の如く、風の如く。ムーブ」だつた。

守護者なのに？

車はね。エンジンと燃料タンクだけでは走れないの。

今私は、膨大な燃料タンクと使い方の分からぬ大排気量エンジンを、別々に持っているだけで繋がつてもいい。

スンは単独での転移魔法は使えるらしいが、パーティーとしての依

頼が数日後に受けてあり、私と一緒にあちらの世界に行くことはできないらしい。

まあ、私が役立たずでなければ彼らに付いて行くこともできるのだが、それはムリ。

この町で護衛を雇つてスン達が戻つてくるのを待つのも、費用的には可能だが、下手に他者と接触すれば、異世界人であることがバレる恐れがあるので、やっぱりムリ。

結局、当初の予定どおりに私は帰ることになった分けだが、例の部屋を常時開けておくことは約束させられた。（暖房費がバカにならんのですが……）

これについては、話しを聞いたダークさんも強く推奨していた。
魂胆が見え見えですよ、ダークさん！？

そうこうしている間にダークさんと、グスタフさんが戻つて来た。が、少し、浮かない顔をしている。

「パドとか云う村が、魔獣に襲われて消滅したらしいな」

「ええ。私も聞きました。『狂騒』ではないかと。しかし、その方々には申し訳ありませんが、パド村がセニエ領なら、一般人にこれ以上の被害はないでしょう」

ダークさんはギルドで、グスタフさんは武器屋で、それぞれ同じ情報を得ていた。

パド村はクブスリーの町から、中継地を一つ隔てたセニエ領の北にある村らしい。

セニエ領はロイド・フォン・セニエ侯爵の納める領地で、領内に『火炎の迷宮』を抱えている。その迷宮が狂騒を起こしたのではないのか？というのが専らの噂。

しかし、セニエ侯爵は賢明にも独自に騎士を城下町に集めており、

避難民の収容が既に始まつてゐるらしいことのことだった。

「ギルドの待機命令はまだ出でていないのですね？」

「ああ、實際、狂騒が起きたとしても、セニエ領なら単独で撃退できるだらうし、それに、あそこの騎士団はつえエって噂だつたしな」「確かに、高位の冒険者と単独契約もしていましたね」

セニエ侯爵は、狂騒に備えて十分な備えをしていたらしい。どつかの国の政治家のみなさんにも見習つてほしいものだ。元気の良い“やり手”と噂される若手の議員さんが「数百年に一度の洪水に備えるために、こんな堤防を作る必要なんてあるんですか？」なんて質問していたが・・・

私が氣に入らないのは『質問』であることだ。今度どんな事が起きようとも「質問しただけで不要とは云つてない」って答えようとしているのが見え見え。自分は責任とらないことを前提に質問しているのだから呆れる。

それに比べれば・・・

カカーン！カン・・・カカーン！カン・・・

突然、ギルドの建物のある方から、特徴的な金の音が聞こえてくる。道端を歩いていたおじさんやお使い途中の少年が立ち止まり、不安そうな顔で振り返つている。

すぐに、宿の中からスンとアリスさんが飛び出してきて、同じよつにギルドの方を眺める。

「悪いな、シユン。あれはギルドの“非常招集”つてやつだ。思つたより、やべえことになつちまつてゐるらしい・・・」

何の事だか良く分からなかつたが、かなり“拙い”事態になつてゐる事だけは分かつたので、私もみんなに付いて、ギルド前に同行した。ギルドの中に入りきれないからか、建物前に木箱が置かれ、その上に壯年の男が立っていた。

「よつ、ギルドマスター！セニエだろ・・・『火炎の迷宮』の狂騒か？いくらだ？」

「救援要請の依頼か？いいぜ、俺達がいきやあ、楽勝だぜーーー？」

群衆の中から幾人かの冒険者が、勇ましく景氣のよい声を上げた。

「ああ、狂騒だ。セニエ領の『火炎の迷宮』・・・そして『業火の迷宮』一つ同時にだ。セニエの城塞都市が魔獣に包囲されたらしい」

2.1 練習が必要のようです。

ギルドマスターからの情報は、多くの冒険者的心を戦慄させたようだった。

さつきまで、威勢の良かつた者たちも口を噤んだ。『業火の迷宮』はオーランド伯爵領にある迷宮で、地理的にはオーランド領の町より、セニエの城塞都市の方が距離的に近い。

二つの迷宮の同時狂騒。歴史的に無かつた重大事件が、よりによつて私がこの世界にいるときに起きた。

私達は一旦宿に戻ることになった。もづ、風の旅団は私を護衛して「深奥の迷宮」に戻ることはできなくなつたのだ。

ギルドマスターの依頼は「明後日正午までに各冒険者は装備を整えてギルド前に集合し、その場で部隊を編成して、隨時、全面解放されたセニエ城塞都市の転移拠点に転移する」というものだった。幸い、セニエの城壁自体は持ち堪えているが、飛行タイプの魔獣に侵入を許している状況で、被害は時間と共に増加しているらしい。

「そういうわけで、シコンさんには此処で待っていてほしいのです

グスタフさんが申し訳なさそうに云つた。

冒険者は幾つもの特権があるが、それらは国やギルドの緊急事態には協力する義務を負うからなのだそうだ。まあ、特権を既得権と勘違いするような阿呆よりはましか?

で、私が参加しなくていい理由は、ランクがFだから。召集の対象はDランクまでで、要するに足手まといのEやFランクを連れていく余裕は無いということ。納得です。

「魔獸が溢れるって、具体的にはどう云う状態になるんですか？」

取り敢えず、私のことはどうでもいい。多くの人の命が掛けているらしいし、自分で云うのもなんだが、私はこう云う場合は、ジタバタしない性格のようなんだ。寧ろ、極端に冷静になる。

だが、私は参加できないが、Bランクのスンは行かなればならない。

みんなもだ。

「そうですねえ、迷宮中の魔獸が地表に出てきた挙句、周辺の魔獸を巻き込んで暴走する、と云えればいいでしようか？兎に角、大魔獸数匹を中心に中級魔獸や下級魔獸まで、一つの迷宮の魔獸全てが出てきて、人を襲います。数は・・・2000～3000でしょうか。・・・

「それが、今回は二か所で同時に起き、しかも一つの都市を襲っている。セニエは準備していたらしいが、二つ同時とは考えていなかつた筈だ。飛行タイプの魔獸もいるそつだから、かなり酷い状態だろうつな」

グスタフさんとスンの話を纏めると・・・

本来は狂騒が起きると、騎士団を中心に出撃し、足の速い先頭集団を撃破しながら城塞都市まで後退。その頃には下級魔獸はかなり数を減らしている筈なので、予備兵力の豊富な城壁付近まで引っ張ってきて、余裕を持って、中級・大魔獸を仕留める。

どこの都市でも概ねこのような方法が取られるのだが、今回は、二か所から侵攻されたため、出撃した騎士団が、まず大打撃を受けてしまい。城塞都市周辺までかなりの数の魔獸に侵入されてしまった。幸い、セニエ侯爵が単独契約を結んでいた高位の冒険者たちを中心

に、城壁付近で、一応、撃退に成功したが、殲滅には及ばず、城壁外周を徘徊している状況で、しかも、飛行タイプの魔獸まで手が回らズ、防衛側を含め都市内部に被害が出ている。

私は下級魔獸はブレードラビットしか知らないが、それでも、あんなのに包囲されたら高位の冒險者でも、安心して戦えないだろう。小さくとも殺傷力を持つ魔獸なのだから。

そして、それらを先に片付けるにしても、城壁の上に不用意に姿を晒せば、飛行タイプの魔獸が寄ってきて攻撃を受ける。

これを何とかするには、対空戦闘能力の高い魔術師や弓使いを大量に城壁に上げて、数で圧倒するしかないのだが、想定より倍以上に膨れ上がった魔獸のために、数が足りない。

そこで、セニエ侯爵は緊急依頼をギルドに提出したということのようだ。

もちろん、都市内部に侵入した魔獸を討伐するために、剣士や重戦士なども必要だ。

「心配しないでください。みなさんのお帰りをお待ちしています」

話しを聞き終えた私には、そう云うしかなかつた。冷静に見て私に今できることは無い。

最強が聞いて呆れる。

風の旅団は、今朝、深奥の迷宮に赴くための用意を終えていたから、必要な武器や食料が既に揃つていた。だから、私の様な素人に説明してくれているが、他の冒険者たちは今頃、物資を求めて街中を走り回っているだろう。

「本当に・・・すまないと思つ」

ピクッ！どつかで聞いたようなセリフ……
今のスンのセリフは……お茶らけている場合じゃがないし、自重
しようか。

改めて契約して、元の部屋に戻った私は、それでも何かできないか
考えた。何処までできるかわからない身体能力か？習つてもいない
魔法か？

そう考えると、冒険者のスキルの高さに改めて驚かされる。考えて
みれば、彼らは魔獣の種類ごとに、武器や手段を変えて効果的に倒
しているのだ。魔法だけでも駄目、身体能力だけでも駄目なのだ。

なら、戦いでない部分でならどうだろ？

私がアリスさんに教えて貰つた魔法は、転移魔術。まだ、出来ない
が！？

でも、一応、まともに教えて貰つたのはこれだけだし、できるよう
になればギルドで物資輸送の手伝いくらいできるかもしれない。
練習しよう……もしかしたらその物資がスンを救うことだってあ
るかもしね。

「シュン、考えことか？」

いつの間にか、スンが部屋に戻ってきていた。

ロビー兼食堂での話し合いの後、風の旅団としての話し合いがあつ
て、スンは当然に参加したため、私とは別々になっていた。

「いや……ちょっとアリスさんに相談があつたんだけど……」

残念ながら、アリスさんは高位の魔術師として、ギルドに呼ばれてい
ないそうだ。アリスさんのランクはCなのだが、それ以外の職種と
違つて、体内魔素の保有量が物を云う魔術師にランクはあまり意味

が無いそうだ。

できれば、アリスさんにもう一度よく聞いておきたかったが・・・

「アリスになんの相談だ？私では駄目なのか？」

あれ？なんでしょうか？今、私の微S心を猛烈に刺激したものは・・・
・？

うううむ、スンには、過去の事情からトラウマがあるようだ。実際、
例のことがあつて以後“他の男に抱かれたことはない”と必死に訴
えていた。気にしないのに。

「スンじゃ、ダメ」

22 やりてみるよつだす。

まあ、なんといつが、この後、スンを言葉攻めでいじめ倒して、泣かせた上で、エッチな要求をする妄想が脳裏をよぎったわけだが、
“今は”止めておいた。

分別をわきまえた大人に、俺はなる…！

「転移魔法のやり方を教えて貰おうとおもつてね」

何処かホツとしたようなスンに先程までの考えを話すと、それ位なら自分が教えられると云い始めた。何でも、スンはアリスさんから転移魔法を習つたらしい。

それに、最初の一歩である体内魔力のコントロールは、スンの方がうまいくらいだとか。

と云つことで、部屋の中で練習を開始。

座禅の要領で精神を集中して、体内魔力を感じる・・・だめ！
もう一回・・・やつぱり、だめ！

なんか違うような気がする。スンによると意識を集中してお腹の辺りにある（様な気がする）魔力の塊に触れ、そこから魔力を腕や足に伸ばしていく。

転移魔術の場合は、それを足先から魔法陣に伸ばし、体外魔術を取り込みながら魔法陣全体を満たすと魔術が起動し、次に目的地をイメージすると転移するらしい。

しかし、私にはどんなに頑張ってみてもそんな魔力の塊は認識できないのだ。

結局、二時間程、スンが付き合ってくれて、体内魔力の認識さえ出来ずになってしまった。初めてなのだから、焦ることは無いとス

ンは云つてくれたが、実は、結構、凹んだ。

一応、神竜で守護者らしいから、もうちょっとこう、なんとかなんもんですかいね？

「まあ、明日にでも、もう一度やつてみれば良いだろ？・・・ね？」

スンはそう云つて部屋の備え付けのお風呂に向かつた。

今、“ね”つて云つた。間違いなく云つた。

ちょっと落ち込んでいたけど、これは聞き逃さないよ？

でもね、ちょっと待つて欲しい。そして、私は携帯電話を取り出して、例の番号に電話を掛けた。

「夜分、誠に恐れ入りますが、神様はいらっしゃいますでしょうか？あ、神様ですか？いつもお世話になつております。村上俊です。お忙しいところ恐縮なんですが、ちょっとお伺いしたいことがございまして・・・はい、ええ、ええ、そなんです・・・」

まさに、“神頼み”を実際にやつてみた。

で、神様によると“そりや、無理じやわい”的一言だつた。私に魔術が使えないということではなく、人間とは使い方が多少、異なるのだとか。

そもそも、神竜が魔法陣なんか書けるか？と云われてみればそのとおり。

魔法陣は、人間が魔法を使えるように長い年月を掛けて、工夫に工夫を重ねて、比較的魔力が少ない者でも効率よく使えるようにしたもの。

神竜には必要がなく、寧ろ、邪魔にしかならない。

「しかし、ですね、神様？私、自分の魔力も全く感じないんです」

「お主の体は見た目はともかく神竜で、頭の先から爪の先まで魔力

で満たされておるのじゃから、そこから“特定の魔力を”などと、無理な相談じやな。いつてみれば、水の中で水を探すようなもんじやで。まあ、後は、自分で何とかせい

といふことで、神様とのお話しが終わつた私は、改めて、精神を集中し転移魔法をためして・・・みたりはしないよ?

急いで服を脱いで、スンの待つお風呂へ向かいました。

それから私はスンの白くてスベスベの体をゴシゴシ（布とか束子とかは断固として使用を拒否する！）しながら考えた。
魔力に問題が無いのなら、次は魔力の放出さえできれば魔法陣は起動するのだから、後はイメージの問題か？？？
などと考えたところで、考えるのを止めた。

昔々、それこそ、小学校低学年位の時のこと。
超能力が欲しいかつた私は、スプーンを曲げようとしてみたり、時計の針を止めようとしてみたり、いろいろやってみた。
でも、出来る筈もなく、アホな私は“きっと、集中力が足りないんだ！”とか、いろいろ考えた分け。でだ、トイレでウンコしている時に一番集中していることに気が付いて、私の超能力研究は終わりを迎えたわけだ。

ん？意味がわからんと？

ウンコしてるときに、もし、テレポートとかできちゃつたら？
まあ、ウンコしながらじやないと超能力が使えないのなら、無くても同じかなあ、そこは何故か合理的に、そして、すんなりと諦めたと云うお話し。

考えてみれば、妙に、冷めた子供だつたのだな。

そんなわけで、現在、ここで、転移魔術なんぞ発動したら、うれし

い以前に、恥ずかしすぎる。まして、転移魔術は、今の私にとっては“マジもの”なのだから。

転移魔術のことは明日考えよう。

朝になつてから、みんなはギルドでの打ち合わせのために、早くから宿を出た。

出発は明日だが、それ以前に調整しなければならないことが山ほどあつた。

まして、風の旅団は有名な冒険者パーティで、派遣される者たちの中でも高位に位置する。自然と中心的役割を担わなければならなかつた。

その日、少し疲れた様子でスンが帰つて来たのは、もう日付が変わる頃で、私は、ただ、スンをベッドに運び、静かに寝かせてやることしかできなかつた。

そして、出発の日の朝、いつも通り朝食をとり、身支度を整えた風の旅団は、厳しい顔つきで宿を立つた。

私は見送りのため、彼らと共に、以前、スンと行った公園に向かつた。

公園には、スンと座つたベンチはなく、ただ広い空間があるだけで、その中央には大きな転移魔法陣が設置されていた。

その魔法陣の脇に小さなテーブルが置かれ、私の冒険者登録をしてくれたねこ耳受付嬢が真剣な面持ちで、書類を捲り、一つ一つの名前を確認しながら読み上げていった。

そして、魔術師らしき数人の男たちが呪文を唱え、転移魔法陣が輝くと同時に、その中に立つていた20人程の冒険者たちが、次々にセニエの城塞都市に転移して消えていく。

「次、風の旅団。鉄壁のダーク以下5名。お願ひします！」

名前を呼ばれたみんなは魔法陣に向かい。スンは私と繋いでいた手を離した。

「シラウ。じゃあ、行つてくる」

「ああ。みんな、どうか無事でー！」

手を振つて見送ると、ダークさんは「ヤリ」と笑い、グスタフさんは微笑んで頷き、アリスさんはフンと云い、チャックさんはへへへと笑い、スンは、ちょっと恥ずかしそうに笑つて手をふつてくれた。

「田標はセニエ城塞都市3番魔法陣です。転移開始ー！」

23 無双するようです。

風の旅団が、他の冒険者とともに転移して姿を消した後も、私は30分程の間、公園で次々と送り出される冒険者たちを見送っていた。周りに集まっていた町の人たちも声援を送っていたから、なんとなく、同じ気持ちになれたような気がしていた。

しかし、それから間もなく・・・

「なんだ!? 魔法陣が・・・誰か転移してくるぞ? !」

「なんだと? 誰か避難してくるのかもしれん。さがれ!」

ざわめきの中、転移してきたのは一人の騎士のようだつた。
かつては白銀に輝いていたであろう甲冑は、薄汚れ、あちこちにへこみを作っている。酷い怪我を負っているのか、一人は穂先の折れた槍に体を預け、一人は魔法陣の中で倒れ伏していた。

「怪我人だ!・・・治療術師を呼べ! ! !」

「出血が酷い。急げ!」

ここに設置された魔法陣は特殊なもので、現在は、セニエ城塞都市内にある複数の転移魔法陣とクブスリーの往還のみができるようになつてゐる。つまり、彼らは間違ひなくセニエからの帰還者なのだが、伝令にしては様子がおかしかつた。

「だ・・・・応援を・・ては・・・めだ・・・・

「何を云つてゐる! 救援の部隊ならたつた今送つたぞ! もう大丈夫だツ」

すると、両腕を抱えられていた騎士が、驚きに息を止め、絶望した

よつに叫んだ。

「応援を・・・送つては駄目・・・だ！今朝・・・セニHの城壁は・・・中央広場の全開・・・魔法陣が・・・魔獸に・・・。今、・・・すれば、魔獸どものド真ん中に・・・転移することに・・・」

私は、息を飲んで見つめる群衆のなかから飛び出していた。目の前が真っ暗になつた。

ついさっきまで、笑顔だったみんなの、スンの笑顔が、脳裏に蘇つてくる。

そしてそれは、直ぐに、見たこともない、残酷な想像に切り替わる。私は、だれかの制止を振り切つて、魔法陣に飛び込むと一気に転移していた。

昨日まで、いや、ついさっきまで出来なかつた転移を、私は単独で、無詠唱で行つて、次の瞬間にはセニH城塞都市の転移魔法陣に立つていた。

第3魔法陣は、何かで赤く塗装された中央広場にあつた。そこは、見たこともない魔獸たちが我が物顔で闊歩し、人を食らつている地獄だつた。

だが、私の転移には気が付かなかつたのか、魔獸たちは直ぐにはやつてこなかつた。

「どいだ！スン！みんなあ！」

魔獸たちに気付かれるのも構わず、私は大声で叫んだ。

どこからか、かすかに檄剣の音が聞こえ、それに倍する悲鳴がそちら中から聞こえる。

まるで、ゴミのように転がる遺体の数々の中に、風の旅団の姿は無かつたが、スンと同じ組で転移した見覚えのある男たちの顔があつ

た。

一瞬の後、私はスンを見つけていた。

中央広場の片隅で、未だ戦い続いている一団がある。巨大な魔獣が数匹、その一団に必要に突進し、或いは、炎を吹き付け、そして、隙を見せた男が一人、弾き飛ばされて、固い石畳に叩きつけら“グシヤリ”と音を立てた。

ボンサン

次の瞬間、私は、ピクリとも動かないシンを抱き上げていた。

ヘンの顔は苦痛はあるが、顏色は蒼白はない。ついでに

当り前だ。右腕の肘から先が千切れかかっていた。

「スン？スン？しつかりしてくれ・・・」

私は、無意識に、腰に提げたショートソードを引き抜き、自分の左腕に当てる一気に引き裂いた。流れ出る血をスンの唇に押し当て、無理やり飲ませる。

ゴクリ。とスンの喉が動いたのを確認して安心すると、私はショートソードを投げ捨て、自分のシャツを引き裂いてスンの腕に巻き、千切れかけている腕を固定した。

ドスツドスツ！、ドスツドスツ！

スンを抱える私の後ろから、何か大きな物が近づいてくるのがわかつた。

「シユンー・スンを連れて逃げろッ！」

何処かで、聞いたことのあるような声が聞こえたが、私は逃げなかつた。

頭の中に云いようのない、ドロドロとした怒りがあつた。
どいつがやつた？誰がスンを傷つけた？

「おまえかああああー！？」

左手を無造作に振った瞬間。“パンッ”と音がして近づいていた何の頭が消し飛んだ。

首から上を失つた魔獸が血しづきを上げ、地響きを立てて倒れ伏す。私はそのまま返り血からスンを守るよろひのコートを広げ、スンを包み込むようにして両手で抱き上げた。

しじややややややー！

前に深奥の迷宮で見たのと同じ魔獸だ。ここには打撃や斬撃は通用しない。だが・・・

「おまえかあああー！？」

『ゴスツツツツツツー！』

私に齧り付こうとする二つの頭を、構わず下から蹴り上げた。

前足が宙に浮き、そして、そのまま落ちてきた所を足で思いつき踏みつけると、そいつの頭は“パクンッ”と音を立ててザクロのよ

うに割れ、血を飛び散らせて動かなくなつた。

美しい公園の石畳に放射線状のヒビが走り、地面が僅かに陥没した
が、まあ、いいさ。

でも・・・まだ、足りない・・・

その時、私の前に黒く巨大で禍々しい殺意を持った“何か”が現れ
た。

体長は5～6メートル、最初に殺つた魔獸よりは小さいが、遙かに
強大な魔力を持つた四足の“何か”・・・

「あれは・・・まさか、モラニースのブラックサー・ベル・・・凶王！」

23 無双を描くと、文字数が減るなあ
(後書き)

おお、無双を描くと、文字数が減るなあ

24 おとなしい人が怒ると怖いよつです。

その魔獸は虎に似ていた。

ただ、全身が闇のように黒く、たてがみのよう首のまわりを覆うのは、どれも鋭い刃で、これに触れたものを細切れにするのだろう。その半面、漆黒の胴体はそれだけで、名剣の斬撃をも弾き返し、その下の鋼鉄の筋肉から生まれるパワーは他の大魔獸を凌駕するのだろう。

太い四肢にある20センチ程も突き出た爪は、騎士の持つ盾をあつさり引き裂く力を持ち、その牙にかかるば、城門の扉さえ噛み碎かれるのだろう。

それがどうした・・・

私にはどうでも良い事だ。私の遣るべきことは・・・遣りたいことは決まっている。

スンを傷つけたものを・・・すり潰す！！！

実際、スンを傷つけたのが凶王であるかどうかは分からぬが、それもどうでもいい事だった。此処にいる全部の魔獸を殺せば済む話しだから・・・

凶王と呼ばれたそれが、獲物と認識した私に向かつて一瞬で襲いかつた時、私もまた、凶王に襲いかつっていた。

「私は、あなたの獲物じやありません。あなたが！私の獲物なんですよーー！」

ブオオオオオン！

そして、私はいつの間にか凶王の側面に立ち、その横腹を蹴り上げていた。ガスッ！という音と共に、凶王が真横にズレた。だが、四肢の爪で地面を掴み、踏み止まつて見せ、そして、私に向かつて、大きく開けた口から炎を吹き付けてきた。頑丈な体だ。

それはかつて、アリスさんが見せた炎の中級魔法に匹敵する火力を見せた。

「 ブオオオオオン！」

「 何処を向いてるんです？ 私はこっちですよ」

私は、また、同じように凶王の側面に移動し、横腹を蹴りつける。何度も、何度も・・・何度も、何度も・・・

今私が使っている魔法は、転移魔術ではない。実際、スンやアリスさんに教えられた魔術の使用方法など、何一つ踏襲していないのだから。

無論、身体強化魔術のアクセルでもない。そんなものを使つたら抱きかかえたスンに負担がかかつてしまう。

私はただ、あそこに行きたい、次はここ、とそう思つてゐるだけ。まるで、息をするように、呼吸するように、自然に転移を繰り返している。

「 どうか・・・これは、転移といよりは、いつそ、テレポート？・・・なら・・・

少し冷静になつてきた私は、昔読んだ小説の主人公が使つていた戦い方を真似てみるとした。凶王は、頑健な体で私の蹴りに堪えている、といより、まるで痛みを感じていなかのようにふるまつてゐる。

正直、面倒くさくなってきた。だから、わざと片付けよう、まだ、沢山いるのだから。

「ボォンンンンン！パシッ！ボォンンンンン！」

次の瞬間、私は凶王の後方に立っていた。

それまでと違う動きに凶王は、咄嗟に振り向こうとして地面に倒れた。

「あ、でけた。これは・・・何というか・・・チートってやつですか」

「グギヤアアアアア、ゴギヤアアアアアア！」

振り返ると凶王は、地面をのたうち回っていた。

それは痛いだろう。さっきまで大地をしつかりと掘んでいた、強靭な前足が一本。無くなっているのだから。

私のしたことは、ごく簡単。一瞬で凶王の前に転移して凶王の前足に蹴りを入れ、それと同時に、その触れた部分と一緒に転移したのだ。

私の足元に、凶王の左前脚が転がっていた。

「ちょっと五月蠅いですよ？もつ結構ですから・・・死んでください」

「ビクッ！」

凶王の目に、初めて怯えが走った。

もつとも、その目は、既に切断され地面に転がった首にあって、光を失っていたが・・・

「・・・シユン・・・シユン?」

小さな声が直ぐ近くで私を呼んだ。

「だめ・・・よ・・・シユンは、そんな・・・田をしては・・・だ
め・・・なの」

私の腕の中で、スンが薄く眼を開けていた。
慌ててスンを下すと、スンは動かない筈の右手を挙げて私の頬に当
てた。

「スン! もう大丈夫だよ、今、みんなの所に・・・」

「あな・・・たの・・・目が・・・好き。・・・優しい・・・暖か
い・・・」

「シユン! スンは無事か!? クソッタレがああ!! !」

「シユン! スンをこっちに! 直ぐに治療術を・・・」

私のそばに風の旅団のみんなが集まっていた。グスタフさんはその
大盾でスンを隠し、アリスさんはその陰でスンに治療術を施した。
私が大魔獣を三体片付けたことで、戦力的に余裕が出来たのだろう。
公園の各所で冒険者たちが攻勢に出ていた。

「かかつてこいやあああ!」

チャックさんも健在らしい。

見れば、厳しい表情のグスタフさんが、一度に三本の矢をつがえて
上空に向けて打ち放つていた。

「野郎ども、押し返せ! 転移魔法陣を確保するんだあ!」

ダークさんのどなり声が公園中に響き渡る。

そして、第3転移魔法陣が輝き、その中から盾を全方位に巡らせ、槍を立てた30名程の騎士たちが現れると、冒険者たちの勢いは更に加速した。転移魔法陣が魔獣に占拠されているのを承知の上で、決死の覚悟で転移してきたことが窺える陣容だった。

「我々は、王国騎士団である。魔獣はどうだー！」

セニエ侯爵領を襲つた“一重狂騒”が、終息を始めた瞬間だった。

25 懐かしいお家に帰るよつです。

あの日から三日が経つた。

セニエ領を襲つた“二重狂騒”は、国軍の出動で急速に終息して行つた。

クブスリーから出発した援軍のうち半数が帰らぬ人となつたが、生き残つた冒険者たちはその後、セニエの残存兵力、国軍の騎士団と協力して、次々に転移魔法陣を奪還し、援軍を呼びいれることに成功した。

セニエの全開放魔法陣は、もともと城塞都市の各所に五つ用意されていた。

この魔法陣は何処からでも相応の魔力さえあれば、予め指定された都市や町の魔法陣からなら、中継地を無視して転移を受け入れることができるようにしてあつた。

クブスリーもその一つで、総勢73名が援軍に向かつたのだ。

風の旅団が第3魔法陣に転移した時、先に転移していた部隊が既に戦闘に突入していたそうだ。しかし、三体の大魔獣に加え、中級魔獣や多数の低級魔獣に襲われ、防御力の弱い者から次々に倒された。このことは、城塞が持ち堪えていることを前提に、先に軽装の冒険者を大量に転移させたことが裏目に出たと云つていいだろう。

セニエの魔法陣が魔獣に占拠されたことをもつと早く知らせてくれていたら。

とは、誰もが思うことだが、重症を負いながら知らせに来た騎士たちを責めることは、誰にもできなかつた。

彼らは、救援を中止するよう、唯それだけのために魔獣に占拠されていた第2魔法陣に突撃し、多くの戦友を失つていた。

実際、彼らの小隊は、突入時、15人だつたそつだ。

最終的に、セニエに駆け付けた援軍は国軍、冒險者を含め2000名に達し、多くの犠牲者を出しながら城塞内に侵入した魔獸達を駆逐して城門を奪還。城塞内部の掃討戦を行いながら、城門外にも進出、殆ど全ての魔獸の討伐に成功した。

この中で風の旅団は、スンを欠いた状態であるにも拘らず、獅子奮迅の戦いを見せ、王国騎士団をして瞠目させた。

「鉄壁」ことダークさんは、またしても巨獸の突進を微動だにせず受け止め、その斧でイノシシに似たその魔獸を一撃で仕留めて見せた。

「鷹の里」ことグスタフさんは、空を舞うワイヤーバーンの群れを瞬く間に打ち落とし、落下してきた所を、チャックさんが突き、アリスさんが燃やし尽くした。

その間、私は、素人よろしく、スンを抱いたまま、あっしへウロウロ、じつちへウロウロとみんなの後を付いて回った。

無双？なにそれ、何語？英語かなにか？

でも、そんな素人丸出しの私に、セニエの騎士団や、国軍の騎士団は兎も角、クブスリーからの救援部隊は、何故か護衛を3人も付けてくれた。

私のせいで、戦力が落ちてしまつにも拘わらずだ。
申し訳ない気持ちでいっぱいになつた。

僅かな休息の際、国軍の騎士に「素人が病人つれて、こんな所で何をしている。じゃまだ！」と怒鳴られたときには、私が謝る前に、生き残つたクブスリーの冒險者たちが、その騎士を睨みつけて「もっぺん云つて見ろ？凶王の腹ん中に突つ込むぞ？こら……」と、

怒鳴り返して大騒ぎになるところだつた。

うれしかつたけど、正直、云い返した冒険者の方が怖かつた。

その騒ぎは、私が“恋人なんです。すみません”と頭を下げたことで事なきを得た。

新たに云つておこう。私は事なけれ主義だ！

そして、多くの犠牲を出しながら討伐終結宣言がセニエ侯爵よりだされ、それぞれの町に撤収が始まった。

一般市民の死者行方不明者は総勢5000人を数え、勝利したとはいえ、決して喜べる勝利ではなかつたが、生き残つたものには、死者の分まで生きる義務があると思うし、喜ぶべき時は喜ぶべきなのだと、私は思う。

スンは、あの日から丸一日眠り続けたが、情勢が好転した二日目に目を覚ました。

城塞都市内部であるにも関わらず、当時は、安全な場所など何処にもなく、体力を失つていたスンは、ずっと私の腕の中にいた。

スンの腕は、目を覚ました後、包帯に取り換えるとしたときは、完全に再生していたが、これが、私の血を飲んだせいなのか、それともアリスさんの治療術のおかげなのかは、分からぬままだつたので、アリスさんに尋ねたところ“あなたバカなの？死ぬの？”と、分けも分からず罵倒された。

「風の旅団、鉄壁のダーク以下6名。第3転移魔法陣からクブスリ

一へ！」

「転移開始！」

クブスリーでゆっくりできる。そう思っていた私は甘かつた。

思えばかなりの無茶をした。

私が、無詠唱で転移魔法陣を起動させ、あまつせえ、セーヒでは、一瞬のうちに三体の大魔獣を倒し、しかも、そのうちの一體が所謂“名前持ち”的『凶王』だったことから、冒険者の間では“黒髪の魔術師”として噂になっていた。

家に帰つたら髪を染めようと思う。

しかし、「んまあ・・・」じ覽になりました奥さん！村上さん宅の俊君。随分長いことお家にいらっしゃるけど、今度、髪を茶髪になさつて、どうされたのかしら・・・？」といづ、「近所の奥様方の噂の種になりそうで怖い。

更に、緊急事態だつたとはいえ、戦いの前、スンは自分がBクラスのスンスール・オーデランだとギルドで名乗つていたので、若返つたことがバレていたし、その原因が、恐らく私だらうという噂も立つていた。

幸い、スンは私の部屋で休ませていたから、直接、何らかの接触を図る輩はいなかつたが、私の方は、グスタフさんやチャックさんの護衛が無ければ表に出られなくなつていた。

まあ、スンの世話で殆ど外に出る必要もなかつたが・・・

帰つて来てから一日、怪我をしてから五日程で、スンはほほ全快したが、私はベッドから出ることを許さなかつた。
なぜかつて？

決まつている！全快したなり・・・」じじからが真の“お医者さん”
つこ”の時間だああ！

まあ・・・異世界の診察と称して全身検査とか、リハビリと称して全身マッサージとか、最後はお風呂に入れたりとか・・・いろいろ・

・・した。

そして・・・・・

私は、今、馬車の中にいる。

風の旅団は莫大な報償を受け取り、ダークさんとグスタフさんは各国の騎士団から誘いが来ているそうだが、私を「深奥の迷宮」に連れていくという最後の依頼を果たしてくれている。

スンは、どうしても私に付いてくると言い張り、私の隣で、幸せそうに眠っている。

ああ・・・近所になんて、説明しよつ・・

25 懐かしいお家に帰るよつです。（後書き）

あとがき？

つたない文章、稚拙なストーリーに限りお付き合ください、誠にありがとうございました。

ここまでが、書き始めた時の「ゴール」です。

感想やレビューをカットしたのは、御想像のとおり、私がチキンだからです。

でも、沢山の評価を頂き、最後まで書いてほんとに良かったと思います。

それから、シュンの無双時に使った戦闘方法は、菊池秀行さんの小説からヒントを頂きました。ごめんなさい。

結局、小説の難しさを痛感するとともに、他の投稿者のみなさんの凄さを改めて実感しました。

実は、この作品に盛り込もうと考えていたアイデアが幾つも宙に浮いています。でも、早く無双が書きたくて仕方なく全部カットしました。

それから、管理者様の指摘により作品中のH・チチシーンを一部削除しましたが、本作品のストーリーとはあまり関係ないとこうなので、そのまま読みます。すみませんでした。

さて、この後ですが、どうしようか・・・（11／21）

26 新生活は大変ですか？（前書き）

ええっと、解析データを見たらいことに・・・
読んでくれている多くの方に感謝です。

異世界から戻つてからはとにかく大変だった。

スンが暫くの間、こちらにいることになつたから、まず、気になつていた下着を揃えることから始まって、次に洋服、靴と、その他もろもろが必要になった。

更に、こちらの社会常識をある程度教えておかなければ、危険すぎて私が一緒でもスンを表に出すことが躊躇われた。

勘違いしないでほしい。

スンの身が危険なのではなく、スンにちよつかいを出す者の身が危険なのだ。

此方の世界には魔素が存在しないが、体内魔素はそのままなのでスンの身体強化魔術は健在。ナンパ目的で下手に近づけば、ヘビー級ボクサーだろうが、プロレスラーだろうが瞬殺できてしまうのだ。まあ、それ以前に、私は此方の世界がパラダイスだとも思えないから、スンを失望させたくなかつたのかも知れない。

と云つ分けで、私としては、スンを此方で生活させることに消極的だつたが、向こうでの噂が、ある程度終息するまでは、むしろ、いない方が良いだろうというのが、「風の旅団」の総合的意見だったので従うこととしたのだ。

人の噂も75日というが、つまり、一月程経つた今頃は、まさに最盛期と云つた所だろうから、私も異世界には近づいていない。

スンはといえば、ある程度、こちらに慣れてきて一人でコンビニに買い物に行けるようになつっていた。スンにとっては、24時間営業で見たこともない品々の並ぶコンビニは驚異の存在だつたようだ。そして最近のスンのお気に入りは、そこで売られている洋菓子の数

々と、何故か下着と靴下のようで、異常な関心を示している。

昨日も大量のシュークリームを大人買いして帰つて来た。

さて、私の方は・・・

ご近所対策として、正月は、親戚の娘を預かるために、外国に旅行に出かけていたことにした。親戚の娘とは勿論、スンのことだが、出身は中東の某国ということにした。

あの辺りは、面白い事に、見た目が日本人そつくりな人の國もあり、一方で金髪碧眼の人々が暮らしていたりと、人種的には誤魔化しやすいし、言葉も聞いたことがないようなものが多いから、最適だつた。

そうして、どうにかこうにかスンのいる生活に慣れ、私の新生活も落ち着きを取り戻し始めたある日のこと、スンの何気な無い一言から、私は男として一大決心を迫られることになった。

「シユン。月のモノが来ないのだが・・・」

ビクウウウウウウツ！

そ、その言葉は、お付き合いしている男女の間では、云つて良い場合と、云つてはいけない場合がある・・・と、思う。

スンと私は、私が云うのも何だが、ラブ・ラブだ。

私を試すためにそんなことを云つとは思えないから、单なる事実だらう。

男子諸君！このような場合、決して「うそ！降ろせよ！」などと口が裂けても云つてはならない。相手が、スンでなくとも、地獄をみること請け合ひだ。なので・・・

「あ、そうなの？じゃあ、ちょっと、妊娠検査薬買ってくりゅ」

・・・かみまみた。

まあ、動搖するなと云つ方が無理なので許してほしい。いろんな意味で。

そして、私は盗んでいない自宅のバイクで再び走りだし、ドラッグストアへGO！した分けだが。結論から云えば「陰性」で、妊娠ではなかつた。

思えば、殆ど常に「男の責任」コンちゃんを使用していた分けだから、可能性は低かった分けだが、紳士淑女のみなさん？あれも決して100%とは云えないことを肝に銘じておいてほしい・・・と、大人な私は声を大にしてみる！

決して、自分が死ぬほどビビッたからではぬあい！

しかし、実際のところ定期的に来るはずの物が来ないとうのは、スンの体に異常があるかもしないわけで、しかも、その原因について思い当たる節があり過ぎて困つてしまつた。
といひで・・・我が国にはこんな言葉がある。

『困つた時の神頼み』

良い言葉だあ・・・と云つ」と、実際に神様に知り合ひがいて、しかも、電話で話せる私はスンの隙を見て、早速、お伺いを立ててみた。

その結果、やつぱり、スンが若返つたことに原因がある」とが分かつた。

「やうじやのお・・・お主と、その娘の子が出来るとしても、恐らく200年から300年後くらいじゃなあ。そもそも、お主が繁殖期を迎えておらぬで」

「は、繁殖期・・・ですか？」

「そ、うじや。神竜の基になつた個体は、概ねその位の周期で繁殖期を迎えるでな。じゃが、それでは、伴侶がそこまで生きておるか分かるまい? じやから、神竜の加護を与えたおなごは、その神竜に合わせて繁殖期を迎えるわけじやな」

神様のお話しによれば、スンの体は、いつか来る私の繁殖期に備えて、体機能の一部が一時停止した状態にあるらしい。

しかしだ。世の中、絶対はないので神竜がその気を無くすと、その時点から相手はその種族本来の寿命を取り戻し、そこからはゆっくり歳を取るのだそうだ。

勿論、神竜の相手がその気を無くした場合も同様の安心設計。結局、スンと私にその氣がある限り、スンは不死ではないが不老だということのようだ。

ちなみに、一度でも私と交わった女性は、間違いなく若返りを起こそが、それだけではなく、若返った状態から徐々に歳をとり、やがては死ぬ。

まあ、それでも数十年程度の寿命の延長と、一時的な若返りは得られるわけだが。

そして、スンの方は、妊娠ではないことに若干、残念そうな顔をしたもの、その夜から、私がコンちゃんを使用しなくなつたので、満足しているみたいだった。

女性の心理は微妙なもので、スンはコンちゃんの使用=私が子供を欲しがつていない、と思つていたらしい。いつか、ちゃんと本当のことを話してあげたいと思つ。

「スン、お風呂湧いたよ~

「うむ。すまない」

相変わらず「男前さん」のスンが、その言葉通りに、その場でパパと服を脱ぐと、そこからはグレーの小さな布地に包まれた見事な体が飛び出してくる。私は女性の下着に異常に興奮する性癖は持ち合わせていないが、下着姿には普通に興奮する。

そしてスンは、その事に気が付いていて、下着の研究に余念がない。スンの胸はF確定。それが固すぎず、柔らかすぎず絶妙のバランスを取っているのだが、ブラジャーを購入する前は、歩くたびにタコンタコンと・・・それはそれでOKなのだが、表はとてもではないが歩けない。

「あなた達ーなんて格好してるのよー。」

26 新生活は大変ですか？（後書き）

た、たまに、自主規制が入るとおもいますが、そこは”てけとう”に妄想してください。

27 お風呂に入りますか？

ああ、前にも似たようなことがあったなあ・・・と、遠い目をしてしまつた私。

私の右手は仁王立ちしたスンの豊満な胸に向かつて伸びており、もうちょっととの所で止まつていた。ああ、この遭り場のない怒りを、劣情を・・・何処に・・・

私の部屋の例の押し入れの前に、アリスさんがいつかのように顔を赤くして立つていた。

これは、真剣に転移魔法陣にチャイムを付ける方法を、考えなればならないかもしね。セ コムじや無理だらうしなあ・・・いや！もしかしたら・・・

あれ？自宅警備員の私が居るのに、セ コムはないわああ！

「いい加減に、その厭らしい手を降ろしなさい！」

現実から別の精神世界に逃避することで固まつていた私は、スンの豊満な胸に向かつた手を下すことも無く、その寸前で空中を一ギギしていた。

すぐ、嫌だつたが、結構な精神力を消費して手を降ろすことに成功した私は、何食わぬ笑顔でアリスさんに挨拶することにした。

「やあ、アリスさんじやありませんか。」と無沙汰しています。その後、如何ですか？」

「なあああに、無かつたことじよつとしてゐるよ・・・まあ良いわ」

大人はね？都合の悪いことは、無かつたことにするの！

アリスさんは、スンの下着姿に多少の興味を引かれたようだが、直ぐに、これまた何時かのようにズカズカと私の部屋に入り込み、ちよつと考えてから机の前の椅子に座った。

ベッドは嫌だつたらしい。ちゃんと毎日シーツは洗濯しますよ？

「あなた達ときたら・・・いつもそんな格好で、そんなことばかりしてるんぢやないでしょうね？」

「うむ。大体、こんな感じだ」

スンさん？そこはこう、もう少しオブラーートに包むと云うか・・・まあ、見た目16歳のスンが、下着姿で男前な態度を取ると、異常に萌えますが、現状では、どんなに萌えても手が出せない分けて・・・いかん、いかん、いかんよお！

なんだか、テンパつてしまつて、表面上は兎も角、内面の立て直しに時間がかかりそうだ。

アリスさんが怖い顔で見てるし、ijiはひとつ・・・

「あ、アリスさん、お疲れでしょうから、スンと一緒にお風呂でもどうです？」

まあ、なんだ・・・あれだな。私はテンバルと、異世界の女性にお風呂をお勧めする、という奇妙な性癖があることが判明したわけだな・・・あれ？なんか目から汁が・・・ところが、勧められたアリスさんはといふと、何故かスンをチラ見してから、すんなりとお風呂に入ることに同意した。
私ですか？・・・覗かないよ？

そして、二人がお風呂に入つている時間を利用して、私は台所で夕食の準備を始めた。

材料は、ベーコン、玉葱、ピーマン、マッシュルーム、などなどの

野菜を適當な大きさに刻み、麺をゆでる。今日は、スペゲッティのナポリタン。

ちなみに、イタリア人に云わせると“これはスペゲッティじゃない！”のだそうだが、私は美味ければ良し、とする性格なので悪しからず。

お風呂場で一人が出てきた氣配があつたので、さつそく最後の仕上げに入り、皿に盛り付けていく・・・いくつて、何処へ？何故か、それからが時間がかかった二人。漸く台所に現れたが、なぜかアリスさんの顔がほんのりと赤い。長風呂で湯当たりでもしたのかと思ったが、そうではなかつた。

アリスさんは、私がスンのために購入した冬用パジャマを着ていたのだ。

スンは何時かの夏用パジャマだが、アリスさんにはスンのパジャマが大き過ぎたらしく、裾と袖を折り曲げて着ていた。
GJー！スン。まさに、眼福である！！！

私は、そんな心の暗黒面をおぐびにも出さず、につこり笑つて“似合いますよ”とだけ云つたが、アリスさんは更に赤くなつて、モジモジしていた。

「お、お、お風呂は、き、氣に入つたわ！良い匂いがするし、石鹼もよかつた」

「シユン。実はアリスには私の下着を付けて貰つたのだ

「スン！」

アリスさんは耳まで真つ赤になつて、下を向いてしまつた。

スンの話では、アリスさんは、スンの身に着けていた下着が気になり、風呂の中でスンを質問攻めにしたらしいのだが、結局、付け

てみなければ良さは分からぬこと、脱衣所でスンの下着を借りて穿いているのだそうだ。

流石に、サイズが違すぎる、下だけだが・・・

「シウン。すまないが、明日、アリスを連れて下着を買いに行きたいのだ」

「いいいよおおー！」

即答およびサムズアップ！

以前にも云つてあるが、私は口よりも好きだが「愛する」の専門。実際、14歳の女の子が初めての下着を買いに行くのに、協力しない男が居るだろ？ いや！ 居はしまい！（反語？）何というか、初々しくて、何だか一気に“お父さん気分”だ。

お赤飯でも炊くか？ ん？

まあ、もつとも現実的にはこの位の子が、お父さんに下着を買いに行くのを手伝つて貰つたりはしないけどね。

アリスさんは食事にも満足してくれたようで、私の作ったスペゲッティを残らず平らげてくれた。

食事中は、スンが積極的に此方の世界の事について話していたが、やはり、私がいるとは云つてもやはり、向こうの世界に帰りたいのではないだろうか？

いつもより、テンションが高いような気がした。

夕食後もガールズトークは続き、私は食器を洗い、風呂に入り、客間にエアコンを入れ、加湿器を増設し、布団圧縮袋からお客様用の布団一式を引きずり出して、客間に敷き、寝る体制が完全に整つてもまだ、楽しげな笑い声が続いていた。

私は、二人が風邪を引かないよう、話しあは布団に入つてからするよに伝えると、二人はうれしそうに一つの布団に潜り込んだ。

アリスさんもスンも畳の部屋で寝るのは初めてだった筈だが、意外と気に入ってくれたようだつた。

まあ、あんなに何を話しているのか解らないが、スンが嬉しそうなので、私としては問題ないし、ガールズトークに参加する気概は、おじさんにはない。

私は、突然の来客と、明日の買い物のことについてぱいについてぱいだったので、漸く訪れたゆとりの時間にホツとしていた。
若い子のパワーには叶わないなあ、ははは！などと苦笑しながら、自分のベッドに潜り込み、電気を消して、さあ、寝ようとした時に思い出した。

「あれ？そもそも、アリスさん、何しに来たんだっけ？」

28 わるそろ本題に行きませんか？

翌日は予定通り買い物に行き、アリスさんと何故かスンの下着も含めて、かなりの買い物をした。私の僅かな蓄えも、そろそろ危険水域に突入しそうな気配だが、一人の笑顔を見ていると何も言えなかつた。

電車や車などに対するオーソドックスな驚きは、スンで経験済みだつたが、考えてみれば、アリスさんは此方に行くのは一度目。それでも、街中を歩くことは無かつたから、三歩歩く度に、立ち止まりそうになるので困った。

結果、私がスンとアリスさんの手を引いて歩くことになり、周囲の視線が・・・・

買い物は、今日が平日ということもあり、午前中にデパートに向かい、午後には我が家に戻つて來た。出来るだけ、人との接触を避けたかったので。

正直、もう一度と行きたくない。買い物は多少時間が掛つてもネット通販にしようと心に決めた。そして、一人の会話が私以外の人には聞いたことのない外国語に聞こえたことに神様に深く感謝しようと思う。

今日、アリスさんに声を掛けて布教活動に勤しんでいた外国の方！？
？ そうあなたです。

「ちょっとまたあ！」と絶叫した私を、キヨトンとした顔で見るのは止めてください。

あなたの行動は、アリスさんには、魔導書を手にした魔術師の攻撃に見えていましたからね。あなた、今、普通に死にかけましたよ？
私が傍にいたことを、あなたの神に感謝してください。

「とても面白かつたわ」

「そうですか・・・」

我が家に戻ったアリスさんの感想は、短かつたが感動に満ちていた。我が家に戻った私の感想は、短かつたが疲労に満ちていた。

だが！ひとしきり、買い物の成果を広げ、続いて母の三面鏡のある部屋でファッションショーが行われ、私は、たつた一人の観客として二人の美少女を心行くまで堪能した。

スンに至っては、黒だつたり、白だつたりのレースのスケスケ下着で何度も登場し、アリスさんの手前、目のやり場に困った。正直、16歳の少女が着る下着としては、けしからん！と思つものばかりなのだが、スンは所謂、合法口りなので、良しとしよう。（ホントに良いのか？）

騒ぎも一段落して、私がコーヒーを入れ、いつもの部屋に戻ってきたから、漸く、私はアリスさんの今回の来訪について尋ねることにした。

「ロイド・フォン・セニエ侯爵って、覚えてるかしら？」

個人的な知己ではないが、忘れる筈もない。一月前の“一重狂騒”の際に、セニエを守るために奔走したセニエの領主である。

「そのセニエ侯爵が、あなたに会いたがつてているのよ。そのためには、ダークとグスタフにも接触があつたの」

「なぜ、セニエ侯爵が？シヨウの功績を認めると、却つて報償の増額になるぞ？」

そうなのだ。

あの戦いでは、私は呼ばれもしないのに戦線に飛び込んだ素人なんだ。三体の大魔獣を倒したとはいえ、ギルドを介した契約をしていない、所謂、義勇兵の扱いで、報償はない。

グスタフさんを経由して、内密にロイド侯爵から礼の言葉を貰ったことは確かだが、直接会って話したことは無いし、公にすれば、勇敢な兵士に対して報償を与えるはず、もし、報償を与えないければ侯爵としての彼の名誉にも傷が付く。

「まあ、実際にはセニエ侯爵が、シウンに会いたいのではないのよ。たぶんね」

「どういう意味ですか？」

先の戦いで、セニエ領は甚大な被害を被つた。事前に莫大な費用を掛けて準備していたにも拘らず、セニエ城塞都市内部にまで魔獣に侵入され、多くの人命を失つた。

しかし、事前の準備が無ければ、もっと酷い事になつていただろうと私は思し、戦闘終結後、直ぐに部隊を解散させ、帰郷させたのも、一部の兵士達の不満はあつたが、納得できる措置だった。

戦が終われば、軍隊など、兵士など唯の無駄飯ぐらいになるのだ。そして、予想外の被害を受けたセニエでは、それを負担する余裕はなく、住民の負担を軽くするためにも、軍隊を外に出し、物流を開する必要があった。

人も含め魔獣の遺体処理は、セニエの残存常備兵で十分だと判断したのだろうし、その判断は恐らく正しい。そして、あれだけのことがありながら、冷静にその様な判断を下したセニエ侯爵を、私は評価している。

我が国の無能な政治家や無能なマスコミなら、住民の安全や今後のことより先に、まず自分以外の誰の責任かを追及するだろう。

「それを話すには、まず、あなた達の今の立場を説明する必要があるわね」

セニエの戦いは、“一重狂騒”が始まったとされる日から討伐終結宣言が出されるまで、およそ五日間だった。そして、公式には三日目に國軍が救援に投入された結果、速やかに終息したとされ、國軍の活躍が大きく発表された。

国家の体面と威信を満足させるもので、それ自体に誰も不満はなかった。

冒険者にとっては、国の威信より報酬の方が重要だからだ。

しかし、實際には、シウンの活躍による大魔獸三体の討伐と、「風の旅団」の活躍を契機に第3全開放転移魔法陣が奪還され、その後、他の魔法陣の奪還がクブスリーから派遣された冒険者達による功績であることは、戦いに参加した者達には明白だった。

そして、戦いの終結後、クブスリーに帰還した冒険者たちは報酬を受け取つて、それぞれ各地に散つて行くわけだが、激戦に参加して生き残った者にとっては、一つの武勇伝であり、酒の席などで自慢話に花が咲けば、当然、セニエの戦いの話しも出る。そうなれば、少し声を潜めて彼は云うのだった。

「あの時、あの“黒髪の魔術師”が現れなければ、俺達は全滅していたかもしねない」

彼らにも矜持があるから“かもしねない”とは云うものの、ほぼ確実だったと知つている。

何も知らない聞き手は「そんなにすごい奴だったのか?」と更に尋ねる。

「魔法は使つてたさ。だがなあ、アクセルを使っても、大魔獸を素手で殴り殺したり、蹴り殺したりする魔術師なんか、おりやあ知らねえなあ・・・しかもだ。その中には、あのモラニースの『凶王』も居たんだぜ？」

こうして、噂は噂を呼び、グランバル王国中に広がりを見せるのは時間の問題だった。

そして、やがてそれは国の中核にある者達の耳にも届くことになり、それほどの魔術師が何処から来たのか？何者なのか？何処の国に所属しているのか？といった、理由の違いはともあれ、詮索が始まる。建前としては、国の安全保障の問題だから“内密に”ではあるが・・

「そう云つ分けで、シウン。あなたは今、グランバルでは賞金首も同然なの」

ゲロゲロ・・・

29 地雷ですが踏みますか？

風の旅団のメンバーは皆、私が異世界人であることを知っている。そして、その所為で、奇妙な力を持つていることも、セニエの戦いの以前から知らされている。しかし、その彼らでも、私がセニエで見せた戦闘能力は異常だったらしい。

スンの若返りの一件から、私の体内魔素保有量が異常であることを知っていたアリスさんは、私が使った力を魔術の一種と考えていたので、私は教えられた転移魔術を、短距離で連続して使用し、その応用として、わざと魔獣の一部を転移に巻き込み、魔獣の肉体を引き裂いたのだと説明した。

転移魔術を実際の戦闘に使用したのは、恐らく私が初めてだらうと、アリスさんは呆れていたし、疑つてもいたが、合理的な推論さえ構築できない状態だから納得するしかない。

他のみんなも同様だった。

「で、スンの方はどうなんですか？噂になつてませんか？」

「そうね、今のところシュンとシュンの使つた魔術の方が、インパクトが強すぎて、スンの方は、まだ、何も・・・でも、あなた、裏では似顔絵まで出回つてるわよ」

私についての調査は、可及的速やかに行われているらしい。

といつても、クブスリーのギルドに王都のギルド本部からの調査依頼と、余所者らしき人物が『春の風花亭』に現れたり、といったものらしいのだが・・・

どちらにしても、私が姿を現わさなければ、どうと云うことの無い問題の筈だ。

実際に賞金首になつてている分けではないのだから・・・

「そこで問題なのが、セニエ侯爵なのよ。の方は確かにそこいらの貴族と違つて立派な方だけど、今回ばかりはかなりの痛手だったみたいなの」

アリスさんの説明によると、セニエ侯爵は今回のこととで莫大な借金を背負いこんだらしい。

それは、大貴族であるセニエ侯爵といえども、直ぐに返済できるものではなく、証文を書いて方々に借金を頼んだ。

無論、国王から見舞金などが送られ、また、討伐された多数の魔獣の部位もセニエ侯爵の損害賠償に充てられるのだが、特に魔獣の部位については、数が多くすぎた。

それらを、一度に市場に放出すれば値崩れを起こし、王国の経済にもダメージが及ぶことを知っているのだらう。

切羽詰まっていても、そこまでの経済観念を持つ貴族は珍しいのではないか？

「それでね、セニエ侯爵に多額の資金提供をした某貴族が、もし、その黒髪の魔術師を紹介してくれたら、借金をチャラにしてもいいって云つてるらしいの」

例え、そうであつたとしても、セニエ侯爵のことは氣の毒だとは思うが、正直なところ私には何の義理もない。

貴族などに拘わつたら最後、どこに連れて行かれることか。

私は以前、政治に拘わつたことがあるが、一言で言つて非常に面倒くさい。

この案件を通したければ、あの案件に同意しろ、とか、全く異なる案件が取引材料に使われ、その一方で、利権は少ないが重要な案件は、店晒しされて忘れられていくのだ。

そして、その殆どは、一部の有権者の票集めの為で、同じ口で政治改革を叫ぶのだから呆れるほかない。

「あら？ ショウウって政治が嫌いなのね。ちょっと安心したわ」

「政治が嫌いなのではなくて、『政治屋』が嫌いなんですよ。どうせ、その某貴族とやらも政治的に強いポストにでも着いているんじゃないですか？」

「正解・・・クロード・フォン・ハウ、伯爵にして王国宰相」

ところで、私は自分のことを、石橋を叩いて“壊しかねない”性格だと思つてゐる。

お陰で、かつての上司からはお褒めの言葉を幾度となく頂戴したが、それでも世の中にはそこかしこに『地雷』が置かれている。知らずに踏めば、いや、知つていながら踏まざるを得ない『地雷』もあり、どうやら私の場合は知らずにそれを踏んでいたらしい。

しかし、解せないのは、宰相閣下なら独自に私を探し出す方法など、幾らでもりそうなものなのに、なぜ、セニエ侯爵にそのような話を持ち込んだか？ である。

侯爵より一つ下の爵位ではあるが、宰相の地位があれば、王国の殆どの機関を自由に使える筈である。わざわざ、貸しを作った相手に、借りを返す機会まで用意するのはおかしい。

政治的には、もっと、有効な時に使用するものの筈だ。

それに、セニエ侯爵と私の繋がりなど、あって無いようなもので、そんな不確かな関係を見込んで莫大な借金をチヤラにする条件にするとは、実におかしな・・・いや、怪しことさえ思つのだ。

「此処からは私が話そう。シモン、実はセニエ侯爵と『風の旅団』は旧知の仲なのだ。具体的には、セニエ侯爵自身が『風の旅団』の

創立メンバーだ

10年ほど前、既にBランクであつたダークさんとグスタフさんの下に、ロイと名乗る青年がやって來た。

ロイは、冒険者を目指して単独で迷宮に潜り、そこそこの成果を上げていたが、単独では限界があることを知り、優秀な仲間を求めていた。幸いなことに、ロイには魔術師の才能があり、その時すでにCランクだった。

前衛にダークさん、中距離にロイ、長距離にグスタフさん、あまりバランスが良いとは云えないものの、必要な技能を持つ冒険者を臨時に仲間にすることで、一応「風の旅団」が結成された。

それから数年後、前衛としてスンが加わり、ほぼ現在の陣容が完成了。バランスも悪くない。

しかし、スンが加入してから直ぐに、ロイが脱退することになった。その頃には、ロイが貴族の跡取り息子だということを、ダークさんやグスタフさんも知っていたし、先代セニエ侯爵が急逝したことでもやむを得なかつたらしい。

暫くは、魔術師が居ないことで活動に支障が出たが、すぐにアリスさんが加わり、チャックさんが押し掛けて活動が再開された。

この頃には、ダークさんとグスタフさんには二つ名が付いていて、「風の旅団」の名前は一畠置かれる存在になっていた。

「ああ、つまり、宰相閣下は、セニエ侯爵の過去を知つていて、一方で、風の旅団が黒髪の魔術師と関係があることが分かつたから、セニエ侯爵に仲介を頼んだと？」

「そういうこと・・・のようだ」

「仕方ないわよ。シュンは、行きは兎も角、帰りは「風の旅団」と

帰つて来たから

そうだった。

怪我をして本調子でなかつたスンを、私がずっと“お姫様だっこ”していったため「風の旅団」がセニエからクブスリーに帰還する際は、一緒に転移したのだった。

私の軽率な行動が今回の問題を招いたのだ。

まあ、誰が何と言おうと、あの時、他の誰かにスンを任せたつもりはなかつたが。

それにも・・

石橋が叩いて壊せない程頑丈でも、その橋が崖っぷちに向かつて一方通行だった場合は、どうにもならないのだなあと、今更、思った。

30 思い込みが激しくないですか？

「他にも、シュンには話しておかなければならないことがあるのよ」

買い物から帰った夜、食後のコーヒーを飲みながら、アリスさんは少し、云い辛そうに話し始めた。

「シュンは、私の事どう思つ?」

「・・・はい?・・・質問の意図が解りかねますが?」

「私のことを、人族だと思つてない?」

「違うんですか?」

「違うのよ

「へえ・・・」

会話が終わってしまった。

アリスさんは不満そうにしていたが、スンはアリスさんの隣で真剣な表情で云つた。

「アリス、前にも云つたと思うが、シュンは私達の世界の種族について、特殊な考え方を持っているらしい。もう少しあつきり云わないと伝わらないぞ?」

私は実は驚いては居たのだが、アリスさんは見た目は完全に人族である。そうでなければ街中に買い物には出かけられない。

モフモフのねこ耳受付嬢は、連れていく場所によつてはギリギリセーフっぽいけど、私のご近所における世間体的には、明らかにアウトである。

それに比べれば、アリスさんは、連れていく場所によつてはギリギ

リアウトっぽいナビ、私の近所における世間体的には、“たまに”アウトである。

ただし、スンが居る時点で、もう、なんかね・・・

「…………じゃあ、はつきり云うわね！…………私は魔人族なの…………」

「へえ」

「それから、これまで一風魔王の如てお姫様なのよ」

「……で、歳は114歳なの」

いわく一廻
お絵アシナハト

まあ、ファンタジーの世界でよくある長命種というやつらしい。アリスさんの種族はその中でも王族に位置し、魔力の保有量が同族の中でも一番多く、人族や獣人族を遙かに凌駕している。

かつては、吸血族であることから、他種族との戦に発展しそうになつたこともあるが、何故か、実際には吸血族は殆ど吸血を必要とせず、ごく稀に、特別な場合にのみ、その行為に及ぶのだそうだが、必ず相手の了承を得るらしい。

ちなみに、吸血によつて着族を増やすとか、太陽光やーンーク、十字架に弱いとか、そんなことは全く無いそうだ。それどころか、普通に人族と婚姻関係を結んで普通に生活し、子供をもつて、幸せに生きている者も多いとか。

ただし、生まれてくる子供は、完全な人族が完全な魔人族に別れる
兎に角、私の知る吸血鬼とは随分違うようだ・・・

「よかつたわ。人族には多くは無いけど、他種族を憎悪する人もい

るから」

「ふうん……」

「此方の世界には私の同族は居ないみたいだし、シュンが差別主義者だったらどうしようかと思つていたのに、なんだか拍子抜けだわ。・・・」

「云つただろ。シュンはそんな人間じゃないって」

「まあ、あれだよ。何族だろうと、良い奴もいれば、悪い奴もいるだろうし、種族の違いで丸」と判断するのはどうかと思う分けで。アリスさんに至つては間違いなく良い奴なわけで・・・」

「フン！たかが魔人族でした～程度で・・・元厨一病患者の力をなめるなよ！」

と云う分けで、一通りのカミングアウトが終わり、一人は安心して、またしても一人でお風呂に向かったのだが、何だろ？この“娘が大人になって、一緒にお風呂に入ってくれなくなつた”的な、微妙な寂しさは・・・そして私は、今日も独り寝することになった。

ん？私がスンとエッチすることばかり考えているとでも？

基本的に、そのとおりですが、何か？

その夜、私は、セニエに出向いた場合の緊急退避計画を練つていた。今の私なら、一人で、若しくはスンを連れて逃げるくらいは造作もないが、宰相が絡んでくるとなると話は別だ。

どんな能力があるうと、國家を相手に事を構えるのは得策ではない。一度、そういう関係になつてしまえば、私に関する情報は何処までも拡散する恐れがある。

なんとか、正体と能力を隠したうえで、一定の距離を確保したい・・・

そもそも、クロード・フォン・コラン伯爵という宰相は、一体どんな人物なのか？

そして、なぜ、何の目的で、私を探しているのか？

この一つが解れば話し合いの余地があるが、これらが不明なまま話し合いで応じれば、どんな要求をされるか解ったのもではない。

最悪、その場で“グランバル王国に仕えよ。嫌なら「風の旅団」のメンバーを・・・”なんてことになりかねない。

実際、向こうは私と「風の旅団」の関係を知り、更に、私とコンタクトが取れ、それでいて引っ張り出すことが出来そうな、恐らく唯一の糸を的確に辿っている。

決して舐めてかかつて良い相手ではない。

当然、スンとの関係についても調べ上げているだろう。

こちらはノーガードで、あちらは背中にナイフを隠し持つている。こんなフルボッコ確定の交渉などするつもりは無いし、そうなったときは最早、交渉ですらないだろう。

でもなあ・・・

そんなことを考えながら、布団に潜り込んだ私だった。

少しだけウトウトし始めた頃、誰かが部屋に入ってくる気配があり、そして、衣擦れの音がしたかと思うと、誰かが、私のベッドに潜り込んできた。

「シユン。わたしの親友を受け入れてくれてありがとう。うれしかった・・・」

「そんなの当たり前だろ？ アリスさんはスンの大変な仲間で、スンとのことではお世話になったこともある。今更、種族が違うくらいで・・・」

「そう？・・・じゃあ、もう一つだけ、お願い。別の意味でも、アリスを受け入れてほしいの。これは、わたしの願いであり、アリス自身の願いもある」

「？」

気が付くと、私のベッドの脇に、スンより小さな影が立っていた。

「シュン。あなたがスンを救つた時の恐ろしいまでの姿を見て、私は決めたの。私、アリス・ヘリクセン・バウ・グループは、あなたの伴侶の一人になると……」

アリスさんは、そう云つて膨らみかけた小さな胸を隠していた両手を降ろし、私のベッドに滑り込んできたのだつた。

3.1 出発しますか？

アリスがベッドに滑り込むと、

・・・・・自主規制・・・・・

「ショウ。アリスはね、今日、ショウのために下着を選んだのよ」

それは肌触りのよい真っ白なシルクの下着だった。

それから、全てが終わつたあと、スンはベッドを抜け出して、氣を失つたままのアリスを客間の布団に連れて行つた。

私は思うのだ。

アリスの様な娘が、私の様な男を最初の男に選ぶと云うことの意味を。

実際、アリスは震えていたし、恐怖を感じていなかつた筈は無い。

それでも、私の前に、その体を晒して、それを望んだのだ。

初めてで快感など望むべくもなく、あるのは、ただ痛みだけ。

そして、実際、アリスは終わる頃に、極度の緊張と痛みで、氣を失つた。

生半な覚悟ではなかつただらう。

暫くして、スンは私のベッドに戻つてきた。

「シユン、ありがと」

「へんなの・・・」

私にはそれしか云えなかつた。

朝になり、私が起き出す頃、スンも田を覚まして朝食の準備を始めた。

いつもと同じ、トースト、目玉焼きにコーヒーだ。

私が食べている間に、スンは一度客間に行つて様子を見てきたようだが、特に何も云わなかつた。それから暫くして、アリスが恥ずかしそうに台所に現れた。

実は、私自身も死ぬほど恥ずかしいのだが、此処は・・・此処だけは、何気ないふうを装つのが“男のプライド”というものだ。

「おはよう、アリス」

「おはよっ、あなた」

飲みかけのコーヒーが勢いよく逆流して“男のプライド”が粉碎されましたよ？

幼な妻ですか？

スンによると、アリスは随分早くに田を覚ましていたらしい。でも、

昨日の今日で、どんな顔で、私に会えればいいか解らず、布団の中で考えていたらしい。

更に、スンとの事もあり、スンと同じように“ショウ”と呼び捨てにするのも躊躇われ、かといって“旦那様”もあり得ない。（よ、よかつたあ）

さつき、スンが顔を出した時、それでは“あなた”で、どうか？といふことで話しが纏まつたそうだ。・・・いや、纏めないで欲しいのだが・・・

結局、私の呼び方は一人とも“ショウ”になつた。

その後、昨夜考えていた今後の対策について話し合い、概ね、私の計画どおりにすることが決まった。まあ、取り敢えずではあるが・・・

それから、朝食の後は、一人はシャワーを浴びると云つてお風呂に向かつた。

考えて見れば、昨日は一人とも私に抱かれた後、そのまま寝つてしまつたので、特にアリスについては、初めてだつたこともあり、入浴を希望したのだ。

痛みや、出血については、自分で治癒魔術を使ったので大丈夫だそうだ。だが、私としてはちょっと悔しかつたので、微々心を發揮することにした。

「あ、アリス。昨日は、とてもよかつたよ」

アリスはそのままお風呂場に逃げて行つた。

ざまあああ！

大人気ないともいう・・・orz

それから数日間の事については、特に語ることが無いが・・・

昼間は大体、スンとアリスの指導のもと、私は例の部屋で一人を相手に剣術と魔術の訓練を行い、更に、こちらの科学知識を魔術に応用した体術を試していった。

その結果、驚いたことに、こちら側では空想でしかなかつた技の幾つかが、実際に実現できてしまった。

まあ、なにかの役には立つかもしれない。

勿論、転移魔術については、アリスが来る以前から自主トレしていたが、アリスのお陰で随分自由に使えるようになつた。
あの日以来、“息をするように”とは行かなかつたが、キレた時だけ使える魔術なんで、私に云わせれば“ウンコしながらじやないと使えない”のと同じだつたから、これは重点的に頑張つた。ほめて！えらい？

そうして暫くの間は、忙しく？動き回り、私は一人を置いて買い物に出かけ、なけなしのお金を叩いて、幾つかの物品を購入して“押し入れの異世界”に持ち込むことにし、購入した物品の一つを使って、生まれて初めて髪をダークブラウンに染めた。

スンには、宰相閣下から呼ばれているのに、こんなにのんびりしていて良いのか？と聞かれたが“いいいんです”と答えておいた。呼ばれたからと云つてホイホイ出て行つては、「風の旅団」と私の関係が親密であることを証明することになるし、お互の立ち位置が上下に確定する事になりかねない。

交渉前から下手にでることはないのだ。

私のスタンスとしては、遠回しながら“呼ばれたから、仕方なく来てやつた”位でちょうどいい筈だ。

そして、結構大量の荷物を持って、さあ行こうとした時、アリスが云つた。

「あ、ラーメン買つの、忘れたわ・・・」

3.1 出発しますか？（後書き）

自主規制がはいつてしまつた。
ごめんなさい。

32 スパイこっこですか？

以前やつて来たときと、何ら変わりのないクブスリーの町にやつて來た。

二度目となるとある程度の余裕があるので、私は行商人や農民と思しき人々に混ざつて、さっさと“一人”で門をくぐり、クブスリーの町に入った。そして、アリスから教えられていたとおり、ギルド近くにある「太陽と月亭」という中程度の宿に部屋をとった。ここは、町の入り口に近く、冒険者だけでなく、行商人が多いと云われる宿で、そこの人気があるそうだが、まだ冬季で農閑期であるから空いている。

「部屋はありますか？できれば一番広い部屋が良いのですが？」

「あいよ！うちで一番広い部屋だと二人部屋だけど？」

「じゃあ、それで。暫くしたら連れが来るかもしれませんから」

私は女将に三日分の宿代を支払い、背中に担いだ大量の荷物を指定された部屋に運びこむと、窓を薄く開けてとおりを観察した。今のところ、私の尾行は無し。

頭から被っていたフード付きマントを脱ぎ、階下におりて茶を飲みながら待機していると、暫くして、明るいベージュのフード付きマントを被ったスンとアリスがやつて来て、同じように二人部屋を頼んで部屋に上がつて行つた。

私は、ゆっくりお茶を飲んでから、何食わぬ顔で、自室に戻るよう見せかけて、スンとアリスの部屋を訪れた。
決めてあつた合図をしてから部屋に入ると、スンは私がしたように表通りの気配を探り、アリスはベッドに腰掛けて探査魔術をためしていた。

「大丈夫そうね。ここを見張っている人間はいないわ」

それから私の荷物の一部をスン達の部屋に運び込み、アリスはギルドへ、スンは図書館へ向かつた。

アリスは私がこの町に来ていいかを聞きに、スンはコラン伯爵について調べるために。

まあ、ある程度の偽装をしつつ敵を知ろうと、そういうことだ。この世界にネットがあれば楽なんですがね・・・

「シユン。本当に此処まで警戒する必要があるのか？」

その夜、私の部屋に集まつたスンは少しだけ、懐疑的な表情で私に訪ねてきた。

「さあ、どうだらうね？」

「まさか、シユンの云つてた“スパイ”云々とかが遣りたかっただけとか？」

「ふ、ふはははは・・・そ、そんなことないよ？」

最近、というか、この二人は非常に息が合つてゐる。

詳しく述べたところでは、そもそも“見た目は子供、頭脳は大人”なアリスが、スンに懐き、勝手にお姉さん的な役割を担つてきたのだとか。

それは、女同志で助け合つ、支え合つと云つて意味で、親友になるに十分な関係だつた。

ところが、私との一件以来、立場が逆転とまではいかないが、対等に近づき、更に何でも話せる関係になつたのだそうだ。

それまでは、スンには男に対するトラウマが、アリスには男に対す

る免疫がないところで、こと男に関しては話したり、相談したりすることはないかららしい。

実際、スンとアリスは私の知らない所で、情報交換をしているようだ。

久々にいつとくかあああ！？

男子諸君！私の短い社会人生活での教訓に『給湯室には顔を出せ』とうのがあるのだが、これはすごいよ？全く異なる部署の女子が普通にお話ししているのだが、お陰で私は当時、はあ…？という情報が、異常に早く入るようになっていた。

どのくらい役立ったか？投資としてゴイバのチョコレートの10や20、ホワイトティー（義理）のお返しくらい安いもんだったね。

あんま関係なかつたか？

まあ、女性の情報網を侮ってはいかんといつお話しだ。

それは兎も角、その翌日、一人が情報収集のために外出している間に、私は一人で寂しく“自分の部屋”にいたわけだが・・・ちゃんと別の情報をキャッチしていた。

二人が部屋を出てから1時間程経つた頃、“一人の部屋”に侵入者があつたのだ。

窓を閉めていたため、薄暗い中を、中年の男と、それよりは下といつた感じの行商人風の男が入つて来たのだ。
いらっしゃあああああイ！待つてたよオ！

「魔術によるトラップは解除したか？」

「勿論だ。と云いたい所だが、トラップは無かつたぜ。実力Aクラスマジシャンと聞いていたが、まあ、迷宮探査じやねえしな」

「余計な事はしゃべるな・・・直ぐに荷物を調べろ、他の物には手触れるなよ」

二人はスンとアリスの荷物を、音も立てず実に丁寧に漁つて中身を調べると、チイツと舌打ちして、元通りに荷物を戻していった。お見事、プロだね！

「何か、手がかりに成りそうな物はあつたか？」

「いや、ねえな・・・これはなんだ？・・・変なもんばっかりだな」

男が手にしたのはアリスのレースの下着だったが、その正体が解らず男は元に戻した。

結局、成果なしで二人は部屋を出て行つたが、私の方は十分な成果を上げた分けて「パソコン」と暗視機能付きの「ハンディカメラ」の映像を消してから、先に“自分の部屋”を出て、階下に降りると二人が宿を出るのを待つた。

後は戦果を拡大するだけ・・・

アリスによると、魔術師なら誰でもできると云う分けではないが、魔術師は他の魔術師の魔術師使用が探知できるらしい。だからこそ、逆にアリスにはトラップを仕掛けないように頼んでおいたのだ。そして、探査魔術を使えば、この宿の中の人員配置も解るから安心して仕事が出来る。

だから、忍び込んでくるなら魔術師と考えていた。

そこで、私は、魔術を使用しない純粹な科学技術で侵入者の姿と声を捉えた分けだ。

ビバ！科学技術！

まあ、監視モニターなんて直ぐ気が付かれるかもしれないが、気付かれても何なのか解らないだろうという予測はたててあつたので、カメラは窓の下に置かれた古ぼけた椅子の底に、ガムテープで止めとおいた。

映像が横向きになつたのは、ちょっと辛かつたが・・・

「で、その二人の宿は何処だつたんだ？」

「聞いてびっくり、春の風花亭」

「成るほど・・・ずっと網を張つていたのね。次はどうするの？シン

「ユン」

二人には、私の機材について教えてあつたが、流石にその性能に驚いていた。

「簡単なことだよ。遣られたら遣り返す。明日にでも一人には宿を変わつて貰うよ？」

「解つた。しかし、このカメラとは大した物だな。動く絵を記録するとは・・・向こうでは何を記録していたんだ？」

「おじさん。それはちょっと、云えないなあ・・・ははは！」

32 スパイっこですか？（後書き）

PV100万アクセス・ユニーク13万アクセス 突破しました。
ありがとうございます。

33 何か出ましたか？

それから三日ばかりの間、例の二人組は、日中はスンとアリスの監視を続け、夜は宿で連絡役と思しき男と接触していた。勿論、二人組の部屋と、いつも夕食を食べる宿のロビー兼食堂のテーブルには盗聴器を仕掛けた。

監視していると思い込んでいる方が、実は監視されている分けだから、二人組を此方の思い通りにコントロールするのは実に簡単だった。

しかし、盗聴の結果わかったのは、あまり芳しくない情報だった。まず、彼らの目的は“黒髪の魔術師”を探し出すため、接触する可能性の高いアリスを監視すること。この分だと、ダークさんとグスタフさんにも監視がついていそうだ。

次に“黒髪の魔術師”と共に姿を消したスンスール・オードランの行方と、噂通りに、本当に若返ったのか、を確認すること。

これについては、アリスと行動を共にする少女がスンスールであることを確認するため、以前からスンを見知っている者が呼び寄せられて、確認されてしまった。

「やはり、目標に関する情報は無しか・・・しかし、スンスールに関して確認が取れたのは僕倅だったな」

「ああ、けどよお。俺達は何時まで女の尻追っかけてりやいいんだ？」

「それについては、指示が来ている。明後日までに進展が無ければ、スンスールだけでも確保して帰還するように、とな。その為の人員は既に町に入っている」

「大丈夫なのか？相手は実力Aクラスの魔術師とBクラスの剣士だ

ぜ？」

「問題ない。来るのは死番隊から5人だ。それに俺達二人。十分だろ」

「うひやあ、死番隊かよ？あのお嬢ちゃん達も可哀想に」「宰相が動いている。殿下の命令は殺すなだが、多少、傷つけようと確保できればよい」

と云う会話があつたので・・・積極的に手加減は無し、で行くことに決定。

その日のうちに、二人組と町に入つていた御大層な名前の5人組には、それぞれの宿で出される食事と酒に魔獣用のお薬を混せて、ぐつすりお休みして貰い、スンの用意した馬車で運び出しした。

これが、彼らに直接アリスの魔術を掛けたのなら、直ぐに気付かれて対処されてしまったかもしれないが、アリスが軽い幻術を掛けたのは、それぞれの宿の従業員で、その従業員は何も知らずに、遅効性の薬が入った料理や酒を“勘違いして”運んだだけだ。

お休み中の男達を、運び出す時も同じ。

「魔術をこんなふうに使うなんて、考えても見なかつたわ」

「見事な手並みだが、シュンは向こうでどんな仕事をしていたのだ？」

「科学至上主義も危険だけど、魔術至上主義も危険だつてことだね」と
スンは見事な手並みと褒めてくれたが、アリスから魔術師の特性とかをレクチャーして貰つていたし、これは麻薬の運び屋がよく使う手だ。

全く何も知らない観光客の荷物に、麻薬を忍び込ませて運び出させ、国内で適当な理由をつけて麻薬を回収。

観光客本人に悪意が全くないので、警察や入管で不審に思われるよ

うなことはなく、万が一ばれても、捜査官が麻薬の運び屋まで糸を辿るのが極めて難しい。

早朝、まだ、太陽が顔を出す前に、私達は馬車でクブスリーの町を出て、郊外の転移魔法陣に通じる道を進んだ。いつもの丘を越えた所で脇道にそれ、人目の付かない森の傍まできてから馬車を止めたと、三人とも馬車を降りてトコトコと町に向かって歩き出した。もう、そろそろ、かなあ、と思っていたら、案の定、私のヘッドホンに声が聞こえてきた。

「死んでいるのか？」

「・・・いいえ、隊長。眠らされているだけのようです。しかし、見事なものですね。我々ではこいつらを捕らえるのに、何人犠牲になることか・・・」

「まあ、いい。そいつらは伯爵様の下へ運ぶ。いろいろ聞きたい事もあるしな」

「ですが、どうしてこいつらを馬車ごと放置したんでしょう？」「単にじやまだから捨てたか？或いは、俺達がいるのを知つていて、くれたのか？」

「はは、まさか？でも、これで、わつきの男が“黒髪の魔術師”で間違いないですね」

「ああ、どんな魔法なのか、まさか、髪と目の色を変えていたとは思わなかつたが、その件も含めて伯爵様に報告して來い。私は引き続き監視を続ける」

それきり、会話は途絶え、あとは馬車の動き出す音がして、男の独り言が聞こえてきた。

「しかし、何でこんな面倒な縛り方を・・・」

必要もないが云い分けしておこう・・・趣味だ！

むさい男連中を縛る際、ついつい、自宅に残してきた“本さんと雑誌さん”を思い出してしまったのだ。ちなみに、彼らは相変わらず、押し入れの扉を固定しており、かれこれ、2か月近く放置プレイに興じている。

喜んでくれているかどうかは、聴いてない！というより、聴かない！！

ちょっと事情説明。

連中が“殿下”と呼ばれる人物の命令で動き、そして、その目的は、もうもろの状況を勘案して“若返り”である可能性が高い、ことが解る。

更に、それと対抗？しているのか、宰相で伯爵のコランという人物。こちらも、微妙に物騒な連中を使っている様子。

私が、スンとアリスを監視する者達が、例の二人以外にも居るかもしれないと思ったのは、その一人が云つた“宰相が動いている”という言葉。

実際にいるのかどうか解らなかつたのは、例の二人と違つて能動的に活動せず、身体強化をつかつて遠くから監視し、仲間との連絡も基本的に念話を使つていたためだらう。

しかし、これについては、最初の二人組の監視を外した時でも、スンが“鋭い視線を感じることがある”と主張したので、まあ、間違いないだらうと踏んだ。

馬車ごと放置したのは、別口の監視者をおびき出して何者か確認するためで、当然、盗聴器を馬車に付けておいたのだ。その目的も果たしたので、私達は町まで結構な距離の散歩を楽しんだ。
それにしても、かなり厄介なことになってしまった。

連中を縛りあげて捨てたことで、クブスリーには別の、もっと危険

な者達が派遣されてくる可能性がある。潮時かな？

私は明日にでも、クブスリーを離れる決心をして宿に戻ると、髪の色を金色に染め直し、カラー・コンタクトを緑からブルーに変えた。もつ、私が目や髪の色を変えられることはバレテいるから、今更、意味があるとは思えなかつたが、まあ、嫌がらせかな。

私の歳で髪の毛を虐めるのは自殺行為なんだが・・・

その夜は久しぶりに「春の風花亭」に移つて、スンとアリスの二人を相手に爛れた一夜を過ごし、すつきりした所で、三人で朝食を食べてから荷物をまとめて宿を出ることにした。

しかし、まあ、世の中は“予定は未定”とか“計画は計画した時から崩れるもの”とは良く云つたもので・・・

その人は、私達が朝食を取つてゐるそのテーブルに、堂々と姿を現して私の前に立ち、にっこりと微笑んで、声を掛けてきたのだ。

「・・・お食事中、恐れ入ります。シウン・ムラカミ様、で、いらっしゃいますね？」

「いいえ、人違いです？」

34 王都に行きますか？

クロード・フォン・コラン伯爵。

グラントバル王国の南方に位置する広大な領地を有する王国有数の名家、コラン伯爵家の現当主。伯爵家は従来国政に消極的で、中央政界に参加する意思を見せなかつたが、今代の頭首に限つては、10代で積極的に国政に参加。

その聰明かつ鋭敏な政治資質を買われ、当時の宰相クリント・フォン・ウォーカー侯爵の推挙を得て宰相補佐に就任。更にその5年後、ウォーカー侯爵の引退の際に、王に請われて宰相に就任。42歳。妻と二人の子供あり。

以上が、ここ数日の中に、スンが調べたコラン伯爵に関する情報だ。一言で云つて30代後半で王国宰相になるような、ある種の化け物だが、今、私の前に立つてている人物はとてもそうは思えない。当たり前だ、どうからどう見ても、その人は女性だったから・・・

「はじめまして、サリー・アン・ウッズと申します」

サリーと名乗った女性は丁寧に挨拶した。

さあて、これは何が始まるのかなあ・・・

そう思つていたが、礼節には礼節をもつて返すのが信条であり、交渉術の一歩でもある。

「これは『一寧』に。私はシュン・ムラカリと申します。失礼ですが、サリー様とは何処かでお会いしたことがございましたでしょうか？」

ワンポイントアドバイス！

質問は早い者勝ち。これで、主導権を握ることができぬ・・・かも

しない。

ちなみに、私があつさり本名を名乗ったのは、ズバリ聽かれたこと、だからだが、その他にも、この女性のいで立ちにも大きな原因がある。

グレーのロングヘアに青い瞳、背は私と同じ位で、所々に白のレースをあしらつたダークグリーンのドレスは、肩に少し余裕を持たせてあるが、手首までしっかりと包み、腰の辺りから僅かに膨らんだロングスカートが上品で、恐らく30代後半の年齢にぴったりの美女だった。

そしてなにより・・・モツフモツ！！！

尻尾は見えないが、頭の上にモフモフの耳があ・・・！！！

「サリーとお呼びください。シュン様とは初めてお目にかかります。どうか、夫にお力を貸し頂きたいのです」

「まあ、立つたままでは何ですから、どうぞお座りください。ああ、私のことはシュンで結構です。失礼ですが、ご主人?とおっしゃいましたが、それが何方なのか?検討が・・・」

「これは、失礼いたしました。夫の名はクロードと申します」

はい、きましたあ・・・

まあ、宰相って仕事は王都を離れられないだろうから、他の誰かが来るかも?とは思っていたけど、まさかこんなに早く、しかも奥さんとはね。相手の意表を突くのも交渉術の一つではあるけどさー!宰相閣下、恐るべし!

まさか、私の性癖まで把握してんじゃないでしょうね?
でも、まだまだ、これからだよお・・・本人がどうか何て解らないし。

「もしかして・・・剣狼妃サリー・ウッズ?」

あれ？

私の傍で黙っていたスンが唐突に会話に割り込んで来た。

スンがそう問いかけると、サリーさんは顔を僅かに赤く染めて頷いた。

え？ 剣狼妃？ つてなに？

知ってる人？

「剣狼妃サリー・ウッズ。かつて、セルブエ王国との戦いの際に、たつた一人で百の首を取ったと云われる女傑だ。確か、その後、一介の騎士から近衛騎士になつたと聞いていたが・・・宰相殿の奥方になつておられたとは・・・」

何と云うか、スンのお陰で交渉術云々では無くなってしまった。どうも、スンはこの剣狼妃殿にいたく尊敬の念を抱いているらしく、私が主導権を取り戻す前に、ガツツリと事情を聞いてしまった。詳しい事情を聞くかどうかも交渉術の・・・もう、いいかあ・・・

「夫が申しておりました。シウン様のことを調べた結果、少なくとも、今回、クブスリーにおいてになつてからの行動は、実に見事で、下手な交渉をするより、腹を割つた上で、真摯にお願いする方が得策だと」

あ～あ。そういう情報もさあ・・・

なんか今回、珍しくサスペンス？ 路線で走つてたのに・・・ぼろぼろ・・・

結局、スンのお陰で全ての事情を知つてしまつた私たちは、サリーさんと共に王都に向かうことになつてしまつた。

まあ、私達には変な疑いが掛つてゐるらしいので、仕方なく？

「スパイゴン」はおしまいね？シュン

アリスに笑われ、今夜は、スンを虐め倒すことに決定！いや？寧ろ、スンを放置してアリスだけを可愛がるか？？？最近、アリスも感じやすくなつて来たみたいだし、一気に開発を進めるのもありか？

ぐふ、ぐふ、ぐふふふ・・・

その夜、実際に何が起きたかはさておき・・・おいちやうんだあ・・・

出発は明日に延ばされ、新たに馬車を（眠つたまま日を覚まない親切な7人の旅人がくれたお金で）購入して王都までの約三日間の旅を楽しむことにした私達。

何食わぬ顔で、美女3人に囲まれてワクテカしようと思つたら・・・あんたら、だれ？

「王国近衛騎士団第13番隊所属、小隊長サイモン・ウォード」

「同じく小隊員、キャンベル・オーラー」

馬車の前で待ち構えていたのは、厳ついおじさんと若いお兄ちゃんの一人。

よっぽど、無視してやるつかと思つたが、そこはそれ、私は大人だから。

この一人、本当は姿を現さないはずだったそうだが、サリーさんが現れて私達と行動を共にすることにしたため、護衛として仕方なく出てきたそうな。

出てこなくて良いのに・・・

そう云えど、こっちの出入り口にくるのは初めてだなあと思いつつ門をくぐると、向こうと大して変わらない道が続いている。所々に

枯れた草むらがあるが、まだ、冬季だから茶色いまだ。

しかしだ、この二つ時は普通に何か起きるもんなんだよなあ・・・
イベントが。

例えば、盗賊に襲われている美女とかを見つけて助けるとか、魔獣の群れに襲われて逃げ出すとか、野當中に川の畔とかで美女の水浴びを意図せず（ハイここ重要）見てしまうとか、神様できれば、最後の辺りで・・・

「・・・が、何にも起きん・・・」

34 王都に行きますか？（後書き）

メール下さった方、ありがとうございます。
誤字の修正はしておきました。

馬車の旅一日目、青い空が赤く色付く前に、私たちは野営の準備を始めた。場所は、だだつ広い野原の真ん中。サイモンさん曰く、森などの近くで野営すれば魔獣の襲撃を受けやすくなるつえ、接敵に気が付くのが遅れるとのこと。それ位なら、ほぼ全員が腕に覚えのある者ばかりであるし、周囲が見渡せる場所の方が良いのだそうだ。

盗賊はどうなのか？と尋ねると、王都周辺にある各都市から外側には盗賊が跋扈するところもあるが、王都を囲む都市から内側なら、殆ど心配はないそうだ。

もともと、各都市が王都を守る防壁の役割を担つように配置されているし、その間なら、王都の護衛騎士団の巡回経路にもなっている。

キヤンベルさんは、私より若いくらいなのに、手慣れた様子で瞬く間に馬車の脇に石で釜戸を組んで、そいつの枯れ草や枯枝を集めて火を起こし、湯を沸かし始めた。

もちろん、私も手伝つた。こんな野原の真ん中で、一晩火を絶やさないでおける程の可燃物の確保がどれだけ大変か！眞つ暗になつてから探しに行くのは、御免こうむる。

前に、チャックさんが蝶の塊のような燃料を使つていたが、あれ是非常用として取つておくべきもので、少しの苦労で代用品が揃えられるなら、使用しないのだそうだ。

激しく同意したい。こういうところで、手間を惜しんではいけない。お湯が沸いてお茶を入れた頃に、馬車の中で待機していた女性陣を呼んで、取り敢えず一服することにした。

「問題はソーマと呼ばれるある種の薬なのです

サリーさんは今回の事件の発端を話してくれた。

およそ1年前から王国の貴族の間で密かに回ったその薬は、その効能の素晴らしさから、瞬く間に王都の貴族を席巻した。

当初は、酩酊状態から高揚感、幸福感を生み出し、一方で、高い強壮作用によって、その状態で異性と交われば、この世の物とも思えない程の深い快感を得られるとあって、薬の奪い合いか起きるほどだった。

しかし、当然のことながら、そんな都合の良いだけの薬など有る分けが無い。

ソーマには案の定、強い副作用、中毒性があった。

宰相であつたコラン伯爵は、この事実にいち早く気付き、直ちに、ソーマの使用を“中止”するよう伝えた。しかし、その頃には、中毒患者と化した幾人かの貴族が、錯乱した上に、市民や家族まで殺害して狂死する事件が起きており、最早、公にできない国家の威信に拘わる事件へと発展した結果、極秘裏に製造元の探索と摘発が行われることになった。

「ですが、使用者は後を絶たず、一度、ソーマから身を引いても、あの快感が忘れられないといって、また、手を出す者が後を絶たないのです」

「しかし、そのソーマがどうして私やスンと関わってくるのですか？」

サリーさんは私の質問に対し、一度スンを見つめた後、話しを続けた。

「ソーマの副作用の一つが、実は、見た目の一時的な若返りなのです。ソーマの主成分は高濃度の魔素を、どうやっているのかは不明ですが、結晶化させ、それを粉末状にしてから服用するというものです。もつとも、一時的なもので、精々1日で元に戻るのですが、ショウさんには、この薬の魅力がおわかりですか？」

私は頷いた。

なるほどねえ・・・高い強壮作用で一時的に若返つて性交渉ができるとなれば、おじいちゃんおばあちゃんは大喜びだね。

「ですが、この一時的な若返りも、薬の作用としては燃え残った燃料に、高い濃度のお酒を振りまくような物で、薬の効果が切れたら、燃えカスしか残りません」

「そこにまた、ソーマを・・・」

「ええ。しかも、常習者は気が付かないうちに、服用していない時の見た目が、急激に年老いて行くのです。だから気が付いた時にはもう、ソーマを止めるのが難しくなる」

そうして中毒症状が悪化し、精神を病む。

このような事實を公表はできない。速やかに製造元を特定し、一度と製造できないように記録ともども抹消することも考えられた。實際、宰相閣下は、精力的に捜査を指示し、京都でのソーマの蔓延は下火にはなったが、製造元だけは判明せず、捜査が続けられていた。

「そんな時です。セーヒーの二重狂騒の報告が夫の下に届けられたのは、その報告書はセニエ侯爵様からのものと、夫の独自の情報源からのものがあり、後者の方に、黒髪の魔術師のことが書かれていました」

「・・・ゲ」

「たった一人で、瞬時に三体の大魔獣を倒すという偉業を成しながら、その後は殆ど戦わず、唯一人の少女を抱いて戦場を走っていた、と」

私の傍にいたスンが赤い顔をして下を向いてしまった。

あの時は、私も必死だったから・・・ポリポリ

「夫は、ソーマの問題とは別にしても、多くの人材を求めていました。だからこそ、その黒髪の魔術師殿に、お味方になつて頂きたいと考え、身辺を調査させたのです。そして、その方が大事に抱きかかえていた少女が、スンさんであること。そして、スンさんが、何故か若返っている、という噂を得たのです。」

「つまり、最初はソーマの常用者ではないかと疑われた?」

その後の調査によつて解つたことは・・・

スンが若返ったのは“一重狂騒”の直前頃で、セニエ救援隊として参加、負傷してクブスリーに戻り、その後、行方をくらませるまでの約七日近く、その状態を維持していた。

というものだつた。

ソーマという薬の副作用としてはあり得ないことだが、謎の魔術師がここに絡めば、話は変わつてくる。

「つまり、今度は、私がソーマの製造者ではないかと?」

「若返り・・・不老長寿の魔術は、もう、遠い昔に、王国魔術院でも不可能と判断して放棄した研究です。あなたとスンさんの噂を聞いた者達の中で、ソーマと関連付けて考え、接触を図りうとする者は、二つ。一つは、私達。もう一つは・・・」

「実際に作っている連中ですか・・・」

だが、サリーさん達が王都に向かっているのは、私達が逮捕された

からではない。嫌疑が完全に晴れたわけでもないのに、なぜ、敵かも知れない相手の所に奥方を送り込んだりしたのだろう。確かに、例の7人は片付けて、放置したが……

「お分かりに成りませんか？夫はソーマの撲滅のために、多くの部下を各地に派遣して情報を集めてきましたが、敵の末端の容疑者を、生きたまま一人捕まえるのに、実に、111人の部下を失いました。それをあなたは、たった数日で7人も捕らえた……」

なるほど……私は、食いついてくる魚に、逆に食いつく魚の餌ですか？

あまり、生きが良いとは云えないと思いますが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792y/>

押し入れの異世界

2011年11月30日12時03分発行